ぶどうの木

第 27 号

八幡前田教会
基督伝道隊　大濠公園教会
戸　畑　教　会

目　次

巻頭言	榎本利三郎…1
信仰告白	飯田　恵　…2
信仰告白	佐々木明美…3
信仰告白	深町　郁子…4
信仰告白	三好　翠　…5
新しい人生に	正野　敬士…6
神様を信じて	上野　孝裕…7
これまでの生涯を振り返って	上野　正裕…9
信仰告白	久保田　忍…18
主の恵み（船出する孫に）	上野　米子…19
わたしはもはや人を恐れない	…21
信仰のない私を哀れんで下さい	上田喜美代…23
主のあわれみ	大田　邦子…27
イタリア紀行感想記	正野　眞宏…33
わたしたちの先生、新聞に載る	久保田宮子…37
詩集「別れの日々」　（脆くはあるが暗くない）より	伊規須太郎…38
カナダからの手紙	西原　文江…47
手紙	…49
たくさんのお恵み	久保田宮子…50
花だより	緒方とみ子…50
父と母の死	…52
旅路	上野　米子…56
長き生涯を生かされて	猪城　なみ…58
受洗五十年感謝	廣田　壽　…62
我が思い出　（九）	鈴木　一幹…65
汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり	津留崎弘行…73
切り出された岩と掘り出された穴	丸山恵美子…75
万物は神からいで、神によってなり、神に帰するのである	林　由記子…79
林正二郎兄追悼の詩	正野　真宏…84
主の御旨が何であるかを悟りなさい	大田　敏夫…85
兄正二郎から与えて頂いたメッセージ	林　伊佐夫…93
天国のあなたへ	林　由記子…94
教会の記録（福岡大濠公園教会）	…96

巻頭言

榎本利三郎

「よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちてしななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」　ヨハネ　十二章二十四節

一九三九年一一月三日に

「わたしは神である。今より後もわたしは主である。
わが手から救い出しうる者はない。
わたしがおこなえば、
だれが、これをとどめることができようか。」　（イザヤ書四三章一三節）

と、仰せに成る主に遣わされて、八幡に参りまして満六〇年に成ります。祖国日本も、戦前、戦中、戦後とめまぐるしく、変化しました。その間に福岡大濠公園教会も八幡前田教会も戦災で灰塵に帰し、信徒も離散しましたが、主の主である方が再び新しく救われる者を集め給いました。

更に二〇〇〇年を迎えるにあたって、主が私共を用いて、多くの実を豊かに結んで、栄光を表わして下さる様祈ります。

信仰告白

飯田　恵
（前田）

私は一年半前に、勤めていたデザイン事務所を辞めました。際立つ才能が無かったからです。しかし、私は長い間、私自身に原因があることを棚に上げ、会社を辞めた原因は上司である先輩のせいだと思っていました。

私の感性の全てを否定し続けられ、ものすごくくやしくて、いくらもがいても、全部つぶされてしまう程でした。結局、最後は自分で自分を「かす」だと思い始め、社会での存在価値さえも否定するようになり、一人暮らしを始めたばかりの部屋で、顔がはれるほど泣きとおしました。

今まで、何でも自分の思いをつき通して、親に反抗し、誰にも感謝することをせず、自分の力で何でも成し遂げていると思う愚かな心を持っていましたが、やっと自分は本当に無力なのだと気づかされました。『わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。』まったくその通りでした。信仰から離れた結果だと思います。私はどうにもできなくなり、母に自分の気持ちをうちあけました。

私は、今までものすごく母に対して反抗し、腹が立つことを言われたら、何倍にもかえして言い返し、冷たくあたりました。それなのに母はずっと私の為に祈ってくれていたことを知りました。そして、『自分は「かす」なんだ』と言っている私に、『あなたは「かす」なんかじゃない』と一緒に泣いてくれて、その後、お祈りをしました。単身赴任の父も，長い航海に出る前に電話をかけてきてくれました。ありがとうという気持ちでいっぱいになり、私は、その日，祈ることと心から感謝することを知りました。

今まで、会社を辞めたのは、誰のせいでもなく、私の心がおごっていて、勝手に大きな壁をつくり、自分でぶつかっていったのだとわかりました。これまで、神様の言葉を聞くことをせず、自分勝手に生きてきましたが、イエス様は私にいつもたくさんの恵みを与えて下さいました。そして神様を信じ、神の子となる力を与えて下さいました。

これからはどのような状況でも、『あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい』、この御言葉を心にとめ、いつも神様を信頼し、祈って、感謝して、信仰を持たせて頂きたいと思います。

信仰告白

佐々木　明美
（前田）

神様の深いご愛とあわれみと、皆様のお祈りによって、この度、洗礼を受けさせていただきますことが、感謝です。

私は、とても敬虔な信仰を持つ叔母（丸山恵美子、井上文子）と、母（川越シヅエ）、兄夫婦（川越正、千恵子）といった、とても恵まれた信仰環境にありました。しかし、『見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、悟らず、悔い改めてゆるされることがない』（マルコ四・一二）とあるように、神様をおそれない生活をして、人を恐れ、肉の思いの強い、私でした。四人の子供に恵まれまして、私が頑張らなくては、どうにかしなくてはと、眉をつりあげて子育てをしてきました。大きくゆきづまり、悩み多き日々の中で、「ここでもう一度、自分を見つめ直したい。このままこれからの人生を送りたくない」と思い、榎本先生に紹介された春日部福音自由教会（埼玉県）に行きました。今まで何度となく、「悔い改めたい、新しくなりたい」と願って、足を向けたことはありました。しかし喜びを感じることができないまま、遠ざかっていて、約一〇年ぶりでした。入りづらい気持をおさえて、前に立ちましたら、以前と何も変わらず、暖かい笑顔で迎えていただき、受け入れて下さったことが、感謝でした。讃美歌を歌いながら、涙がとまりませんでした。

『すべて重荷を負うて、苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。』（マタイ一一・二八）、この御言葉が悩みの間、頭にあった私は何だか体の力がぬけて、帰るべきところに帰ってきたんだという思いを、日々感じながら、毎週の礼拝に出席させていただいております。そして『主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。』（使徒行伝一六・三一）。この御言葉を信じさせていただく力を強めていただきたいと願っています。

『あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る。』（イザヤ三〇・一五）。失敗ばかりの私ですが、その度に立ち返らせていただいて、神様のお言葉に無条件で従い、信じて、歩んでいきたい、そしてそのように主が私を導き守って下さるようにと、祈っております。

今後ともお祈りをお願い致します。

信仰告白

深町　郁子
（前田）

私の書棚には娘が学生時代に使った聖書と讃美歌がありましたが、私は一度も開いたこともなく、何が書いてあるのか全く知りませんでした。こんな私を主は導いて下さいました。

友人から「キリストの集会があっているので来てみない」と誘われ、何の考えもなく、ついて行ったのが海老津の集会でした。

聖書が何であるかも知らない私が集会に出させていただくようになったのですが、野村先生の説教が始まると、眠たくて眠たくてどうしようもなく、何とか目を開いていようと、そのことばかりで何も分かりませんでした。

ただ、そこでお会いした皆さんは始めてお会いする方ばかりなのに、ずっと前から知っている方達のような親しみを覚えた事を、今でもはっきり思い出します。

こんな状態をくり返しているうちに話はさっぱりわからないけれど、又次週も行ってみようという気になって、毎週出させていただきましたが、二、三ヶ月後に集会は終わりました。何もわからないまま、又、聖書を読むこともなく過ぎ、野村先生にも二度とお会いすることもなく、先生のやさしいお顔だけが思い出されます。

ところが神様はこのような私を見捨てにならず、次々と問題を与えて、呼びかけてくださいました。娘の度重なる流産、両親の死と問題に追われ、神様の呼びかけにも気づかず、祈ることさえ忘れていました。そんな時、また友人から「教会に行って、榎本先生に祈ってもらったら」と言われ、そうだったと気づき、それから教会に行くようになりました。日曜礼拝、木曜会と出させていただきましたが、ただ先生の説教を聞いて帰るだけでした。「信仰をもちましょう」と言われても、かえって迷うばかりでした。

祈っても祈っても心は満たされず、体の不調が続きました。「どうして」「何故」という思いが、一日中頭の中から離れなくなり、とうとう「信仰ノイローゼ」になり（これは私がつけた病名）、長い間こんな状態が続きました。それに追い打ちをかけるように、今度は夫の入院とますます悪い状態になり、とうとうおもいあまって榎本先生に祈っていただきました。先生から「あせらず、ゆっくり、神様がどんな方であるかを知ることですね」と教えていただき、それから聖書を真剣に読みはじめました。しかし聖書は難しくてよく分からず、分かるところだけをとばしとばし読みました。何とか一通り読み終えましたが、まだ心は満たされませんでした。

そんな時に岩隈さんが榎本先生の説教テープを貸して下さり、毎夜テープを聞き、感謝の日を過ごすようになり、又、金生先生の早天祈祷会のテープを聞きながら、いっしょに聖書を読ませていただき、先生の分かりやすい説明がご経験を通して一章一章教えられました。

このように神様はいろいろな中を通して、頑固な私を不思議としか言いようのない豊かな気持ちにさせて下さり、多くの恵みを与えて下さいました。

弱りはて、挫けそうになると、「強く、また雄雄しくあれ、主が共におられるゆえ、恐れてはならない」と強めて下さり、又自分の思い考えで走って行こうとすれば、「あなたがわたしに聞き従うことを望む」と警告を与えて下さる。その主が私と共にいて、いつくしみとあわれみをもって支えて下さる。本当に感謝にたえません。

榎本先生がいつも「神様を手触るように知る事」と言っておられる事が、今、少し分かるような気がします。

『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。

すべての事について感謝しなさい。』

皆様のお祈りを心から感謝致します。

信仰告白

三好　翠
（前田）

私が何もわからず、イエス様のお話、聖書のことを聞いたのは、中学生くらいの時のラジオ放送でした。日曜日が待ちどおしかったのを思い出します。でもそのようなことも、時がたって、自然と私から遠のいてしまいました。

二十才の時、主人と出会い、お父さんがクリスチャンだったこともあり、教会のことも再び知るようになりました。お父さんと一緒に礼拝にも出ました。だけど、分からないというのが実情で、その結果、長い年月、教会とも離れてしまっていました。

その私が又、教会へ足を運ぶことになったのは、やはり父の死でした。死を前にして、父がイエス様を信じている姿はおだやかでした。

先生の祈りの中で、私自身もそうなりたい、イエス様と歩いていきたいと思いました。まだまだわからないことばかりですが、ただイエス様のことを信じて、これから生きていきたいと思うだけです。

私の人生で、こんなにすばらしい信仰が生きがいとしてあることに気づいたのです。皆様の祈りの中に加えていただき

たいと思います。

新しい人生に

正野　敬士
（大濠）

私は今まで自分自身のために生きてきました。自分が欲することをし、自分の欲望が赴くままに生活してきました。教会には、生まれる前から（母の胎にある時から）来ていたにもかかわらず、そのような生活を十九年近く続けてきました。何度となく教えられ、暗唱した聖言を無視して、自分が神になっていました。そんな状態では平安が自分の心にあるはずはありません。常に何かに追われているような焦りや苛立ちが自分の心にあり、まさに追われている罪人の状態でした。

しかし、神様は本当に愛なる方でした。私に一つの事を起こされたのです。それは、母がある日、「伝道集会に出席しなさい。おこづかいを割増してあげるから」と言いだしたことです。ちょうど欲しい物が沢山あった私は「うん」と答えました。そして実際、伝道集会に出席するようになりました。しかし、最初のうちは説教に耳をかさぬどころか、居眠りばかりしていました。

ところが、そうして出席するようになってからばらくして、神様は私に一つの思いを与えられました。なぜかその日は説教を聞こうという気になったのです。そして今まで耳も向けなかった言葉に耳を向けるようになりました。またもう一つ神様は素晴らしい変化を私に与えられました。母からお金を貰うのをやめようと思ったのです。それはなぜだか無性に恥ずかしくなったからです。別にお金をもらっていることを人に知られたわけでありません。ただ何か恥ずかしくなったので、お金をもらうのをやめ伝道集会に続けて出席するようになりました。神様に対して恥ずかしさを感じたのです。

そして、不安の原因は自分がイエス様から離れているためで、イエス様が自分を放り出しているためではない。それどころか、イエス様は逃げようとする自分でさえも、しっかりと手の中に掴んでおってくださるということを知ったのです。この十九年間、イエス様から逃げようとした人生でした。し

かしもう降参です。自分に死んで、神様の御手に自分を委ねるとき、イエス様が私の中で生きて下さることを信じます。

私が命名されるとき、両親が神様から与えられた聖言は、「足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」（出エジプト三章五節）です。これは私の生涯のお言葉となりました。十九年の間、少しも達成することのできなかった聖言です。しかし、今、自我というくつを脱いで、イエス様が自分の中で生きて下さる人生を願っています。

（一九九九年三月二十一日、洗礼式での信仰告白です。）

神様を信じて

上野　孝裕
（大濠）

私はクリスチャン・ホームに生まれ、二十年間両親と共に教会に出席していました。そして、両親が信じている神様を信じていました。しかし、神様を信じているつもりでしたが、教会に出席している時だけ信じているという生活でした。私は何不自由ない生活で、恵まれているのに、不平・不満ばかりで感謝することができず、神様を喜ぶ事も少なく、身勝手でした。そして、困った時だけ神様にすがっていた不信仰な者でした。

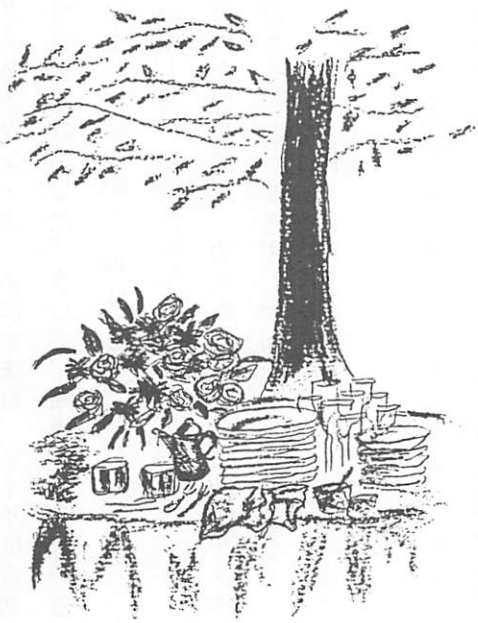
しかし、二年前に父が受けた手術後の面会の時に、まだ意識がはっきりしていない父が、「僕の受けた痛みより、イエス様はもっと大きな苦しみを受けたよ」と言った時、私は神様が生きていらっしゃると思いました。その時、私の心に伝道の書三章十一節のお言葉、「神のなされることはみなその時にかなって美しい」とのお言葉が与えられました。あんなに大変な手術の後なのに、こんなことを神様が父に言わせられたのは、このときでなければ私に教えることが出来ない神様の御心だったと信じます。それなのに、私は素直に神様に従うことが出来ませんでした。でも、神様は私の名を呼んで

イエス様の十字架の血潮によって私の罪を許してくださって、私を神様のものにしてくださり、私を救ってくださいました。

父が退院した春に、私は専門学校に進みました。学校は楽しく、神様の事は日曜日だけで忘れてしまい、あとは友達との交わりばかりに忙しく過ごしていました。二年生になり、就職の問題にぶつかりましたが、おばあちゃんを始め、家族の祈りに神様は答えて下さり、何の苦労もなく就職が決まりました。今思うと、神様の一方的なご愛と憐れみであったと感謝します。秋になった時、卒業を控え、真剣に自分の信仰について考えるようになりました。丁度、年齢も二十歳になり、成人式を迎えて、独り立ちして社会に出て行くのに、どうなるかと不安を覚えました。そのような時、高校を受験する不安な時に与えられたヨハネの黙示録二章十節、「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあうであろう。死に至まで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。」のお言葉でいつも力づけられて、いつも私の心の中にありました。

いよいよ今年に入って、学校も卒業し、就職先の指示で、東京に行くことになりました。今、こうしてイエス様が私の救い主であると確信し、生涯、イエス様と共に生きる決心に導かれました。まだ本当に神様の事も分からないし、自分の我が出てしまう愚かな人間ですが、私は神様を信じます。

（一九九九年三月二十一日、洗礼式での信仰告白です。）



これまでの生涯を振り返って

上野　正裕
（大濠）

私は、母の胎にいるときからずっとクリスチャンホームで育ちました。しかし、その歩んできた道はイエス様からはほど遠く、自分の欲望のままに生きてきたように思います。確かに、イエス様のいることは知ってはいましたが、親の信じる主を信じているにすぎなくて、自分とはほど遠いもののように感じていました。しかし、こんな自分勝手で中途半端な私でしたが、主は今まで忍耐と恵みと愛とをもって導いてくださいました。

物心がつくころには、私はもう日曜日に教会に行くということが当たり前のことであり、自分の生活習慣の一部となっていました。ですから、神様を信じているようで信じていない自分があり、自分からイエス様を信じているとはいえませんでした。幼稚園から小学校3年生ぐらいまで、病弱でけがなどもよくしたものですが、そのような時には“神様はどうしてこんな苦しみにあわせるのだろう”とつぶやいていたのですが、こんな小さなころから、主は私に神様のいることをなんとなくですが気付かせてくださいました。ですが私自身、自分の欲望や思いのままに自分勝手に生きるようになっていました。高学年になると自分のわがままも通じなくなり、人と衝突することが多くなりました。そして、いつしかいじめられるようになり、学校に行くのがとてもつらくなりました。これが小学校4年生のころで、本当に苦しくて悩みました。親にも友人にも誰にも相談することができないくらいに苦しんでいました。しかし、私はこのとき神様に助け求めていました。でもこのことによって主を求めることができたのは幸いでした。やがて主は、私の助け求める声を聞いてくださり、苦しみから開放してくださいました。しかし、このころから、人の目を気にするようになり、人前でも親の前ですら自分をつくって演出し、人を恐れるようになっていきました。その結果、毎週教会に導かれているにもかかわらず、毎日が不安で仕方がありませんでした。そんな不安な気持ちを小学校卒業まで持ちつづけていました。それでも、主を離れ、恐れの中にあった私を、神様は見捨てることなく教会へ毎週導いてくださいました。そして「はやく日曜日になってほしい。教会へ行きたい。」という思いまで与えてくださいました。

中学校に入学してしばらくの間は、そんな不安の中にいました。しかし、何とか自分自身変わりたい、こんな不安な気持ちのままいたくないと思い、サッカー部に入部しました。そこの先輩方はほとんどがヤンキーいわゆる不良でしたが、

サッカーをしているときの先輩方は、本当に楽しそうで真剣でした。そんな人たちと交わってゆくなかで、自分が人の目を気にして、顔色をうかがったり行動したりするのが、恥ずかしく、また馬鹿らしく思えてきて、いつのまにか人を恐れる事をしなくなっていました。主はこのとき今まで苦しんでいた私の心のうちを知ってくださり、私が努力したわけでもないのに少しずつ私の心を変えていってくださいました。それから、中学一年生の二学期も終わるころに、主はまた一つ苦しみを与えられました。それは、小学校のころ児童会役員をやっていたということで、生徒会役員をしてくれないかと頼まれたことでした。小学校のころは先生方の助けがかなりあったのですが、話し合いや校内新聞の作成などかなり大変な経験をした覚えがあったのですが、そのときは何の迷いもなく“やります”と返事をしました。しかし、実際にやってみるとかなりたいへんでした。おかげで勉強に部活に生徒会にと充実した毎日を送ることができたのですが、一方、だんだん神様から心が離れていきました。生徒会二年目に書記の仕事をまかされたのですが、これが本当にすることがたくさんあって部活にもなかなか行けなくなりました。そして、部員に文句ややじや陰口をたたかれるようになり、部活に行ってもギクシャクした感じがあり、さらにそんな状態で生徒会に行って、役員同士の話し合いがうまく行かず、話し合いはこじれるし、けんかになるしと話し合いにもならず、いろいろな行事が次々と迫ってきているにもかかわらず、まだ何も決まっていないなどで、焦りや不安やイライラがつのるばかりでした。ついには生徒会の中で溝ができてしまい、一時期は生徒会の運営すら滞っていました。このとき私はなかなか神様に立ち返ることができないでいました。生徒会に入ったころは、何もわからなかったので、へりくだった状態で仕事や勉強を一生懸命だった自分が、いつのまにか自分で何でも取り仕切ることができるように思い、自分の力や知恵、考えで行動し、高慢になっていました。このような苦しみの中から、いつしか主の助け求めていました。神様はこんな自分勝手な私の祈りに答えてくださいました。生徒会全員でお互いに話し合う機会が与えられ、自分達の意見を出し合い、相手の思っていること・考えていることを聞き、また知ることができました。それからは、苦しく忙しい状況はすぐに変わりませんでしたが、お互いが信頼して活動することができるようになり、主は私のうちに喜びと平安とを満たしてくださり、感謝しました。

やがて部活も生徒会も一段落し、高校受験について考えるようになりました。しかし、このころ女の子と付き合ってい

たり、ほかにもいろいろあって、なかなか気持ちが定まらない状態で苦しんでいました。年が明けて平成元年になり、そんな不安な中にあった私に、主は御言葉を与えられました。まず、イザヤ書四十一章十節の御言葉、

「恐れてはならない、私はあなたとともにいる。驚いてはならない、私はあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。」

しばらくしてヨシュア記一章九節の御言葉、

「わたしはあなたに命じたではないか。強くまた雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」が与えられました。

この二つの御言葉に共通することは、恐れてはならないということと、主が私と共にいてくださるということでした。結局のところ、私は、自分の中では人の言葉や状況などを恐れていないと思いつつ、やはり人の目、言葉、状況を気にしており、それが恐れや不安となって私のうちにあり苦しんでいたのだと知りました。この御言葉によって本当に内側に力が与えられ、勇気と喜びが注がれました。そして、主は進むべき道をそなえて下さいました。

高校に入学してからは、日々平安に満たされ喜んで学校へ行くことができました。小学校や中学校のころの自分とは本当に違っているということが、うれしくて仕方がありませんでした。クラスの人ともほとんど友達になり、中学校の頃、教会で花田 仁兄と始めたのがきっかけとなったバンドもクラスの人と組むことができました。すべてが順調に行っていましたが、主はまた一つ苦しみを与えられました。六月頃、クラスのある女性に告白されました。しかし、そのとき私は中学の頃から好きな人がいたので、普通なら断るところなのに、「いいよ」と返事をしてしまい、これではいけないと思いつつもなかなか言い出せないでいました。そんなとき、友達に「あの子と付き合うのやめたほうがいいよ」と言われその言葉を聞き入れてしまい、すぐに断ってしまいました。その時はそれで終わったと思ったのですが、「人は自分のまいたものを刈り取ることになる」の御言葉のとおり、それでは終わりませんでした。なんと私が人の言葉に流されてその女性をふったというわさが学年中に広まり、最低の人間というレッテルを貼られてしまいました。私自身は全くそういうつもりで断ったつもりはなかったのですが、そのうわさを聞いてからというもの、自己嫌悪に陥り、何か人間としてのどん底まで叩き落された感じで、もう二度と立ち上がることはでき

ないと思いました。そして、勉強は手につかなくなり、教会に来ても御言葉が心にとどまらず、祈りも形だけのものとなり、何をやっても無気力でした。本当に最悪の状態になっており、自分でもどうすることもできなかったので、眠れない苦しい日々を送っていました。悩み苦しんだあげく導き出した答えが、「人はもう二度と信用しない、もう誰も愛さない」というものでした。私は心を完全に閉ざし、誰にも心を開かなくなり、当り障りのない人間づきあいをするようになりました。勉強は全くしなくなり、バンド活動だけにのめりこんでいきました。このとき私は、神様に素直に立ち返ることができませんでした。三年間私は心をかたくなに閉ざしていましたが、それでも神様は少しずつ少しずつ私の心を開いていってくださいました。神様に心を向けずに自分の思いと自分の欲望のままに生きている自分勝手なこんな私でさえも、見捨てることをせず、かえって恵んでくださり、また愛してくださり、喜びと平安と命を与え生かしてくださいました。また、この頃教会に洗礼槽が与えられ、受洗をされる方々の信仰告白を聞くたびごとに、私の心の中にものすごい衝撃を受け、私自身も主によって新しくつくり変えられたいという気持ちが心の中に積み重なっていきました。三年生になって、大学受験間近の年になり、やはり大学へ行きたいという思いが与えられ、少しずつ勉強をするようになりました。が、時はすでに遅すぎるというより、大学受験そのものがかなり無謀という状態でした。そして、試験を受ける頃になって、主に祈るようになっていました。本当に自分勝手だと思いました。しかし、主に祈らずにはおれませんでした。当然のごとくすべて不合格でしたが、別にショックはありませんでした。

主は浪人の道を与えて、勉強すること、また自分自身を見つめなおすようにと時間を与えて下さったのだと思います。それから、聖書を読むようになりました。自分自身を振り返ってみてわかったことは、それまでの自分は、苦しみにあうと神様を求めて祈っていましたが、求めていたものは目の前の状況がよくなること、そして、苦しみから開放され自分が楽になることでした。苦しみが続くと、苦しみから目をそむけて、自分自身から逃げてしまい、自分自身を甘やかし、神様から離れてしまって、もがき苦しんでいるだけでした。そして、人を恐れ、人に流され、人前では自分を取り繕い、さらには神様をも忘れていました。しかし、神様はこんなものに目をとめて愛してくださり、御子なるイエス様を使わされ、イエス様の死によって私の罪をすべて滅ぼして清くして下さって、イエス様の蘇りによって、私を新しい命に生きるものへと変えてくださる主の約束をもう一度知らされ、私は主の

前に低くなるほかなく、また主の愛と恵みに涙が止まりませんでした。そして、私自身本当に主に祈り、イエス様を求めるようになっていきました。

受験勉強のほうは、何もかもが新鮮で、難しく苦しいときにも祈り求めるようになりました。また、「エホバの証人」の先生が塾にいたのですが、そのことによって自分が今何を信じ何を求めて生きているのか、もう一度確認させられました。目の前にある苦しみや状況に心を向けるのではなく、本当に主を信じ、主に心を向けてイエス様を求めて行くことのほうが、重要なことだと気付かされました。そうすると、悩むことがどうでもよくなり、苦しみは苦しみとして、悩みは悩みとして受け、それを主にゆだねて行くことができ、そして、主に祈り感謝し平安でいることができるように変わってゆきました。明らかに今までの自分とは異なっており、主の前に悔い改めてへりくだり、主の力と恵みと愛とに感謝せずにはおれませんでした。それから神様は福岡大学への道をそなえて下さいました。

大学に入学してからは、何事にも主に祈るようになり、勉強にサークルに一生懸命打ち込むことができました。主に祈らずにはおれませんでした。それほど、私の心はイエス様によって平安と喜びに満たされていました。ところが、神様はここで一つの事を起こされました。大学にも慣れてきた十月頃、父がガンを宣告され手術をしたことでした。そのとき、正直に本気で父の死を覚悟しました。しかしこのとき、神様は私のうちに平安を与えてくださって、私のうちには心騒ぐものはありませんでした。これは、もはや私の力ではなく、神様の恵みであり、また私のうちに宿って働いてくださるイエス様の力であると確信することができ、本当に感謝しました。そして、父の手術が行われ、手術後父に会うことができました。そこで私が目にしたものは、痛々しく弱々しくなっていた父の姿でした。いつも毅然としていた母も涙を浮かべていました。私自身、別にショックは受けませんでしたが、それよりも、そんな状態の父の口から出た言葉のほうが私の心を貫きました。父は、「イエス様が共にいてくださった。ずっと名前を呼びつつけておられた。…」と言い、その「イエス様」という言葉が出てきたことが驚きであったし、父がどんな状態になってもイエス様と共に歩んでおり、また、イエス様も父の内側から共に働いておられ、父に命と力を与え導いておられるのだと確信することができました。その夜、主に祈り、平安と喜びが与えられ、また、このことを通して主に祈ることができ、主は私をさらにつかまえ、主に心を向けさせてくださいました。それで安心したのか、ほっとしたの

か、張り詰めていたものがはじけて、私も入院することになりました。このことは恵みで、自分をまた見つめ直すときが与えられました。

その中にあるとき、気になることが心にありました。それは高校を卒業する頃、好きになった女性がいたのですが、私が浪人の頃は彼女とあまり話しができず、私が大学に入ってからようやく話ができるようになりました。そして、そのことについても主に祈るようになりました。しかし、なかなか私の思いが相手に通じないので半分あきらめかけて、あるとき、「僕の幸せより、彼女の幸せを満たし導いてください」と主に祈りました。そうしたら、父の手術の頃に、彼女は別の男性と婚約することになりました。このとき、本当に当惑しました。でも、入院していた頃に思ったことは、私が祈り求めていたものは主を待ち望むことではなく、目に見える結果だったということでした。それから、主に祈る祈りが変わり、本当に主を求めるようになりました。私が大学二年になってすぐに彼女は結婚しました。しかし、なかなか自分の気持に整理がつかない毎日を過ごしていました。もう主にゆだねたはずなのに、という思いがいつもありました。そうこうしているうちに、大学二年も終わり、三年になろうとする時、サークルの副幹事をすることになりました。サークルもかなり混乱した状態になっていたので、真剣に主に祈るときが与えられ、また、恵みでした。確かに苦しむだろうし、勉強とサークルの両立というのもあり、それはわかりきっていました。そして、何よりも事を成してくださるのは主御自身の御心だからと、主に祈ってゆだね、別に恐れることは何もありませんでした。年が明けて、聖会で整えられ、そして、大学の定期試験も終わり、二月に入ろうとするサークルもさあこれからというときに、ふっと結婚した彼女のことを思い出しました。サークルで忙しいのに何でこんなときにと思いました。そんなある日、聖書を読んでいて一つの御言葉が与えられました。

エレミヤ書三十一章三節の御言葉、

「主は遠くから彼に現れた。わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。」

このとき、神様の愛がどんなに大きくはかり知ることができないかを悟ることができました。それは、私は三年間愛しつづけた女性に振り向いてもらうことができなかっただけで、つらく悲しい思いをしました。人が人を愛する小さな愛でさえそう思うのに、まして限りない愛をもってずっと私を愛しておられる神様は、どんなに悲しんでおられることか。その

限りない愛は、愛する御子イエス様をこんな私の犠牲としてささげるほどの愛であり、しかも、このような自分勝手で小さく汚れた罪人なる私でさえ選んで目をとめてくださる愛とは本当にはかり知れません。このことを、もう一度改めて突きつけられたとき、私は主に“ごめんなさい”と謝らずにはおれませんでした。そして、涙が止まりませんでした。それから、もう一度主の前にへりくだって祈り、主の愛を知り触れることができたこの恵みに感謝しました。そして、この頃から、今まで以上に強く真剣に主を求めていくようになりました。

大学三年になり、勉強もサークルも毎日充実した日々を主は導いてくださいました。私も主に祈り求めて歩みました。後期になると忙しさは半端ではなくなり、特にサークルのほうは週に二日か三日は朝帰りをするほど作業や話し合いさまざまな準備に追われていました。生活習慣は最悪になり、週末には肉体的にも精神的にも異常な状態になっていました。そして、日曜日に主の前に導かれ、心を新しく強め整えられて日々の生活に歩みだし、週末にはまた体がおかしくなって日曜日に主によって新しく立たせられるという悪循環にも似た毎日を歩んでいました。そんな自分勝手な生活をしているような私を、主は捨てることをせず握ってくださり、一日一日を導いてくださいました。この神様の一方的な愛と哀れみと恵みに本当に感謝します。

年が明け、今年の新年聖会で御言葉が与えられました。ヨハネの黙示録二十一章五節

「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」

本当に新しくされたいと、そう願いました。それから、後期試験にのぞみ、主に祈り求めて行きました。結果は散々でしたが、主によらなければ試験すら受けられなかったので、主の恵みに感謝しました。就職活動も祈りつつ始めました。そんなときに、一人の姉妹と話をする機会がありました。彼女もいろんなことで悩み苦しんでいることがわかりました。そして、私が何の気なしに彼女に「神様に祈ってみたら」と言いました。しかし、そう言った後、私はもう一度自分を見つめ直しました。自分はそんなことを人に言ったけれど、自分自身本当に、主に祈り主を求めているのか。今まで、幾度となく主を求めてきたけれど、本当に主だけを求めていたか。主に祈りゆだねたと思っていたけれど、本当に主にゆだねきって主を求めていたのか。答えはすべて「いいえ」でした。そして、しばらく祈るときが与えられました。祈りのうちに御言葉が与えられました。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあな

たがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。」ヨハネによる福音書十五章十六節の御言葉でした。私はこのとき主によってではなく、自分が主を選び、自分の力で主を信じようとしていたことに気付きました。そして、私が主を選んだのではなく、主が私を選んでくださって、立たせて下さるのだと主が私に教え知らせてくださり、私はもうこれ以上主から離れたままではいられない、洗礼を受けさせていただきたいという願いが与えられました。

神様はこれまでにさまざまな苦しみや悩み、喜びや楽しみを与えられ、そして、恵んでくださいました。そのたびごとに、私は大いに悩み苦しみました。しかし、どれをとってみても、主に祈り、また、御言葉によって励まされているにもかかわらず、私の求めていたものはイエス様ではなく、目に見える結果や目の前の状況がよくなること、苦しみから解放されることでした。私はイエス様を信じているつもりでした。しかし、「つもり」になっていました。そして、苦しみや悩みが与えられると主には祈るものの、いつのまにか主から離れ、主にゆだねることをせず、結果ばかりを求めていました。自分の思い、自分の考え、自分の力、自分の知恵で何とかしようとしてもがき、苦しんでいました。主によって与えられた恵みを忘れ、イエス様から離れてしまって、苦しみ、悲しみ、不安と恐れの中にいました。さらには、私が創られたものであることを忘れ、自分勝手に生きているようなものでした。そして、親の信じている神様を信じて、それが私の信仰であるような錯覚があり、イエス様こそ私の主ですと、心からはっきりと告白できない中途半端な、不安定な信仰で、主と距離を感じていました。肉の欲に支配されて、自分自身を甘やかし、神様から離れて神様を忘れ、自分勝手に生きているおろかで、汚れた、弱く、小さなものです。これが私の真の姿です。

しかし、神様はなきに等しい、小さく汚れたものに目をとめて、選んでくださり、救いの手を差し伸べて下さいました。主は本当に何度も何度も苦しみの中を通して、私を主に立ち返らせようとして下さっていました。私はその神様の恵みに気付くことができずに、自分一人で何とかしようと苦しんでいました。神様は、さらに、その罪によって本来滅ぶべき私にさえ、イエス様をつかわしてくださり、十字架の死によって私の罪を、古き私を滅ぼし、清くして下さり、イエス様の蘇りによって新しい命に生きるものへ変えてくださいました。神様はこの御子なるイエス様を惜しまないほどに、私を愛してくださり哀れんでくださり、恵みを注ぎつづけてくださいました。私は今まで神様のこの愛と恵みからもれるようなこ

とをし続けていました。今こそ、汚れた弱き自分をイエス様にささげ、イエス様を主と信じて歩む以外にありません。

今日、私はもう自分で思い悩むようなことはせず、このイエス様を主と信じて歩み、古き私を捨て去り、私のすべてをイエス様にゆだねて共に死んで蘇り、新しい命に生かされる生涯を歩みます。神様が私を創り、生かし、導いてくださるのですから、この恵みに感謝し、聖書の御言葉を信じ祈りつつ、イエス様に全力で従って行きます。

（平成十一年五月十六日受洗の際の信仰告白）

1999/4/25 Sunday

ローマ人への手紙　十章九節・十節

すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

1999/5/5 Wednesday

ローマ人への手紙　3章二十二節

それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこには何らの差別もない。

1999/5/9 Sunday

コリント人への第二の手紙　5章十節

そして、彼がすべての人のために死んだのは、生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである。

1999/5/15 Saturday

ピリピ人への手紙　3章十三節・十四節

兄弟たちよ。わたしはすでに捕らえたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後ろのものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。

1999/5/16 Sunday

マタイによる福音書　3章十六節・十七節

イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはとのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があって言った“これは私の愛する子、私の心にかなう者である”。

信仰告白

久保田　忍
（大濠）

私は、昨年一〇月一日に東京から西公園に引っ越して参りました。ようやく落ち着きはじめた時、うつ病が出てしまいました。何もする気が起らず、何も出来なくまってしまい、身体の力が抜けたようになりました。そしてとうとう国立病院の精神科に一ヶ月半入院しました。

その間、神戸に居る妹が見舞に来て、私の状態を見て、教会に行かせたいと思い、神戸の牧師様を通して、榎本先生を御紹介いただき、この教会に参ることが出来たのです。主人も一緒に教会を探してくれましたお陰で、主人も教会に御縁が出来ました。このことは神様の御愛に導かれていたのだと感謝しています。

教会でのお説教を通して、本当の神とは誰であるのかということを求め続け、やっとイエス様を知ることが出来ました。

私は小さい時から神様がおられるということを感じておりました。神様を求めて、色々な宗教の会のお話を聞きました。今、思いますと、私は間違った信仰をしていたのだということがわかりました。

この教会でイエス様を正しく知ることが出来、本当に嬉し

く思います。何も出来なくて、心くだかれ、落ち込み、なげいておりました私が力づけられましたのは、正面のかけじくにあります『見よ、わたしはすべてのものを新たにする』という御言葉でした。打ち沈んでおります私の心を新たにしていただけるのだと思いますと、元気付けられ、感謝の心でいっぱいになりました。

聖書を学んでいきますうちに、十字架の意味もやっとわかるようになりました。イエス様がお苦しみになった十字架に、私の全ての罪をあがなっていただき、感謝です。これほどの感謝は言葉では表せないほどです。弱い、何の取り得もない者の罪をイエス様の十字架であがなわれますことは、すばらしいことです。十字架に心救われ、自由に解放され、幸せです。

『すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち神の子である』という御言葉に、私は喜びを感じます。どうぞ神の子としての信仰の道をご聖霊でお導きいただきますようお祈り致します。

去る六月一二日は私の還暦の日でした。人生六十年も自分のため、自己中心に過ごして来ましたが、これからの人生を、イエス様を仰ぎ、イエス様のみこころを思い、イエス様にゆだねる生涯でありたいと思い、洗礼をお受けする気持ちになりましたことをここに告白致します。

（九月一九日洗礼式での信仰告白）

主のめぐみ（船出する孫に）

上野　米子（福岡）

「わが魂よ、主をほめよ。そのうちなるすべての者よ、その聖なる御名をほめよ。わが魂よ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。」詩篇一〇三・二―三

平成十一年三月二十一日、厳かなる主の御愛の聖手をもって、榎本和義先生のお導きを賜り、孫の孝裕が洗礼の式典をいただき、人の子が主につける者として、新しき命に新生さ

せていただきました。

昭和五十三年一月四日、人の子として誕生し、献児の式を賜り、今日まで教会学校に籍をおき、限りなき神の御愛と牧師先生ご夫妻、また先輩諸兄姉のお祈りに支えられ成長させていただきました。

「今あるは、神の恵みによるなり」と何から何まで、主の御愛でないものはありません。近く上京し、世の荒海に船出して、職場につくことになりました。主は申されました、

「わたしはモーセと共に居たように、あなたと共に居るであろう。わたしはあなたを見放し、見捨てることはしない。」ヨシュア記一・五

「強く、雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」ヨシュア記　一・九

学校の学びの師、学友の愛、家族の愛の中に、自由に泳ぎまわった孫、時代の異なった世界に生かされたと申せ、人の道には変わりありません。

「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。」伝道の書　一二・一三

足りぬところは主のお叱り受け、日頃いただいております命の御言葉をもって、主の御旨を覚えますように…。「朝、目を覚まし、感謝のうちに、ひたすら祈りなさい」とお語りいただいております。

日々の歩みの中に、主との出会いを通して、主は生きていませりと、只、只、感謝あるのみです。

「我が恵、汝に足れり」　第二コリント　一二・九

船出する人、見送る人、ただ主の御手にゆだねて祈ります。

「湯浴みして　かいなに抱きし孫は今
傘寿を祝して　文送り来ぬ」

平成十一年　四月

わたしはもはや人を恐れない

わたしは長いこと、対人恐怖症に悩んだ。無暗と人が怖く、人がすぐれて見え、劣等感がつよくて、人を見たら、逃げ回ってばかりいた。まともな会話ができないので、向こうから顔見知りがくると、どうして逃げようかとそればかり考えるような小心者だった。顔をそむけて、知らん振りで通りすぎたことが幾度あったかしれない。そして心は不安で、人から嫌われたり、さげすまれたりするだろうと思っては悩み、自分の偽りにいたたまれない自責感を覚えるといった有様だった。

当然、孤独となった。学校でも、職場でも、地域社会でも、いつもひとりぽつねんと浮き上がった存在であった。

必然的に疎外感がつきまとい、自分についての存在理由を自分自分に認めることができなかった。死んだ方がまし、いや、生まれてこなかった方がよかったと、くり返しくり返し思った。ガスの栓をひねったこともある。小心が災いしてか、いや、幸いして、途中でこわくなり、中止したため、死ななかった。そのあとは余計人々の会話の話し声や笑い声、道を通る足音さえ、自分を惨めにする別世界の幸福の度合を強めて、ひびいた。

生きるに生きられず、死ぬに死なれず、耐え難い日々であった。経験のない人は笑うであろう。人と話しができぬ位で、と不可解に思うであろう。一歩、自分の方から近づいて人の間にはいれば、そんなものは直ぐになくなってしまうのにと考えるであろう。

コンプレックスに取りつかれたものは、ちょうど鶏の頸根っこを押さえて、地面に横倒しにし、目の前に一本の線を引いてやると、暗示にかかって動けなくなるのと同様のことがおこるのである。自縄自縛されて、あがけばあがく程、動けなくなる。認めれば認める程、強大となる。悪循環である。本来は存在しない虚のものが、実像と同じ働きを及ぼすのである。

対人関係の不具合が自分にとって人生の第一の問題であり、すべての蹉跌はここに始まりこれに終始すると考えたわたしは、解決に役立つと思われるものに、手当たり次第助けを求めようとした。断食、精神強化道場、新興宗教など、何でもよかった。とにかくこの苦しみを軽減してくれるものなら、どんなものでもと飛びついた。幻想と期待を抱いて近づき、実行し、やがて惨めに敗退していった。

わたしにとって、キリスト教もそのひとつであった。その

ひとつとして近づいた。そしてあやうく、永久に遠ざかるところだったのである。

二十才代の初期、教会が目にとまっただけの理由、それがきっかけで、教会の門をくぐった。目的は小心、対人恐怖症の克服であった。活発な——外的にではなく、内的、霊的に、いのち溢れた、すばらしい教会であったにもかかわらず、わたしは当初の目的はおろか、キリストイエスの救いのいのちにも与りえず——それがどんな訳合いでそうなったのか、本当のところはまだわかり得ていないのだが——、祈りも、聖書の講談も、集会の励みも、さらには牧師の度重なる導きと助言を戴いたにもかかわらず、救いについても、恐怖症の克服についても絶望し、自分は結局、選ばれていないのだと解釈して、空しく教会を去っていったのが、三十三才の時だった。

以来十二年、教会とは無縁であった。そして四十代の半ば、激烈な神経症にかかった。きっかけは、仕事の変化であった。とりわけ対人関係がうまくゆかないととてもこなせない職種で、問題山積の仕事そのものの重圧に、能力的にも堪えるに困難を覚え、波状的に対応できぬ頻度で押し寄せてくる要求に、次第に神経がすり減り、平衡を失っていった。降伏点を突破してしまった鋼のように弾力を失って、仕事にも精神状態にもコントロールを保てなくなって、遂に精神科の医者にかけこんだ。医者は薬をくれて、「大丈夫ですよ」というだけで、葦のように頼りにならない。

一時もじっとしておれない焦燥感に家を飛び出し、近くの野道を歩きまわっては、昔呼ばわったイエス様に「ふたたび助けてください」と、うめきながら哀願した。ある時、ふと思いついて道路わきの公衆電話から、昔十二年間通った教会へ電話をかけ、牧師先生に助けを乞うた。

「祈ってあげる、しかしともかくも臨在にふれるために集会にいらっしゃい」とのお言葉に従って、ほかに方法がないまま、またぞろ(不謹慎の表現のそしりを免れずに云えば)一変、棄てた教会へ、そして神の許へ、強制されて、いや応無しに近づいた。はじめは渋々、そしてだんだんと喜んで、最近は渇いて、ほかのどこへ行くよりも嬉々と近づくようになった。対人恐怖症はどこかへ消えた。

『彼ら、行く間に、潔められた。』(ルカ十七—十四)

不思議である。神の言葉に従うこと——これが今の願いであり、祈りである。

十二年の荒野は、いや四十数年の干上がった荒野のような旅路は無駄ではなかった。どのようにして、どうして、何故このようになったのか、わからない。

『唯見る、荒野に水湧き、川流れ、サフランの花風に躍り、咲き輝きわたるを。』

エジプトからすぐカナンの地へ入れたのに、不信仰のために入り得ず、四十年の荒野の苦難を経たイスラエル民族の歩みに、もし意義と教訓があるものならば、わたしの辿った惨めさと、今のこの平安にも、何らかの意味と効用があるのかもしれない。

マルコやマグダラのマリヤについての記事が新約聖書に散見できるのも故なしとしない。

前の雨は後日の収穫に寄与――逆説的にせよ――しなかったと誰が言い得よう。

信仰のない私を哀れんで下さい

上田　喜美代（前田）

平成一〇年の一二月最後の金曜日に息子の入院の様子では『肺炎の症状もだいぶ良くなり、日曜日には退院予定で月曜日には一旦出勤してあと、ゆっくりと休養をとるからお正月も里帰りをせずに自宅で久しぶりにのんびり過ごす予定です』

と妻の紅霞さんから電話をうけたばかりで、

私も安心していましたが

翌日土曜日の朝7時半すぎ

『お母さんゴメンネ彼の症状が急変したからすぐに来てね』

の電話にびっくり

すぐにかけつける

新幹線は早いといっても大阪まで3時間かかる

飛行機の方が早かったかなと思いながら

祈りつつ病院に直行したが

すでにもぬけの殻

先生から簡単な説明を受ける

明け方4時過ぎ持病の喘息の発作がおこりそれが引き金とな

ったらしい
肺炎を患っている時に喘息の発作が起こると非常に危険な状態だと説明される
本人が点滴を拒否したらしい
さぞかし苦しかったろうと胸がいたくなる
すぐに自宅へいく
遺体となってベッドに横たわっている安らかな顔を見ると
神様は苦しみを取り除いて
もうゆっくりとお休みなさい
と語られている思いでした

おもへば3才のころより小児ぜんそくに苦しみ続け
学校も病院から通学してやっと社会人となり
良き家庭を与えられて
ここまでよくも守られてきたのだと感謝しました
しかし後に残していく妻子の事が気がかりだったことでしょう

一二月の寒い時期四才になる健翔君もいることだし
部屋の中は暖房をしている
遺体をなんとかしなくては

鼻血も出かかっている
大阪では誰も知人もなし
葬儀屋さんに方々電話して
とりあえずドライアイスを用意し棺におさめる事ができ
夕方から九州に連れて帰る
　まだ受洗もしていないこともあり
主人の理解も得られず仏教での葬儀となる
七日毎にお坊さんがくる
日曜日にしてほしいとの紅霞さんの希望もあり
日曜日ごとにお坊さんが来る事となる

教会には行けない
だんだん不信仰が芽生えて来る
私の頭の中は
『何故、何故、　？？？』　ばかり
平安がない
聖書を開いてもぜんぜん目に入らない
祈っても祈りになっていない
体調もこわして風邪を引いて
３８度４分の熱が下がらない
このような状態の時に

大田さんから新年聖会のテープを届けて頂いた
初めての今年の聖句
『父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたをあいしたのである。私の愛のうちにいなさい』
ヨハネによる福音書一五・九

やさしいイエス様のみことば
そうだ　神様は自分の一人子を犠牲にして
この私の罪のために十字架に掛けられたのだ
今自分の息子がみくにに召されたことと重ねて思う時に
はっと我に返り自分の罪を悔い改め感謝の祈りを捧げた時に
みことばが砂に水が染み込む様に私の魂に届く
日ごとに風邪も癒されて心に平安が与えられる
なんと感謝なことか
四九日の忌明けの法事がすんで
やっと教会へ行く事が許される
感謝

主は与へ　主は取り給う
何事も　感謝して受け入れよ
これらのみことばは　頭の中では分かる
しかし正直なところ五ケ月経った今
こうして写真をみるたび
元気盛りの四〇才で退院予定がなぜ急死なのか
なにかてだてがなかったのかと思う時

なぜ　なぜ　と神様にいっている
主は与へ　主は取り給う
このみことばが私の魂に届くにはもう少し時間が必要なのか

わが魂はもだしてただ神をまつ
わが救いは神からくる
神こそ我が岩　わが救い
わが高きやぐらである
わたしはいたく動かされる事はない

あなたがたは　いつまで人に押し迫るのか
あなたがたは皆　傾いた石垣のように
ゆり動くまがきのように人を倒そうとするのか

彼らは人を尊い地位から落とそうとのみはかり
偽りを喜び　その口では祝福し
心のうちではのろうのである

『わが魂はもだしてただ神をまつ
わが望みは神から来るからである
神こそ我が岩　わが救い
わが高きやぐらである
わたしは動かされる事はない
わが救いと　わが誉れとは神にある
神はわが力の岩　わが避けどころである
民よ　いかなる時にも神に信頼せよ
その　み前にあなたがたの心を注ぎ出せ
神はわれらの避けどころである』

詩編　六二編

息子二人ともを神様は私達親よりもさきにみくにに召されました
神様のご計画は
私達には計り知る事は出来ませんが
残された私達家族が一つとなって、まことの神様を敬い
『心をつくし　精神をつくし　力をつくして
あなたの神、主を愛せよ』

申命記六・五

『わたしとわたしの家とは共に主に仕えます』

ヨシュア記二四・一五

これらのみことばを守る事が出来る様にと
かたくなな私達に
これでもか　これでもか
と二人の死を通して語りかけて下さっています
あなたはまた人がその子を訓練する様に
あなたの神　主もあなたを　訓練される事を
心にとめなければならない
主は愛する者を訓練されるのである
神様に愛されていることを感謝します
不信仰なわたしを導いて下さい

一九九九年五月

主のあわれみ

大田　邦子
（前田）

交通事故

三月二日のことです。

「もしもし、藤掛一美さんのお家ですか」

一瞬、悪い予感がしました。

「はい、そうです」

「こちらは西消防署ですが」

瞬間、頭が真っ白、やったあ、と、日頃一美が自転車を飛ばして走るもので、事故を起こしたものと、鼓動が高まる。もう消防署の方が、私の上ずった声に、

「落ち着いてしっかり聞いて下さいよ」と念を押される。

「一美さんの自転車が車と衝突、今、荒垣脳神経外科に、救急車で運ばれました。家族の方がすぐ行って下さい」

「どんな状態ですか」

「意識はあります、割合しっかりしています、浴衣と洗面道具……を持って……」

夕方四時半頃、降って湧いた様な出来事、ただイエス様、助けて下さい！、憐れんで下さい、と祈るばかり。この日、私は風邪を引いて寝んでいました、床の中でこの電話を取ったのです。

すぐに信夫さんに連絡、一刻も早く様子を知りたいので、主人に病院に駆けつけて貰いました。

強く、また雄々しくあれ。
あなたがどこに行くにも、
あなたの神、主が共におられるゆえ、
恐れてはならない、おののいてはならない。
ヨシュア記一章九節

み言が与えられました。丁度、早天でヨシュア記に入り、教えられていた所で感謝しました。どこに行くにも、あなたの神、主が共に在す故に…と、幾度も自分に云い聞かせ、主が共におられる故に恐れてはならない、おののいてはならない、と支え強めて頂きました。

五年前、主人の胃癌の手術中、心臓停止四、五回というトラブルで、死の宣告を受け、全身からサッと血の引くのを覚えたあの時、「恐れるな、わたしはあなたをあがなった、わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのもの」と懇ろに呼びかけ、立たしめて頂いた時のことが蘇ってきました。す

べてをお委ねすることが出来ました。

間もなく主人よりの電話で検査の結果、脳に異状なく、脳しんとうを起こしただけ、右足の膝、脛骨の骨折等……で、明日整形外科に移って下さいとのこと、主に感謝しました。信夫さんが帰宅、……信夫さんも一美がてっきり飛ばして、やったものと思ったそうです……。そこに主人も帰り。相手（加害者）の方も来られ、

「前方不注意で、本当に申し訳ございませんでした」と様子が判り、皆で心を合わせて祈りました。

この日は、私が風邪で熱もあり病院に診察にと思っていましたが、取り止め、一美が出掛ける時「今日はきついので寝みたいから夕方の犬の散歩頼むね」と床につきました、床の中でこの緊急電話です。

主が、私の病院行きを止どめられたこと、何時も診察を受けた時は、帰宅するのが四時半過ぎ、全て、み手の中に導かれていることを感謝しました。

いよいよ今日から主婦業に復帰、私の出番ではなく「イエス様の出番です」このことをしっかりと心にとどめ、主とのお交わりの中、祈り求めつつのスタートです。

翌三日、一美に会いに荒垣病院に行く。熱が出て痛みもひどい割に落ち着いて、現場での様子等聞かせてくれ安堵しました。守られていることに心からの感謝を捧げました。早速、三菱化学病院整形外科に転院、検査の結果、靭帯、半月板、脛骨に損傷、症状が治まるのを待って手術ということになりました。

夜、斉（孫）帰省、もう学生生活最後の年、この一年は卒業まで帰れない、今後の進路の相談や色々用事を済ます為に、五日間しか時間がとれないということで帰って来ました。

四日、私の体調が思わしくないので病院に行く。検査の結果、血圧一八〇、脈拍一二〇、びっくりでしたが、「これは風邪の上に、ショックからでしょう」と、格別の異状なく感謝でした。

斉の滞在中にこんなことがありました。七日礼拝から帰って、どうしても古賀に行く用事があったのですが、私の体調が今一つだったので、斉に頼み、信夫さんと一緒に車で行って貰いました。私は寝んでおりました。三十分位してでしょうか、電話のベルで目が覚め、取った途端、

「こちらは鞍手パーキングエリアの売店ですが、藤掛斉さ

んのお宅ですか」
エッ、又しても事故か?、
「ハイそうです」
「お宅の斉さんの財布を、トイレの入口で拾われた方が、持って来られ、こちらでお預りしてますから、お知らせしておきます。現金とカードが入っています……」
「本当に有難うございました」
事故でなくよかったものの、連絡の方法がない。「神を信じ、また、わたしを信じなさい」と呼び掛けて頂きますが……。心が騒ぎます、切に祈りました、斉よりの連絡を待つより仕方がありません。高速の料金所で気がつき、どんなに慌てがっくりしていることか…。
帰りに買い物も頼んでいるし…。どうしているだろうと。さあ、一時間位経ちましたでしょうか、この間の時間の長かったこと。
「ただ今」と元気な声で帰って来ました。主人が出迎え、まず、「財布落としてどうした?」
「あれ!、ない!」　本人は全然気がついてないのです。
「高速料、買い物は?」
「高速料は父さんが出してくれて、買い物は一度家に帰って出直そうと思って…」。
落としたことも忘れさせて下さるイエス様、何と懇ろなお取り扱い!、感謝して主を崇めさせて頂きました。

一　美　の　手　術

一美の手術の日が、三月十一日午後と決まりました。榎本先生にご連絡、お祈りをお願いしました。

主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。
主を待ち望め。　　詩篇二七篇一四節

状態を待ち望むのではなく、主を待ち望みましょう、祈っています。と、み言を頂き、力強く導いて頂きました。何時も教えられ、立ち返らせて頂く所です。つい見えるものに動かされやすい私。状態を見るから、落ち込むのであって、すべて主が許して通される道、私達のすべての責任を負って下さる主に目を止めさせて頂き、平安の中に主の導きを待つことが出来ました。
十一日、榎本先生初め、皆様のお祈りに支えられ、み手の

中に、手術が無事にすみました。
手術の結果の説明で、
「靭帯も切れておらず、少し伸びた程度。半月板は取り除き、グシャグシャにつぶれた処は削り取り、骨折した所はボルト二本で止めました。事故の状況からすれば、思ったより損傷が少なくて良かったですね……」と。
手術時間も予定より早くすみ、主の憐れみを心から感謝しました。

又　し　て　も　事　故　？

十二日、一美の手術も無事に終り、私の体調も大部回復、ホッとした朝を迎え、日課の犬の散歩も心軽やかに主人と共に出掛けました。
丁度出勤登校時間で、車も多くなっていました。私が犬を連れ道路を渡った処、後ろで何か騒ぐ気配を感じ振り向くと、主人が仰向けに転んでいます。かぶっていた帽子、眼鏡が飛び散ってます。
「どうしたの…？」
と駆け寄ると、頭も大丈夫の様、傷もない、打撲も大したことはなさそう……。イエス様、感謝します。
自転車を引いた高校生が、「すみませんでした」と近寄ってきました。
主人が横から来た車を避け引き下がった処に、坂の上から降りてきた自転車に衝突。でも歩いて帰ることが出来ました。幸い、寒い時で、厚着をしていたのと、お尻から上手に転んで、頭も打たずに腰を痛めた程度で、治療も一週間で終え、ここでも、神様のみ手に守られ、警鐘を鳴らして下さいましたことに感謝しました。

こ　ん　ど　は　ガ　ラ　ス　が

十四日、日曜日の出来事です。雨風が強く寒い一日でした。一美の事故以来、毎日が慌ただしく、身体の不調もあり追われる日々でしたが、主の憐れみで体調も回復、この日の礼拝には久し振りに、身も心もすっきりと出させて頂きました。

主に立ち返って、落ち着いているならば救われ、
穏やかに信頼しているならば力を得る。
イザヤ書三〇章一五節

創り主なる主に立ち返って新たにされました。このところ毎晩食事も遅く、八時近くになってしまうのです。今日は外は雨、静かな午後となりました。盾に、

「今晩こそ早く御飯にしようね」

「無理しなくてもいいよ」と気づかってくれます。

張り切って早めに台所に立つ、しばらくしてからのことです。犬がどうしたことか、食事の催促か?、ひどい雨風のせいか?、二匹で吠え、時々ガラスを引っ掻きます、とうとう、「だまんさい、まだ駄目!」と、叱りつけ、手が汚れていたもので、こぶしでガラス戸をポンと叩いた瞬間!。半間もある大きなガラスが、叩いた中心辺りの一点から放射状に見事に割れてます。

「エッ、どうして?」と目を疑いました。こんな厚いガラスがどうして……?。確かに割れていますが、破片は飛び散らず、中心部の三、四片が外に落ち、穴が開いているだけです。でもちょっとでも触ったらガチャガチャと崩れそう。寒さの上、外はもう暗く風が激しく、雨が時折叩きつけています。

どうしょう、イエス様!。丁度、信夫さんも盾も出掛けたまま、心細くもあり悲しくなりました。「立ち返って落ち着いていなさい……、決してあなたを見放さない、見捨てないと……」語りかけて下さいました。

まずガラス屋さん……、随分以前にお世話になったガラス屋さんの名前を思い起こさせて下さいました。古い電話帳を取り出し電話する。今日は日曜日だし、もうこんな時間と不安がよぎりましたが…。奥さんが出られ、「連絡をとってみます」と。どうか良い返事をと祈りつつ、電話を待ちました。折り返しの電話がご主人から「今、店にいて丁度車で帰る処、よかったです。店にいるし、ガラスもあるのですぐ行きます」と。イエス様有難うございます。

そこに盾が帰り、開口一番、

「ババ、どうしたん!、怪我なかった?」と優しく思いやっての言葉に、ホットと心がなごみ、胸が熱くなるのを覚えました。あっ!、怪我もなく守られていたことに、後で気がつ愚か者です。

ガラス屋さんも、「奥さん、すべてが良かったですね、家に帰っていたらこういう訳には行くかなかったですよ」。あまりのタイミングの良さ…に、何度も口から出ることです。

今日の説教の中で頂いたみ言、「あなた方の呼ばわる声に応じて、必ずあなたに恵みを施される。主がそれを聞かれる時、ただちに答えられる」。有難うございました。

七時にはガラスが入り、皆揃って、やっぱりおそい食事になりましたが、「機に合う助けとなる恵み」に心からの感謝を捧げました。

信夫さん達福岡に

我が家の三月は大きな節目の月でした。盾は卒業、就職で巣立って行きました。斉の帰省、それに信夫さんが社内の人事異動による配置転換で、担当が変わり、二月から福岡に毎日の通勤となりました。通勤時間が二時間余り、年齢的にも、体力的にも、手術後復帰間もないだけにとても無理。福岡に居を移すことに決め、家探しを始めた矢先の、一美の事故でした。

信夫さんの会社の方が、「藤掛さんとこは災難続きだから、お祓いをして貰わなきゃいけんな、あ、あんたとこはアーメンだったね」と言われたそうですが、この世的に見れば、そう見えたことと思います。

主は愛するものを訓練すると仰せられます。

あなたはまた、人がその子を訓練するように、あなたの神、主もあなたを訓練されることを心にとめなければならない。……。それはあなたの神、主があなたを良い地に導き入れられるからである。　申命記八章五～七節

この様な者が、十字架の御血潮に贖われ、この救いにあずからせて頂いた主のご愛、又、何時どんな時にも、「祈りを聞かれる方よ」と全能者でいらっしゃるお方に、より縋って祈らせて頂ける幸いな身分を思い、心から感謝しました。

四月七日　一美も装具を着け、松葉杖をついてですが、退院となりました。

六月十九日　装具も松葉杖もとれ、福岡に引っ越して行きました。十七年間の長い同居生活でした。

これからは、年寄り二人の新しい生活のスタートです。おかれた処で、主とのお交わりの中、祈りつつ主を求める日々をと願っております。

榎本先生ご夫妻、金生先生はじめ、教会の皆様のお祈りを心から感謝致します。

＊　＊　＊

万物は神からいで、神によってなり、
神に帰するのである。　ローマ　一一章三六節

本当に、大きいこと小さいこと、苦しかった時、悲しかった時、様々な出来事の連続でしたが、これも皆主のご計画の中、格別私共には、これからの若い者達との別居に備えての主のみ思い、此度もみ業の数々を通し、蘇って今も生きていらっしゃる主自身にふれさせて頂きました。

自分の弱さも愚かさも再認識、こんな者をも顧みて、主が共に在して、守られ、支えられ、育まれて、導かれた日々、何一つ損われるどころか、主を喜び、すべてを感謝に変えて、恵みの時として下さいました。

イタリア紀行感想記

正野　真宏
（前田）

私達家族は、平成十一年三月八日から十五日までの八日間、イタリア周遊の旅に行く機会を得た。

もともと我々夫婦は、平成八年六月ヨーロッパ旅行以来、海外旅行づいたと言うか、病高じて海外中毒症候群とでも言おうか、毎年どこかに行くことになってしまった。神様が造られたこの地球には素晴らしいものがある、元気なうちに見ておきたい、そういう欲望を満たすために一年間、買いたいものも買わず？食いたいものも食わず？ひたすら小金を貯めて？その日のために備えるのである。

さて、今年はどこへ行こうかと家族で話題になった時、娘からイタリアへ一緒に行こうと提案があった。親としては大変有り難いことではあるが、大学受験中の潔君を一人家に置いて行くことはできない。では、合格発表があってから、一緒に行けばいいと言うことになり、「潔君高校卒業兼大学合格記念家族大旅行」と銘打って、計画することにした。ところが、「予定は未定にして、しばしば変更することあり」のたぐいで、潔君の努力と我々の祈りも空しく、全部不合格となってしまった。しかし、これも素晴らしい導きであり、我々

は主に感謝した。そして大義名分を「浪人記念家族大旅行」と変更し、予定どおり出掛けることにしたのである。

さて、旅行記としては、日程に従い状況を記述するのが通例であろうが、そうすれば、内容も旅行案内やテレビ番組と同じになるので、旅行で感じたことを中心に報告する。

〈ローマ〉

ローマでの第一の印象は、その歴史の古さである。紀元初期の建物がそのまま残っている。石作りで保存が良いということもあるが、たとえばローマ中央駅のすぐ前に、ローマ時代の古ぼけた遺跡が残っている。日本で言えば、東京駅前の丸ノ内である。日本では考えられないことであるが、イタリア人は経済成長よりも歴史と文化を大事にしているのである。旧市内ではルネッサンス時代の建物を補修しながらまだ使っている。我々が泊まったホテルもそうだった。

古い建物を壊さないため、区画整理ができず、道路も昔のままで狭い。駐車場も造れないため、道路の両脇に隙間のないほど駐車おり、やたらと一方通行が多い。

このように都市機能や市民生活にかなりの不便があるわけだが、それでも頑固に守り通している。しかし、そのことは我々にとっては、有り難いことである。なぜなら、世界史で習った世界を目の当たりにすることができるからだ。

特にコロッセオには圧倒された。紀元八十年に完成した円形闘技場であるが、どのようにしてこれほどな建物ができたのか、当時の建築技術は今日以上かもしれない。石と石の繋ぎにセメントが使ってあった。日本ではまだ縄文時代か弥生時代の縦穴式住居の頃である。

その日は折悪しく、イラン大統領の来伊に伴う警備で、中には入れなかったが、そそり立つ観覧席や闘技場を入口から垣間見、ローマ皇帝の迫害によって、ライオンの前に引き出され、見せ物にされた多くのクリスチャンの嘆きと祈りに、しばらく思いを馳せていた。

〈バチカン市国〉

バチカン市国はローマ市の中にある、ローマ法王とサン・ピエトロ寺院だけの独立した国である。

サン・ピエトロ寺院は、ペテロが殉教したといわれる所に二百年かかって建てられ、かのミケランジェロも建築監督をしたといわれる、世界最大の寺院である。それは法王の権威の象徴であり、壮大無比のものである。会堂の中も我々を圧倒するものばかりであった。それらはみな設計意図があってできている。たとえば、サン・ピエトロ広場は「天国の鍵」

を示し、会堂は十字架の形にできていること、ミラノの寺院を見た時に教えてもらったのだが、カトリック教会の特徴である高い柱とステンドガラスの意味は、人間は自然（林）の中で、木漏れ日を受けながら祈るのが一番神に近づくことができるという思想から、柱を木々に見立て、しかも少しでも神に近付けるようできるだけ高くし、ステンドガラスは、神からの光をイメージしているのである。それから教会には宗教画が多いが、これは当時の民衆は文盲が多かったので、絵で聖書を教えるためだったと言う。

ガイドが、ローマは来年の二千年問題が大変になっていると説明した。それは、この寺院の入口の一つがコンクリートで塞がれているが、これを「聖年の扉」と言い、二五年ごとに開けられる。その年に扉を通って中に入れば、どんな罪でも許されるというものである。だから、来年は世界中のカトリック信者が大挙してこのローマにくるので、大混乱が起こると言うのである。

私はローマの混乱よりも、聖年の扉の考えの方が問題だと思った。これでは中世紀の免罪符と同じではないか。私は胸の内がムシャクシャして、許し難い思いに駆られた。そして、近くに居るであろう法王に、聖書のどこにそんなことが書いてありますか、罪の許しはイエス様の十字架によるほかないはずです、と言いたくなった。ガイドの説明であるから、その通りではないかもしれない。宗教画と同じように、聖書の真理を教えようとして取り決めたものが形式化・偶像化したのかもしれないが、ゆゆしき問題である。

〈ポンペイ遺跡〉

今度の旅行で一番楽しみにしていたポンペイの遺跡に来た。ポンペイは、紀元元年ベスビオ火山の噴火により、一瞬にして灰に埋まった古代都市である。噴火のゆえに、保存状態がよく、今でも古代ローマ人が出てきそうな感じさえする。ここで思うことは、古代人と我々と何ら変わらないということである。この街は、実に効率的に都市計画がされている。役所ゾーン、神殿ゾーン、商業ゾーン、住宅ゾーンと分けられ、役所・裁判所もあれば、スーパーもある。当然、法律も整備されていたはずである。飲み屋もあれば、パン屋さん、公衆浴場や今日で言うヘルスセンターもある。ヘルスセンターはスチーム付きというから驚く。勿論、通貨は発達し、水道完備、道路は車道と人道に分けられ、所々横断歩道さえ設けられている。実に驚いた文化の高さだ。

これを見ていると、我々二十一世紀の者とどこが違うのか。使う道具は変わり、便利になったくらいで、人間そのものは

何ら変わらない。何も進化も成長もしていない、むしろ昔の人の方が勝れているのではないか、そう思わざるを得なかった。

〈フィレンチェ〉

イタリアはルネッサンス発祥の地として有名だが、その中心となったのが、フィレンチェである。現にその当時の建物が残され、「花の都」と言われるに相応しく、実にロマンチックな街である。

ルネッサンスと言えば、学校で文芸復興と教えられていたが、ガイドの説明では、人間復興というべきもので、中世紀の宗教的束縛や政治的抑圧からの復興、すなわち人間解放であった。その動きは、燎原の火のごとくヨーロッパ中に広がり、すごいエネルギーとなって、芸術だけでなく、あらゆる分野で新しい活動が始まった。信仰の面では、形式的宗教への反発となり、ルターの宗教改革につながっていったと言う。私は興味深く聞いていた。確かに、それまでの政治や芸術は王侯・貴族のものであったが、ルネッサンス以後、市民レベルが中心となった動きに変わっていった意義は大きい。その流れから後の民主主義、主権在民へと発展していったに違いない。いわば近代国家への魁であったのだ。

しかし、と考える。それで人間復興はできたのだろうか。宗教的束縛からの解放は、神からの解放、人間中心社会の構築の魁とならなかっただろうか。真の人間解放は、罪からの解放なくしてはできない。それはイエス様の十字架によるほかなく、人間が神から離れ、自分の力や科学の力で人間復興をなそうとしても、罪を持っている限り砂上の楼閣でしかない。そういう意味では、ルネッサンスで得たものは多くあったが、大事なものを失ったのも事実である。もう一度、人類は歴史を見つめ直し、今こそ神に立ち返るべき時ではないか、そのように思った。

〈ヴェネツィア〉

ベニスと言ったほうが我々には馴染みやすい。まさに水の都である。網の目のように水路が張り巡らされ、船が市民の足になっている。車は街の中には入れない。物を運ぶのも、タクシーも救急車も全部船である。水路は人工的なものではなく、全て自然のものだという。ベニスはいわば島の集合体なのだ。冬は水位が上がり、地盤沈下もあって海水が床上まで浸水することもあるという。

かの有名なゴンドラに乗った。同乗の歌手がイタリア民謡やカンツォーネを朗々と歌う。その歌声が両側のルネッサン

ス調の建物に反響して、心地よく耳に響く。窓から、橋の上から、人々がその唄を聞きながら手を振る。私達もそれに応える。ロマンチックな映画の主人公になったような気分になること受け合いである。

街の中央にサンマルコ広場とサンマルコ寺院があり、多くの人で賑わっている。ここでの説明では、当時のイタリアは小国群雄の時代で、それぞれが覇権を争っていた。このベニスも一つの国であった。当時の国王が、他に負けない寺院を建てるために、商人にシンボルとなるものを探させ、使徒マルコの遺体を買い取って、ここに安置したのだという。使徒時代から千年以上も経って、本当にマルコの遺体かどうかはなはだ疑問だが、どうも、カトリックは人を神格化しているところがあって、聖書から離れてしまっているように思う。私達は見た目やいわゆる聖人ではなく、聖書の言葉を神の御言と信じ、これに生涯かけて信頼していくのである。

この後、イタリア経済の中心地であり、世界のファッション発信地ミラノに行き、ここから帰路に着いた。

滞在中は、天候も健康も祝されて感謝である。三月初旬はまだ肌寒い季節であるが、結構暖かかった。ローマの緯度は北海道くらい高いところにあるが、北側のアルプス山脈に寒気が阻まれているから暖かいのだという。

イタリアは確かに魅力的な国である。どの街も素晴らしく、ぜひまた来て見たいという思いに駆られる国である。お陰で、またまた海外中毒症候群が重症になりそうである。

わたしたちの先生新聞に載る

久保田　宮子
（戸畑）

朝日新聞の方が先生に密着取材をするとお聞きしてから、何時か何時かと思っていましたら、去年のクリスマスの頃初めてお会いしました。礼拝にも出席して下さいました。

水曜会と礼拝後、幾度となく先生よりお話を伺っていましたが、何しろ新聞記事と言うのはどれ位載せて下さるのか見当もつきません。

先生は弁当くばりも週二回もしておられます。それに奥様

の見舞は勿論、私も杖がいるので、よく雨の日は送ってもらっています。それが、私達と違う点は、苦しいどころかむしろ喜んで、暗いところが全くありません。

玄関には、「今日も元気です。宜しく」と書いて、何日かを書いて近所の方に知らせてやっております。

私も集会の時はそれを見て入るのが日課になりました。

私家は毎日新聞なので、先生よりお聞きして（朝日新聞を）買いに行きました。また親戚の方と連絡をとりました。

一月二六日の朝刊に、介護保険⑦として載りました。とても大きく、先生がよいお顔で写真機を持たれ、奥様をとって居られる、嬉しくて何回も見ました。

先生がいつもお話される、奥様と永い時間をかけて別れるつもりと言われる事が、とても気持がよく出ておりました。感謝せずにはおられません。「いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。すべての事に感謝しなさい」、全くその通りだと思いました。

介護においては偏見をなくすと言う事が一番大切なのだなあとつくづく思いました。

数日後、娘の実家から一番より七番までとじて送ってきました。田川の方はカラーで載っていました。

以上

詩集「別れの日々」

（脆くはあるが暗くない）より

伊規須太郎（戸畑）

クローン

羊の成功から　たちまち牛の成功へ
目先の利益のために　発生工学はドンドン進む
人に応用してはいけない　と言ってはいるが
出来る事はやってしまうのが人間の常だ
しかし　全く同じものが存在する事は許されない
創造は　男女（雌雄）をもって
新しい命を生み出す事を定められた
親とは違う　新しい個体が発生する訳である

ノアの箱舟に入ったのは…
地のすべての獣・家畜・這うもの・鳥・翼あるものの
雌雄ふたつずつとあり…人間だけは
ノア夫妻と　息子セム・ハム・ヤペテとその妻たちの八人で

あった

誤った行為は報いを受けねばなるまい
何らかの支障が生じるというより
思いもかけぬ形で　生物の崩壊が始まるかも知れない

（一九九八年七月二七日）

船　底

「板子一枚　下は地獄」
というコトワザがある
船乗りは危険が一杯という意味である

私の心は薄皮一枚で支えられている
何かあると　ドッと涙が溢れる
たちまち沈みそうになる……ブクブクブク…と

しかし　それで終りではない
下のほう　それもうんと深いところに
もう一枚　厚皮があるからだ

これはしっかりしている

この皮を蹴ると　急浮上する
すると前よりも　舟底が厚くなっている
心がタクマシクなっている

何事かが起こるとは　むしろ幸いと言える！
驚いたことだ

聖書に「われ弱きときに強ければなり」とある

（一九九八年九月二八日）

やさしさ

何の番組だったか　司会者が子どもたちに
どんな大人になりたいか　問うと
みな　やさしい人になりたいと答えた

私は考え込んでしまった…
とにかく人にやさしくし　自分にもやさしくされて

一応平和に暮らそうということか？

司馬は自立と言いやさしさと言った
吉川は逞しさと語った　単なる凶暴はたくましさではない
自立の土台のないやさしさとは
ただのフニャフニャではないのか

今の子どもたちは　どういう教育を受けているのだろう？
先生たちは　どういう生き方をしているのだろう？
日本国の生き方も　どうもフニャフニャのような気がする
川は上流から濁るという　子どもばかりを責められない
みな自分を写すカガミを持たないのではないか？
位置を知るには　座標軸が必要である

（一九九八年一〇月一日）

時

「時は去ると言うが時は止まり僕らが去るのだ」とある人
聖書によれば　時は流れており始めと終りがある
時が流れ去れば　時間というものも無くなってしまう

時間の始まりは　明確であって
その時　ストップウォッチが押され
いま二度目が押されようとしているところである

押せば　針は止まって経過時間が表示される
さらにもう一度押せば　針はゼロに戻る
私たちは　その流れの中にあって飛び去って行く

人間はもちろん動物も植物も
造られたすべてのものは過ぎ去って行く

自然も過ぎ去って行く
地球も宇宙も過ぎ去って行く

動かないものはただ一つだけ

（一九九八年一〇月一日）

創造主

ある人が　しばらく孫を預かって
「これ誰が作ったんか」という問いに閉口した

セミ　トンボ　カマキリ……捕らえると質問の連発
「月がキレイだ見てごらん」と言うと
「月は誰が作ったん？」と来る…返答に詰まると
「おじいちゃん知らないの」と言うので
「神様だよ」と言うと
「じゃ神様は誰が作ったん？」と言う
孫が帰ったあと　おじいちゃんはシミジミ考えたという

3歳児を不思議がることはない
それが純真な人間の当然の疑問なのだ
これはこんなものと思う　常識の世界に浸っているから
大事な問いを忘れているのだ

わが国は未曾有の国難に遭遇しているというが
物を見る角度が違っているのではないか？
複雑怪奇・盤根錯節・八方塞がり　と思われがちだが
見方を変えれば　物ごとは簡単明瞭ではないのか？
いま基本的問いかけが　重くのしかかっている

（一九九八年一〇月一三日）

忘夫

いつかは忘れられる…と覚悟はしていた
しかし現実になってみると　ツライ！

泰子は「あなたは誰ですか？」と言うことはできない
会ったときは「オッ」というような顔をする
私は彼女の隣に腰掛ける　が　会話はできない
暫くすると立ち上がって　遠くに座って知らん顔

前には「テレ屋さん」と言われ　私もそう思っていた
しかし今は夫ということが分からなくなっている
彼女の内から一切が消え去っている「忘夫」である

私は彼女とスローグッドバイしているつもりだが
彼女から見ると　グッドバイはすんでしまったらしい

「忘夫」は「亡夫」である

それでも面会に行く　彼女にとって夫でなくなっても
私にとっては妻だから…聖書のコトバ
「神の合わせたまえるものは人これを離すべからず」
…結婚式の式文にそうあった

（一九九八年一二月九日）

はだか

「私は裸で母の胎を出た　また裸でかしこに帰ろう」…
旧約聖書に登場する預言者のコトバである
…泰子はいま裸で帰ろうとしている

ベッドの横にはかなり大きな物入れ（棚？箱？）がある
先頃までは　僅かだが着替えや私物がそこに置いてあった
しかし　今はキレイさっぱり　何も置いていない
全く管理ができず　戸惑いや異常行動のもとになるからだ
味わう事もできないまま食物を口に入れ
着せられ　脱がされ　拭かれ　洗われ
戸惑いのうちに徘徊しては
ベッドに上がり降りするのみ！
しかも終日無言　ひとのコトバもなかなか理解できない！
枕元に小さな人形が置いてあるが　楽しむふうは無い
賛美歌を開く事もない　コトバの無い世界にいるからだ

「赤裸」では言葉が足りない　何色の裸と言えようか？
過去も現在も未来も　有形無形の持ち物も
人間関係も　夫も　一切を失ったこのハダカの凄まじさ！
しかし遠からず状況は変わるだろう　主の憐れみを祈る

（一九九八年一二月三〇日）

どうする？

泰子はいつも小声で「どうする」と言っている
これは日本語とは言えない　生きているという反応であり
トマドイのしるしである

朝日（新聞記者）が同じことを言った
「伊規須さんこれからどうされますか？」と
＊　夫人は厳かな状態になりつつある
＊　伊規須さんは教会のお仕事を現役で続けられる
＊　お弁当は配る（ボランティア活動全般をさす）
＊　その他いろいろ事情はあるでしょう…という訳

わたし「別に……今のままですよ」
「使命っていうのは　どこかへ行ってするものじゃない」
「何かを考えてするもんじゃない…と思いますよ」
「今ここでやっている事がそのまま使命だと思いますよ」
「それ以外出来ないし　考えられません」
「毎日ギリギリの状態の中で戦っては立ち直る……
その点の連続が一本の線になって行くと思います」
「今日の一足が明日の歴史になると思います」
「時代の魁として用いられるかどうか……
考えない事はないが　私が決める事じゃありません」
（一九九九年一月九日）

生存競争

猿の母親は　子供が死ぬとすぐ手放すのが普通だという
死なないうちに　手放すこともあるらしい
そうしないと　厳しい生存競争に勝てないからだ

体力のない母猿は　子猿に授乳するのを惜しむという
ある母猿は　子供を踏み付けて自分のエサをむさぼる
子猿は仕方なしに　懸命に食物をあさり
奪われないように頬袋に詰め込む
それが出来ない子猿は自然淘汰される
猿社会はそれほど厳しいという
人間社会では　それほど露骨な例は少ないだろう
しかし限界に近くなると　ないとは言えない
石川五右衛門の釜茹刑の例もある

しかし聖書には「たとい父母が捨てても主は迎えたもう」
「女が乳飲み子を忘れ　その腹の子を憐れまないような
事があっても　私はあなたを忘れることない」とある

生きようとするだけで　生きられるものではない

生かそうとするご意志がベースにあってこそ　生きられる

（一九九九年一月九日）

責任

三九年前　枝光駅前付近で死亡事故を起こした
相手は深酒運転の単車だった　三日目に亡くなった
中央線を越えてこちら側に入っていたし
私が過失を問われる事は無かった
しかし相手側からは加害者という目で見られた
少しばかり出た保険金を　親類縁者が寄ってたかって
分配するのを見るのはつらかった
一度検察庁に呼ばれたが　お咎めなしだった

しかし全く責任がないとは言い切れないと思う
上向きライトのまま　異常に蛇行を繰り返す単車を見たら
遠く逃げてしまえば安全だったに違いない
路側工事中だったから　私は中央線近くを走っていたが
停止すれば　いくら酔っ払いでも突っ込まなかっただろう
事故が二者の間で起こるものである以上
一方が全く無過失ということはあり得ない

夫婦生活で一方がストレスを感じたとすれば
それが二人で営まれる以上
一方に責任が全く無いということはあり得ない

（一九九九年一月一六日）

沈黙

はじめのうち「痴呆者はハッピーだ」と思っていた
「世の煩いから解放されて何も心配することはない」
「介護者も優しさを与えられる　これこそ神様の賜物た」と

しかし　そう簡単には言えなかった
泰子の表情には「うれい」がある
ものの言えないぶんニコッとするが　目は沈んでいる
人の心の奥をのぞきこむような鋭さがある
新しい記憶はできない…というより認識ができない
認識しないものが（脳の）中に入ることはない
入っていないものが出てくることはない

したがって　痴呆者の記憶は全体が欠落する

ふつうの物忘れは　入ってはいるがキッカケがなくて
出てこない　というものである　だから部分的欠落である

薄暮の底で　トマドイの渦がいくつも巻いている
見えてはいるがぼんやりしている　聞こえてはいるが遠い
考えようと思うが頭が働かない
どうしてよいか分からない
足が痺れたように　くすぐったい感じで力が入らない

下目

幾つも違わない上の子は　下の子が甘えるのを
羨ましく思っていても　子供心に我慢している？
青少年の社会問題の解決策はこんな所にあるのではという
これは子供ばかりではあるまい
「上見れば及ばぬ事の多かりき笠着て暮らせおのが心に」
……という歌がある

封建時代の支配者は　人為的に被差別階層を作って
民の不満を封じたという

上だ下だ高い低いという論議は果てしが無い
厳密に言えば　二人として同じものはいない
互いに　優れた所もあれば劣った所もあるだろう

上を見ても羨ましがらず　卑屈にならず
下を見ても自己満足せず　高慢にならず
持っているからといって　無駄遣いせず
持たないからといって　ケチケチせず
出来るからといって　何でもやるのではなく
出来なくても　必要な事には大胆に挑戦する
上も下もしっかり見て　動かない人になりたい

（一九九九年二月一日）

メッセージ

人間は誰でも一編は名作を書ける　と聞いた
それは自分史のことだろうか

人生は　つづめれば一言になるかもしれない？
また人を生かすのは　一つのメッセージではなかろうか？

つまり人は　一つのメッセージによって生き
……　一つのメッセージを残す　ということだ

旧約聖書には一言人生が多数書かれている　①アダムの系図
…②セツ…③エノス…④カイナン…⑤マハラレル…
⑥ヤレド…⑦エノク…⑧メトセラ…⑨レメク…
七代目のエノクを除き彼らの記録は判で押したようである
「〇〇は〇〇歳になって〇〇を生んだ。〇〇を生んだのち
〇〇年生きて男子と女子を生んだ。〇〇の年は合せて〇〇年
であった。そして彼は死んだ」……それだけ

ただしエノクには死の記録が無い。「エノクは神と共に歩み
神が彼を取られたので、いなくなった」とある
人間が死に勝つ勝利の約束　および救の預言である
我々はどのように生き　どのような一言を残すだろうか？

（一九九九年二月一一日）

命の座

泰子は　昼間もベッドに入っている事が多いので
直接寝室に入ってベッドのそばに立つ
「ヤッコ」というと　ちょっと表情が動くが声はない
聞こえないぐらい小さい声で「ドースル」と言っている
私も「ドースル」と応じながらポンポンと毛布をたたく
会話はないから　お祈りしたり賛美したりしながら
彼女の頭をなでる　正面から見ると真っ白である

毛髪は太くゴワゴワしている　それに触れながら思う
「この薄い頭皮の下で前頭葉や大脳に何かが起こっているん
だろうか…すこしばかり萎縮が起こっているのか？
変質が起こっているのか？斑点ができているのか？
小さな小さな脳梗塞が多発しているのか？それとも
遺伝因子によるものか？……とにかく
それによって　人間がほとんど人間でなくなってしまった
しかしまだ命は残っている（と確信する）
残らしめている方のご意志とパワーがあると信ずる

人間が何かを始めておきながら投げ出すなら不真実である

造りぬしは真実そのものであるから
きちんと締めくくって下さるに違いない

（一九九九年二月一九日）

カナダからの手紙

西原　文江

一年があっという間に過ぎてしまいました。

先生、百合子先生には、いかがお過ごしでしょうか。

私達はハンナ、サムエル共々に、無事に今年のクリスマスを迎えております。主人が召された後、もう一年半となりました。家の中、手にふれるもの、目にふれるもの、毎日の出来事すべてが、主人を失った悲しみをくりかえしくりかえし呼びもどし、涙を流さない日は一日としてないような毎日でした。

母の召されたのが、一九七七年一二月一五日でした。心の痛みがようやく癒されるようになるのに二十年近くもかかりましたが、又、今から長い間、新しい痛みが続くのでしょうか。でもイエス様が十字架の上で側の罪人に『汝は今日天国にいるなり』とお約束されたのですから、母も人もイエス様に相まみえていることを信じて感謝しています。私共をこの素晴らしい信仰に導いて下さって本当にありがとうございました。また前田教会の兄弟姉妹の方々にも主にあってのお交わりを心からありがとうございました。

先生には私共聖書を読むことを教えて下さいましたね。日々、聖書を読ませて頂くことによって心の平安と慰めを戴いております。前田教会の皆様はいろいろな問題に合われる時、すぐ先生のもとにかけつけて、御言葉とお導きをいただく事が出来て本当に幸せですね。先生宅のドアは二十四時間いつもオープンでしたね。先生のお宅はいつも訪問客が絶えなくて和義さんのお証し（『ぶどうの木』の中で）によると、お子様方が遅い夕食を、お腹を空かせて待っていられることも度々だったとのことですね。この様な先生御夫妻の上に、又お子様方の上に（今はもうお子様ではなく、お子様のご両親の方もいらっしゃいますが）イエス様のお恵みの雨が限りなく降り注がれます様にお祈りいたします。

さて私共の毎日はまだ忙しさの連続です。私も六十一才になりましたので、いいかげんに退職して隠居の楽しみを味わいたいと願っていますが、そうはいかない現実です。一九九〇年から一九九三年の間に大学に戻り、数学とコンピューターサイエンスの高校一級免許状を取っていましたので、今は

これを使って、トロント市教育委員会の公立高校をかけもちして、教職にたずさわっております。時々、教室の窓の外の景色と学生の顔を見ながら、感慨無量になったり、夢を見ているのではないかと思うことがあります。明治学園で教鞭を取っていたとき、将来カナダで数学とコンピューターを教えるようになろうとは、夢にも思ったことはありませんでした。天のデザインは不思議なものです。学生は高校一年生から五年生迄で、楽しい仕事です。サムエルの卒業した高校も私の担任校の一つで、サムエルの昔の先生方と今はよいお友達になれて、喜んでいます。

ハンナは今年の夏に実習が終わった後、八月の終りからいよいよ弁護士司法試験の最終段階の筆記試験が始まりました。最終試験科目は一二月一四日です。無事合格すれば、二月の終りに晴れて弁護士として免許状を戴くことが出来るそうです。

サムエルは今トロント大学の工学部の三年生です。主人の癌手術の後、機械工学部から鉱山地核工学部に余儀なく移りましたが、今はそれでよかったと喜んでいます．と言うのは、サムエルの小さい時からの夢は、ポリューションフリーの車（公害をおこさない、環境を汚染しない車）をデザインするということで、機械工学に入ったのですが、そのような仕事は自動車メーカーの本社にしかなく、結局はアメリカに住まなければならないのだそうです。それに比べて、カナダは天然資源（地下資源）に恵まれて、すべての地下資源会社（金、銀、ウラニウム等）はカナダの会社なのだそうです。又、大多数のそのような会社は本社がトロントにあるのだそうです。ですから将来はトロントに定住する可能性が多いのだそうです。サムエルは、トロントが大好きなので、結局はこの方がサムエルの将来のためにもっと適当なのだそうです。高校時代には友達と遊びほうけていたサムエルが、今は朝の五時六時迄も実験室に篭って真剣に学問に取り組んでいるのは本当に見物です。食堂のテーブルで三人ともが一緒に夜遅くまで仕事をすることもしばしばです。私は試験問題の作成、採点、教案の準備、ハンナは司法試験の準備、サムエルは絶えることのない提出物に取り組むという次第です。こんな生活も一、二年のうちに昔話となることでしょう。ハンナは免許状を取得次第、自立の生活を始めるのだそうです。サムエルは来年の春からBritish Columbiaにある Tech Corporationという金鉱で、5～6ヶ月働くことになりそうだと言っています。どんな人生を送るにしろ、主を中心にした生活を送ってくれるようにということだけが、私の唯一の願いです。主人も同じ思いと思います。サタンに惑わされないように、主のみ旨

だけが行われるようにと祈っています。

今日は一二月五日、土曜日です。一二月九日から、今働いている高等学校ではクリスマス試験が始まります。毎日試験監督が一つか二つずつあり、その後は五日間の採点期間が終れば、ようやくクリスマスのお休みです。朝ハンナと朝食の食卓をかこんで、榎本先生のことを語り合っています。九〇才になられた今、まだ主の御用に当たられていることは、どんなに驚くべきことか、前田教会のクリスマス祝賀会のこと、河本の奥様が来る年も来る年も、愛の奉仕をされて、愛参会のたとえようもなくすばらしいお弁当を準備されたこと、クリスマスキャロルの事、三日にわたる新年聖会のこと、先生が一日三度の御用に当たられること、遠くからいらっしゃる会員の方は一日教会にとどまっていらっしゃったことなど話しています。本当に驚くべきことでハンナが私も教会に一日とどまっていたかを聞きました。私は教会の近くに住んでいたと話しました。

今年もクリスマス礼拝に、新年聖会に主よりの聖霊が先生を肉にも霊にもしっかりと支えて御用を祝福され、主の御栄光があらわれますように、切にお祈りいたしております。

一二月五日

手紙

お年賀をありがとうございました。いつも和義先生に父の為に何かと祈りをお願い致し、いつも心のやすらぎを与えられ、感謝致しております。

お聞きになったことと思いますが、主人が、昨年は大手術を二回も致しました。不思議な御力を与えられ、今はお蔭様で、会社にも行っております。勿論現役ではないのですが、そして体力をつける為、歩いたりして、普通の生活になりました。不安なことでもありますが、医者でさえ、「あとは神のみ知る」とか、「これからどうなるか自分にもわからない、後は運ですなァ」と言われました。さすがの主人も神に祈るのはどうしたらよいのか、と言うようになりました。

私は主人が神を求めることは、考えもしませんでしたが、今は朝夕の食事の時の祈り、和義先生に送って頂いた父と同じ大きさの聖書を今読んでいるようです。天国が近づく時に、主人ともども祈りながら、結婚以来、ゆっくりと二人で過ごすことができるのが、本当に神様の御栄えとつくづく思いました。思うがままペンを走らせましたが、ご判読下さいませ。

心から感謝の気持ちを届けさせて頂きますので、よろしくお願いします。

たくさんのお恵み

久保田　宮子
（戸畑）

○ お風呂のとき、隣に住む親子が必ず誰か、私が上がるまで待っていて下さる。
○ 目が悪いので、信号が青になるまで待っていると、教えてくれる。
○ 公園で散歩していると、知らない方が「足どりが良くなったね」と言ってくれる。
○ 車には特に気をつけていると、車の方が手を上げて「通りなさい」と言ってくれる。
○ 病院に行くと、看護婦が優しく声をかけてくれる。
○ 教会の帰りは、先生始め多くの方が車に乗せて下さるが、少しでも天気の時は歩くようにしている。
○ 買い物かごを取って下さる。
○ レジの方が暇な時は全部袋に入れて下さる。
○ 美容院で髪を洗ってもらっているが、時間には必ず待っていて下さる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ほかにもまだまだたくさんありますが、思い出しませんので、今日はこれ位にて　以上

花だより

緒方　とみ子
（戸畑）

① 立冬はすでに過ぎているというのに暖かく、北野天満宮の桜が咲いたり、朝顔の花が軒先に風で揺れている御宅をみかけて、不思議な気持ちです。我が家も、昨年は咲かなかった彼岸花が、白や黄色とみごとに咲いてくれ、気紛れな花にとまどいを感じています。「ムラサキシキブ」という、紫の実のなった木を今年の夏に買ってきましたが、どう育てて良いものやら、分からずにいます。今ではやっと持ち堪えて細くなっていますが、買い主が勉強不足で困ったものです。よい便りが来るように祈っています。ところで、「秋の七草」に入っているという「藤袴」ですが、御宅に少しあげてから、私は場所を移しました。壁際のどちらかといえば、風があまり通らない所です。背はあまり変わりませんが、開花せずに、だんだんと草は枯れるし、今年はダメかと思いましたが、昨年よりも多く花が咲き、大変感謝致しました。おまけに同じ団地の方から貰って戴けて、嬉しかったです。その記念に写真を撮りましたので、見て下さいませ。それから御宅の垣根と同

じつると同じものがこんなに大きくなりましたので、何時かどこかに植えたいのですが、良きアドバイスをお願い致します。これからだんだんと寒くなることでしょう。御体も花も、大切になさって下さいませ。しかし無理をせずに-。

緒方さん！花だよりとお写真有難う。とても、良くとれていて嬉しかったですーーーーと甲高い声の持ち主から電話がありました。そしてハーブの仲間の「セイジ」という紫色の花が咲くので、今度持って行ってあげると言う。これまた嬉しい話です。

（二～三日立ってから、玄関先での感想です。）

素晴らしい、とても綺麗な紫の花を戴きました。良く見たら、それはよその庭先で見かけますが、御手入れの良さを感心いたしました。玄関先に飾っていましたら、主人もさすがに褒めていました。本当に、有難うございます。感謝です。

② 伊規須先生と教会員の皆様へ

＊ いつもお祈り有難うございます。緒方朋代（一九九五年九月三日生）は、今年で三才になりました。

この前、北野のお爺さんの家で、お祝いをしてくれました。玄関前で従姉妹の「岡　ひなの（私とは一ヶ月違いです）ちゃん」と一緒に撮りましたので、見てください。私の、ひばあちゃんも岡のおじいちゃんも、勿論お父さんも、お母さんも元気です。いつか会えますようにーーー。戸畑教会の玄関先にはって、皆様に見ていただいたら、とても嬉しいです。

父と母の死

私は今から一六年前、信仰を捨てた。

三十三歳の時である。そして結婚した。

もちろん、未信者の女性とである。やがて子供が生まれ、子供は二人となった。家が手狭となったため、思い切って、郊外に、父と協力して、家を建てた。昭和四十四年の春先のことであった。半年後、母が病気となった。春の町の済生会病院に連れていったところ、胃の透視の結果、手遅れの胃癌であることがわかった。手術しても無駄であると言われた。余命は半年と宣告された。ともかく入院ということになり、一度、退院して一ヶ月後、再入院の時、母は不治を悟ったらしく、行きのタクシーのなかで、何とも云えぬ泣きたいのを必死にこらえている表情であった。末期の痛みが起きたときの処置のことを考えると、家で死を迎えさせるというわけにはいかなかった。やがて個室に移され、食欲は目に見えてなくなり、家族の付き添いが必要となり、私と弟と私の家内の三人で交代して、看護にあたることになった。

当時、家内には、息子が生まれたばかりで、一才になる前後のことでもあり、止むなく、幸の神の私立保育園に預けた。子供を保母さんに渡すと、さっと保母さんは連れていった。泣きわめく声を後ろに家内は看護へと走った。

昼は家内、夜は私と弟とで交替して一日おきであった。勤め先から直行し、夜が明けると直接、出勤するといった具合であった。

あるとき、個室の戸をあけてはいると、壁際のベッドの上で、母が壁に向かって横臥せの姿勢で、両手を組み、合わせた腕を壁に向けて、斜めに差し上げ、必死に寄り縋るように、もみ絞るように、おそらく、なにものにか、もとめ訴えていた。声にならぬ声が聞こえるようだった。それを境に、急速に衰えて行った。ひと月ほどで最後がきた。夜が明け、朝の七時頃、医師が看護婦に呼ばれて、急いではいってくるとすぐ、心臓の上を組み合わせた両手で強く、いくどか叩いたあと、静かに「ご臨終です」といった。

すぐ母の体はきよめられ、白い着物を着せられ、地下室におろされ、病院さしまわしの霊柩車で運び出され、朝の光の中を家へと向かった。享年六十歳であった。

母は、私が三十三歳のとき、キリスト教の信者の女性と結婚する意思をきかされたとき、ほとんど、恐慌に近い状態に陥った。息子が外国人の女性と結婚するときかされた古い日本人の母を思わせるものだった。

新しい変化に異常に恐怖心を覚える小心さがなせることと

いう一面もあった。

同情心の薄い私は、自分本意で賛否を表明する両親にいっぺんで反感を抱いた。

信仰を捨てた私は、信仰を捨てた真の原因が自分自身のうちにあることを十分承知しているにもかかわらず、その一端の責任が両親にもあるようなうらみさえもった。

死を前にした苦悶に対して、心のどこかで、母に冷ややかな感情を秘めていたことは事実である。母が入院中、勤めの帰りに、付き添いのため、病院へ向かう道すがら、信仰がなかったにもかかわらず、イザヤ書の「まことに彼は我らの病を負い、我らの悲しみを担い、その打たれし傷によりて、我らは癒されたり」というあの有名なことばを心に念じて、母の死病が十字架の上に移されることを、何度も願った。信じてはいなかったけれどもほかに方法がなかったので、そうでもするよりほかなかった。いわば急場しのぎの得手勝手な祈念であった。

母の死後、当時すでに罹っていた父の病気の、パーキンソン氏病が進行の度合いを進めはじめた。右手の手首から先の部分の、こきざみに回転と逆回転を繰り返すけいれんが次第に目立つようになり、人によっては特効薬となりうるドパールという薬も効き目が薄く、次第に病状が進行していって、母の死後、五年で歩行困難となり、寝込むことになった。

当時かかっていた大病院の主治医のところへ出掛け、父の要望で、入院を頼みこんでみた。病院側の世話になるか、家族の看護をうけるか、どの道、治癒の見込みはうすいのだから、病院としては、入院はむだであるので、家庭療養をすすめる、という答えであった。

父のあせりは深まった。弟とも相談して、特別養護老人ホームを見に行ってみたりもしたが、結局は家庭医に時々往診してもらう家庭看護に落ち着いた。見通しはあと六ヶ月と医者から言われた。

すこしは元気のあったはじめの頃は、枕許に取り付けた紐をしょっちゅう引っ張っては鈴を鳴らし、家族を呼んでは、あれこれと、小さなことをしてくれるように父はたのんでいた。

手の指の部分の指圧やマッサージ、腕のマッサージ、拳で叩く按摩等、要求は限りがなかった。ある時、退屈凌ぎに按摩をしながら、宗教の話をした。キリスト教の信仰や救いのこと、阿弥陀如来の「善人なおもて往生す、況や悪人をや」という救わないではおれないという話、知識として知っていることを「……というそうだ」という調子で、受け売りの形でしゃべったことがある。それ以来、同じ話をしてくれ

としばしばせがまれた。もともと父は、神や仏は人間の頭が勝手につくり上げたもので、あれはつまるところ弱者の杖にすぎない、ありもしないものをあるがの如く錯覚している弱虫のたわごとだと一蹴していた。私がキリスト教の教会に通っていた頃、「お前はどうもこまったものだ。たぶらかされて、早く迷信から、目覚めてほしい、バカ息子が」位にしか、考えてなかったところのあるほど強烈な自力信奉者で、「自分を守る者は自分よりほかないと公言して憚らない男であった。それが肉体が弱り、回復の望みももてず、じり貧状態に陥ると、心まで弱ってしまって、宗教の話を求めるようになった。わたしは苦りきった。そして侮蔑を感じるようになった。弱音を吐く父に「男ではないか、男なら男らしく、いさぎよく死を迎えたらどうか、母は、恐怖も苦しみも嘆きも口に一言も出さず、自分の胸のうちにしまって、死んでいった。」と取り合わなかった。このことが後年、ノイローゼにかかって、生きる力を失った時、心の刺となった。同情と憐れみを持たなかった大負債の持ち主の僕が、わずかの債権を盾に、借り手を牢獄にぶち込んだ責めを負わされて、自分もいったん憐れまれた憐れみを取り消されたという新約聖書の話にもある通りのことが自分の身の上におこった。憐れまなかった者は憐れまれることを自分の上に期待できない。後悔も追いつかず、絶望の淵に追いやられる。まことに「情けはひとの為ならず」とある通りである。（にもかかわらず、私は憐れまれた）

深夜、座敷に臥していた父が四つん這いで時間をかけて辿りつき、戸を押しあけて、私と妻の寝ている部屋の入口に身体を引きずり入れ、悲しげな声で呼ぶのを、何度も経験した。それが死の恐怖からだったのか、不安や寂しさ、孤独感からだったのか、判らない。引きずりこまれる恐怖と不安に耐え切れず、救いと同情を求めてのことだったのか、何度も重なると、昼間の疲れで寝ているところを起こされる腹立ちで、邪険に脇の下に両手を背後から入れて、廊下を引きずるようにして、もとの寝室に連れていき、横臥させると戸をバタンとしめてかえすということになった。同情も何もなくなった。長く寝つかれ、入浴、しもの世話、食事をスプーンや箸で入れてやる給食、散髪、床の取り替え、絶え間ない暖房の配慮、ひげそり、下着の取り替え、紙オムツ、便秘のゴム手袋をはめての処理など、妻と交替や単独でやら、毎日勤めから帰ってくると、それらが待ち構えている異常な生活の連続は疲労と異常な精神状態をもたらした。

用があるとき、呼び鈴をならせるように、長い紐で枕許と居間をつないでいた仕掛けも、あまりのべつ幕なしに鳴らされるので、使えないようにしてしまった。

父の顔は、医師の予言した時期が近づくに連れて、死相を帯びてきた。肉付きのよかった身体も枯れてきた。

病臥を聞いて、見舞いにきてくれた親類知人の姿も途絶えた頃、会社で残業して帰宅するため、家の前まで来ると子供が路上につっ立って待っていて、私の姿を見ると、「爺ちゃんが死んだ、さっき」と云った。会社を出た直後の死であった。その日の午前中、水を欲しがるので、楽呑みで妻がお茶か牛乳を呑ませたのが末期の水となった。すっと死んだということであったが、死に目に息子の私を合わせなかったということが後々までも妻の悔やみとなった。

父も母も葬儀は仏式であった。訳のわからぬお経に送られ、死出の旅路へ出掛け、大分の父の故郷にたててあった墓の中に納められた。肉体の一部である骨が、火の洗礼をうけて、骨壷に集められ、透明な水をたっぷりたたえた中にすっぽりと浸かって、墓の下に動くこともなく、小さな小さな空間の一部を、今日に至るまで占拠している。

それが七十五年と六十年の人生のついのすみかとなった。あとに残されたものは幾ばくかの衣装と記憶、－それも子供の死と共に失せてしまうはかない記憶のみである。

座敷の仏壇の上に掲げられた二人の遺影とも云うべき写真は、日数を経るにつれて、見られることもほとんどなくなった。孫たちは、夜、写真が上から不気味に見下ろすということが理由で、写真のある部屋で寝ることを怖がる始末である。

父と母に関して祈る時、わずかに憐れみの加えられることを願う以外に、何ができよう。何もできない。

旅路

上野　米子
（大濠）

命

「みことば」

『あなたの目は、
まだ出来あがらない私の身体を見られました。
わたしのためにつくられた我がよわいの日の
まだ一日もなかった時
その日は　ことごとく
あなたの書にしるされました。』

詩篇一三九篇一六節

『われらの年の尽きるのは、ひと息のようです。
われらのよわいは七十年にすぎません。
あるいは健やかであっても八十年でしょう。
しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであって、
その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。』

詩篇九〇篇九－一〇節

『われらにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を
得させて下さい。』

詩篇九〇篇一二節

「試練」

私は今、八十路の坂をのぼりつつありますが、このみことばに自分のよわいをかえりみ、この思い出をたどりました。

私は蒲柳の質で、余り丈夫ではありませんでした。五才の頃から祖母の住む、水戸の近くの田園で育てられ、小学校一年に入学、六年間の修学を終え、父母の住む東京に帰り、少女・青年期を迎えさせていただきました。

学生時代は、先生のお手伝いをして学び舎の学友のため、放課後、登校路の辻に立ち、補導の任を与えられました。学校関係の御集会には、いつも選ばれ、御奉仕させていただき、見聞を高めさせていただきました。

その後、僅かな期間でしたが、東京市に奉職し、我が国の興亡を決する第二次世界大戦の中に立たされました。

其の後、体を痛めて、祖先の地にかえり、療養を努めました。

その時、結婚の話が持ち上がりましたが、完全な本復をいただきました後にとお答えしておきました。

お話の相手は、海軍省所属の報道カメラマンとして、南海の大空に中国大地の戦火の中に、東奔西走し、敗戦の姿を以って、帰国した方です。

南海の大空に散った山本大元師の壮烈な死も、機上で拝聞し、涙したそうです。

お話も進み、神様のお導きを信じ、上野家に迎えられ、横浜の住民となりました。

戦火を浴びて、焼野原となった横浜の家を整理して、しばらく田舎にて静養を以って体力の恢復につとめました。そして私も町の要望に由り職場を与えられ、学校に勤務し、当地で一子を与えられ、其の成育に全力を注ぎました。両親・私・そして子供と同じ学校に学び、お世話になりました。そして主人は麻痺を覚え、就床の身となりました。戦時中の疲れでしょうか？その時与えられました御聖言は、私にとって忘れることの出来ないおことばとなりました。

それはロマ書五章三節のおことばでした。

「患難は忍耐を産み出し、忍耐は練達を産み出し、そして希望は失望に終ることはない。それは聖霊に由って、神の愛が私達の心に注がれている」

私は朝毎にこのところを開き、拝読して、忍耐にうむことなく、神に望をおいて、ひたすら祈りました。子供の卒業も間近になりました。いろいろな思いが私の魂をゆるがします。その時、主の恵が私に注がれました。御真実な主の恵のみことばです。「あなたがたの思い煩いをいっさい神にゆだねよ、神はあなたがたをかえりみて下さるから」私の心は決まりました。私は退職の願を提出しました。（ペテロ第一　五・七）

「福岡」

子供の小学校卒業を期になつかしい故郷をはなれ、福岡の住民となりました。

その頃(昭和三十二年)、福岡市に民放第一号のテレビ放送局（ＲＫＢ）開局の話が進み、主人がニュース、映像、報道の技術者としてお招きをいただき、赴任しました。

開局には何としても間に合うようにと寸暇を惜しみ、昼夜兼行して其の整備に努めました。私の口からは、言葉にもペンにも現すことはできませんが、「ただ、ただ主は生きていませり」の一言につきます。主のあわれみを心から感謝申し上げます。

現今の充実した放送局の万端を伺い知る時、「主よ、命あらば、このよろこびを、主人にも与え給え」と祈らずには居られません。平成十一年を迎え、召された主人も十年を数えます。主人存命中に、つづいて新しいテレビ局も開局し、その

営業に入りました。どんなにか、よろこんだことでしょうか。神の祝福を賜り、主の御栄光を拝させていただきました。

「力は神にあり。望みも神にあり」と。

主と共にあることは、どんなに感謝でしたでしょうか。

我が生涯にいただきました試練と云う痛みのとげは主を握りしめる生命の恵のとげに代り、主の祝福にかわりました。

「見よ、今は恵の時、見よ、今は救いの日なり」と申されました。（コリント第二　六・二）

主は小さき者の重荷を一身に負い、信じる者に、安き魂を与えて下さいました。

「我が恵、汝に足れり」（コリント第二　一二・九）

生かされてまいりました過ぎし日々の歩みに思いを馳せ、この草文を捧げました。

平成一一年九月　敬老の日に

長き生涯を生かされて

猪城　なみ（大濠）

明治三十三年四月十六日、私は父「矢谷米蔵」、母「いよ」の六人きょうだいの三女として、鳥取市川下町に生まれました。五歳のとき、東品治町の二千坪の敷地に移り住みました。父は材木商を経営いたし、山を持ち、鉄道の枕木などを製造いたしていました。私はおとなしい子供でしたが、芯の強いところもありました。両親、兄姉弟に囲まれ、幸せにすくすく育ちました。大正六年、鳥取県立高女卒業の時、山陰音楽大会でオルガン演奏をいたしました。そのころ、姉「ひで」はお茶の水女高師へ進み、その後、弟「寿雄」も東京音楽学校（現芸大）の声楽科に進みました。ピアニスト井口基成氏とは同期だったようです。私も先生についてオルガンを学んでおりましたので、東京音楽学校へ進みたいと思っていましたが、声楽の試験があり、声が小さいこともあり、父も、上に進まず、お嫁にいった方がよいのでは、と申しましたので、断念いたしました。

二十二歳の時、ホーリネス教会牧師多辻春吉先生のもとで、鳥取市千代川に於いて、八月三十一日、洗礼を受けました。その頃、上の姉「よし」、弟の「寿雄」も洗礼を受け、教会に

通っておりました。多辻先生の奥様は末永弘海先生とお親しく、九州にもいらっして、末永寿・ユキご夫妻にお会いになり、その折、夫「英一」に会われ、「あなたはどんな方がよろしいですか」とお聞きになられたそうです。「思想をもった人がよい」と主人が申し、そのときに多辻奥様がわたしのことをふさわしいと思ってくださったごようすで、すぐにお見合いをいたしました。その頃、英一は京都帝国大学に在学中でした。翌年春、大学院で経済学博士河上肇教授のもとで学ぶことになり、大正十二年、英一二十八歳、私二十三歳で、福岡女学院教頭藤川勝丸先生ご夫妻のお仲人で、福岡メソジスト教会（現福岡中部教会）に於いて、結婚式をいたしました。京都では佐伯様の借家、下鴨に住みました。姉「ひで」も同志社大学法学部教授今中次麿氏に嫁ぎ、近くの今出川に住んでいまして、よく会うことができました。大正十四年、長男だった英一と福岡に帰り、西南学院高等部（現西南学院大学）の経済学部の講師になりました。杉本勝治先生とは三年間学友でございました。

住まいは材木町（現天神）に二百坪の瀟洒な日本家屋に主人の両親弟妹達と大家族でとても賑やかでした。二年後には主人と私で藤崎に移り住みました。広い庭にはみかんの木があり、豊かな自然の中でテニスを楽しみました。幸せな日々で、私達は箱の子町バプテスト教会下瀬牧師のもとへ伺っておりました。母「ふじ」は浜の町伝道舘（現福岡大濠公園教会）へ参って、とても熱心でございました。

昭和六年、浪人町（現唐人町）に両親弟妹と住むことになりました。主人の末妹「きよ」は福岡女学院に通っておりました。私が音楽を学びたいことを知っていました実父が、私にドイツ製のピアノを贈ってくれました時は、大変うれしく思いました。大正十一年、ベルリンに姉ひでも一緒に留学していました義兄、今中次麿に父が頼んだようです。その頃、荒戸にお住まいでした横田先生にピアノを教えていただきました。今思うと、主婦でありながらお稽古に行かせていただき、主人両親に感謝でございます。西南学院長のドージャー先生の奥様がなさっていた地行の幼稚園で一年間オルガンを弾かせていただき、ご奉仕をさせていただきました。昭和九年四月二十一日、結婚十二年目に長女が生まれ、主人は大変よろこび、毎日のように体重を計り、成長をうれしく思っていました。三年後、次女が生まれ二人の子供たちはバプテスト教会で幼児洗礼を受けました。長女も次女も日曜学校にも通わせていました。長女が小学校に入学してからは、よく授業参観に学校へ行っておりました。今で申します教育ママのはしくれだったようです。

子供達もすくすく育ち、幸せな日々に、思いがけなく主人が体調をこわし、九大の後藤教授に手術をしていただきました。主人はよく出来た人でした。その反面、気を遣い、「疲れた」とよく申し、帰りまして休むことがありましたが、幼い頃から病気をしたことはなく、修猷館時代は沢山ごはんをいただいていた元気な人でしたと、主人の祖母より伺ったことがございました。

元気になりまして、西南学院で教鞭をとっておりましたが、三年後の昭和十七年再発いたし入院、鳥取より実兄もかけつけ、輸血をしてくれました。私の懸命の祈りも神様には届かなかったのでしょうか、十七年三月二十日、天国に召されました。主人を亡くしましたが、淋しい、悲しいと思う間がなかったように思います。幼い子供たちをこれから育てて生きていかなければならないという気持ちで精一杯だったと思います。主人の両親が健在だったことは悲しみの中、とても救われました。父「宗太郎」は大変寛大で、情愛深く、幼い子を育てるのに、力強い気持ちでございました。主人亡きあとも長男の妻として心を尽くし、そのことが感謝でもあり、喜びでもありました。父が私をたててくださり、最後まで信頼してくれたことがうれしく感じました。その父も、昭和十九年二月六日、八十六歳で永眠いたしました。それから母と子供たちの生活になりました。母は淋しく思うのでしょうか、「英一が元気だったら」とよくそう申しておりましたが、親族が多く、母の元へ訪ねてくださり、教会にも熱心に参り幸せに信仰深く、日々を送っておりました。

その頃、お隣に、西南学院児童教育科短大の学長でいらっした福永ツギ先生がお住まいでいらっしゃいました。福永先生のご紹介で、お若い頃の末永博子先生にピアノをお習いいたしました。とても美しくいらして、「この曲は私のおはこですよ」とおっしゃって、ショパン作曲の幻想即興曲を弾いてくださったことは今でも心に残っております。子供たちが福岡女学院にお世話になり、聖書を学び、礼拝で祈ることを自然に教えられましたことは、母として感謝でございました。二人の子供たちも音楽の道に進むことができましたのも、亡父宗太郎、夫英一のおかげと感謝いたしております。昭和三十九年四月十五日、母ふじが神に召されました。信仰深く、病に倒れます数週間前まで、教会に伺い、元気にいたしておりました。九十三歳でございました。夫の弟妹親族の見舞いを受け、見守られ幸せな生涯でしたと存じます。母によく「みなさん、教会に行きなさい」といわれておりました。

前後いたしましたが、昭和三十六年、長女が結婚いたし、次女と二人の生活になりました。その後、私も福岡大濠公園

教会に伺い、榎本利三郎先生のお話をお聞きすることの喜びを与えられました。時々、オルガンも弾かせていただきました次女も結婚いたし、幸福になりましたときは本当にうれしゅうございました。近郊だったこともあって、次女の嫁ぎ先へも時々出かけました。ファミリーの一員として、やさしく迎えられ感謝でございました。この頃より、聖書を読むようになりました。よくみなさまにお淋しいでしょうといわれましたが、「神様がいつもそばにいて下さいますから」と申しております。

ピリピ人への手紙四章四節一七節、「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守であろう」。

私の好きな聖句で、心にとどめて祈っております。平和な日々でしたが、昭和三年に亡父が建て、六十年間住んでおりました家屋が思い掛けもなく原因不明の火災にあい、平成元年二月七日に全焼いたしました。思い出の品をすべて失いましたが、亡父母、亡夫の心は私の心に強く残りました。その折は、榎本和義先生ご夫妻がすぐに駆けつけてくださり、大変ご心配をおかけいたしました。先生ご夫妻のお気持ちは今でも感謝でございます。教会の信者の方、婦人会の方にもお心をさしのべていただき、お礼の心でいっぱいでございます。

平成二年、神様のみ守りのなか、長女が大阪より帰りまして、こちらに住むことになり、現在の自宅を建設いたすことになりました。一階を自宅にし、二階から四階はワンルームのリースマンションにいたしましたので、オーナーの長女としては心の負担も大きかったことと思います。「サンライズイキ」と名付け、亡父も喜んでくれていると思います。平成二年三月十八日に亡母ふじの二十五回忌の記念会をいたしました。親族十数名が集まり、榎本利三郎先生をお招きいたし、祈りの時を持つことが出来ました。榎本先生のお話の中に「建物は古くなっていくものです。形ではなく、先祖の信仰の心を次の代へと受け継ぐことが大切です」と、お話くださいました。

昨年の夏、長女の孫（十歳の男の子と八歳の女の子）、私にとりましては曾孫でございますが、数日間を過ごせて大変嬉しく思いました。父母夫の信仰をこの孫、曾孫達に受け継いでほしいと祈っております。今春、私は九十九歳になります。

昨秋より、足腰が弱ってまいりまして、教会へ伺うこと少なくなって参りましたが、神様が主人の分まで生かしてださったことに感謝いたして、祈って参りたいと思っています。

平成十一年一月記

受洗五十年感謝

廣田　壽（前田）

本日は、多くの皆さん方にわが家にお出でいただき、感謝会を持たせていただくことができてありがとうございました。

はじめに聖書を拝読します。

ロマ一一・三六『万物は神から出で、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アァメン』

Ⅰコリント一五・一〇『しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。』

滅ぶべき身が、主の福音により新しく生かされ、神の救いに入れられました。これは、筆舌に尽し難い大きな恵みであり、特に八幡前田教会のお交わりの中で先生はじめ、皆さんの祈りの内に育まれたことを心から感謝いたします。

ある信者の歌に「失聴の嘆きに勝り若き日の、受洗の喜び思うこの頃」という証しが歌われていました。耳が遠くなっても不自由だろうに、全く聴こえなくなった嘆きに勝って、救われた喜びを感謝し、勝利しておられるさまに、若き日に救われたわたしも、と、七十余年を生かされてみて共感を覚え、「もし主ともにいまさずば」と、感謝の思いを強くしたこと

であります。

いま、み言を拝読しました『万物は神から出で、神によって成り…』のみ言は、何処から来て何処にゆくのか、何のために生きるのか、わからなかった者に、それをハッキリ示して今日の平安をいただく身分とされたのであります。

また、『神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである』のみ言は、全くその通り、いろいろな事の多かった中での五十年、常に恵みによって導かれました。

『神の子と呼ばれるためには、どんな大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい』(Ⅰヨハネ三・一)とありますように、この五十年の記念のとき、深くこのご愛に思いをいたし、もう一度十字架を仰いで、尽きせぬ感謝をささげております。

＊　＊　＊

見えるところに捉われるようであるが、好きにまかせて、記念の写真を作ったので、見ていただきながら思い出と共に証しをすすめていきたい。(次のページの合成写真参照)

① はじめは『信ぜし者は幸福なるかな…』、ルカ一・四五のみ言、受胎告知のマリヤが、ザカリヤの妻エリサベツを訪れた時、胎の子が踊ったとある、そのエリサベツが歌った讃歌である。『主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう』と。

ここには文語訳と元訳のみ言を並べている。元訳が口語訳と比べても、実に単純明快、そのものズバリと信仰の奥義が語られ、わかり易いと思うからである。

家を増築した後、古い荷物を整理していて出てきた一冊の聖書がある。受洗の時、長崎の友が記念に贈ってくれたもの、両親が使われていたものらしく、小さなポケット型で、皮表紙が一部スリきれている。明治三八年初版で、大正六年の出版『主の言を信ぜし者は福(さいわい)なり、蓋主の語(かたり)たまひし如く必ず成(なる)べければ也』となっている。このみ言は、常に先生が「丸のみに主の言を信ずる幸い」と語られるところであり、また毎週、神癒会で祈られるみ言である。

そはが蓋しとなっていて、よくよく考えてみればという字があてられている。

こうしたみ言が、聖書のいたるところにあり、み言に導かれてきた五十年を思う。聖書のどこにあるかよくわからなくても、みたまが思い起こさせてくださる。といわれているとおりで、特に若い日に刻み込まれたみ言は、

忘れ難いものである。

②つぎは、『常に喜べ、絶えず祈れ、凡てのこと感謝せよ』Ⅰテサロニケ五・一六～一八のみ言である。この柱掛けも、古い荷物の中から出てきた。若い日、教会でクリスチャン生活の基本と教えられ、四十五年前に書いたもの。遺跡から掘り出された木簡に似て、アメ色に変色している。五十年の積み重ねも唯、年月の長さではなく、『後なる者は先に…』マタイ二〇・十六とあるように、み心にかなう歩みでありたい。敬虔を教えられる、喜べ、祈れ、感謝せよのいましめを、日々守りたい願いである。

③ついで、ゲッセマネの祈り。余りにも有名なホフマンの聖画である。『父よ、この酒杯を我より取り去り給え、されど…御意のままを成し給え』マルコ一四・三十六と。血の雫の如き汗を流して祈られた主のみ姿である。わたしのために、十字架の道を歩まれた主の苦しみを偲ぶと共に、この画を見る度に教えられるのは『まどわしに陥らぬよう目を覚まし、かつ祈れ、心は熱すれども肉体弱きなり』と三度弟子に言われたことを、自分の姿として受け止めさせられることである。

「胸さくるほどのきみの苦しみを、思わでみ弟子ら夢路をたどりぬ」(讃美歌一三三)とあるように。

④最後は栞にした「プロミス・キーパーズ」である。先生が講壇から語られたもので、アメリカの教会から始まり、今や社会の波となって「聖書の原点にかえる」という大きな風になっていると。とかく恵みに馴れ易いこと、世と妥協し易いことのいましめとして、心に刻まれている。下段の「ザ・ランド・オブ・プロミス」は、プロミスを調べていて教えられたもので、「神がアブラハムに約束されたカナンの地」と訳され、更に、希望の地、天国としるされていた。天に住いが備えられ、希望の生涯に入れられていることは、何ものにも勝る喜びであり、感謝である。

＊　＊　＊

長くなりました。受洗五十周年を心から感謝し、塚をたて、壇を築いて、今一度、聖書の原点に立ちかえり、御国を待ち望んでお従いしたいと願っております。祈りに覚えて下さるようお願いします。（平成一〇年一一月一日、信徒会にて）

我が思い出(九)
旧満州(現中国)編

鈴木　一幹

（前田）

一、右手指切断手術か

初年兵の食事当番勤務は、ペチカの管理も大切な仕事となっており、ペチカの灰出し、清掃後は新しい石炭に点火しなければならず、炭バケツを持って、営庭に中隊毎に山積になった石炭置場から石炭を掘って持ち帰るわけですが、点火の際は塊炭（かいたん）を選んで使用しないと着火（ちゃっか）が悪く、食事当番兵は、各班競って塊炭を集めていました。十一月に入った頃になると石炭の山も粉炭ばかりとなり、早朝凍り付いた石炭の山を、ツルハシで掘り起こし、スコップでは粉炭しかすくえぬため、軍手のままで塊炭をより出し炭バケツに入れていました。

早朝は零下二十度となり、濡れた手袋もすぐに凍り、指先もしびれて無感覚となっていました。一週間毎に回って来る食事当番で、ついに私も右手中指と薬指の先端が、白ろう色に変色し、全く感覚が無くなりました。ついに凍傷にかかったようです。

入隊時に母が用意してくれた救急薬袋の中にあった缶入り

のメンソレータムを塗って自分で治療していましたが、毎日の訓練で、どうしても右手指を使うため、日々悪化していました。

たまたま今度事務室勤務となり、作成した書類を連隊本部に届けた折に、医務室に立ち寄り受診しました。鈴木軍医殿より「一応治療をし、様子を見ることにしよう、もし好転しないときは、手術しかないなあ」と言われました。私はそれから毎日治療に通い、毎夜神様に、何とか手術にならずに済みますようにとお願いし、祈りました。

一週間が過ぎ再診を受けました。軍医殿は「指先から膿が出ているが、余り好転していないな。今週末までに好転が見られなければ、来週火曜日(十二月五日)午後手術をする」と言い渡され、手術の際の留意事項が書かれた注意書をもらいました。治療中に衛生兵殿から「手術は右手の中指と薬指をそれぞれ先端の第一関節から切断する」とのことでした。

私は気が動転するショックを受けました。手術を受ければ少なくとも一週間は入室させられるとのことでした。

帰隊して山崎曹長殿に報告しました。「それは気の毒だな、だが頑張って充分に治療しなさい。余りくよくよするな、お前のお陰で、事務処理も順調だし、貴様が居てくれるだけでも大助かりや」とはげましの言葉をいただきました。この言葉にはげまされて気分も落ち着き、私の運命は神様におまかせしてあるので、何も心配することはないのだと心に言い聞かせ、気分を一新して事務机に就きました。

二、動員令発令

今日は十二月二日土曜日、朝の点呼時、週番仕官の大神少尉殿から「本日十時に中隊長殿より重要なお話がある。従って全員中隊の前庭に集合せよ。従って、各兵科毎の訓練は中止する。以上」と伝達されました。一同は何事だろうかと予想しかねていた。私は事務室に行き、山崎曹長殿や中村上等兵殿と朝食をとりながら、中隊長殿の重要発表とはどんなことですか、と二人に尋ねました。

山崎曹長殿は、「わしもよくわからんが、昨日連隊本部で全隊会議があって、中隊長殿も出席され、副官殿も、いつになく緊張されておられたが」とのことでした。

午前十時近くになり、中隊全隊が各班毎に集合する中で、前田中隊長殿がおもむろに台に上り、大神少尉殿の号令で「頭右、直れ」と敬礼を行い、引き続き中隊長殿より次のとおり、命令の伝達がありました。「今から師団長閣下の命令を伝達する。我が第十二師団は十二月十日を期して（は号）演習に参加する。以上」と伝達を終え、そしてさらに次のとおり付け加えられました。「明朝午前十時、我が連隊は東寧神社に参拝し、その後引続いて師団長閣下の閲兵を受けることになっている。なお当連隊の（は号）演習参加への出発日は十二月九日である。それまで、各班毎に出動準備をするよう命令する。終り」とのことでした。出発まで後一週間あるので、事務処理、特に功績名簿の作成も極力早く完了させる必要があるなと思いました。

解散後、事務室に帰り、山崎曹長殿の指示で、出発日までの事務処理、事務用品の整理、出発時の荷造り梱包、搬出等について打合せを行いました。

三、手術延期

午後から山崎曹長殿のおともをして連帯本部事務室に出来上がった分の功績名簿百名分の提出と命令書受領のため出頭し、佐藤準尉殿に名簿を提出しました。佐藤準尉殿は「第四中隊はさばけとるな。前回の五十名分は一枚の間違いもなく、立派に記録されていた。今日百名で残り約五十名分だな。まだほかの中隊は早いところで五十名分、まだ提出されていない中隊もある。なかなかよく整理できとる」と言われました。横に立っていた山崎曹長殿が「この名簿は、鈴木二等兵が全部書いたもので、入隊まで、これを担当していたとのことで、四中隊は助かっております」と答えました。すると佐藤準尉殿は「山崎曹長、鈴木二等兵を連帯事務室にくれんかのう、専門家がほしいなあ」と言われました。山崎曹長殿は「それはお断りします。先日やっと中隊の中で見つけ出し、中隊長にお願いして中隊事務に入れたばかりで、それはできません」と答えました。「まあ、その内相談するよって考えとけよ」と大塚準尉殿は言われました。山崎曹長殿は「鈴木二等兵、早く帰ろう、長居は無用だ」と言って命令書を受け取って立ち上がりました。

帰路私だけ医務室に治療に立ち寄りました。衛生兵殿に治療を受けていると、鈴木軍医殿が「来週五日予定していた貴様の手術は（は号）演習のため延期することになったから、明日から当分の間、自分で治療するように。ガーゼと薬を投与するから、衛生兵にもらって帰れ。明日から新任地に到着

するまでは自分で処置をするように」と言われました。（は号）演習参加命令が発せられたため、ひと先ずは手術を受けずに済んだと内心ほっとしました。

四、血判での嘆願書提出

午後三時頃事務室に帰って来ると、山崎曹長殿が待って居られ「鈴木二等兵、貴様は大変なことになったぞ」と言われ、さらに続けて「（は号）演習に参加できない残留組に、当中隊で十五名居り、貴様もその中に入っている。残留組になった理由は、貴様が一人息子だからだ。一人息子が他に二名居り、その他の十二名は年令四十五才以上の者だ。師団長命令で、そのようになったとのことだ」とのことでした。

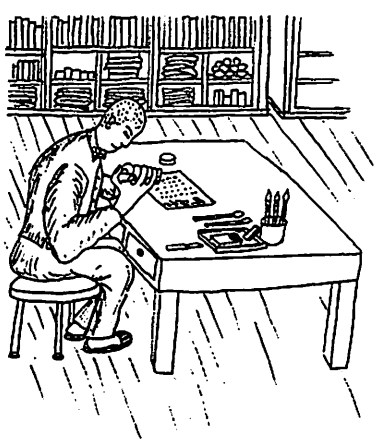
私は突然のお話しであったので、ただ茫然とし、深い谷底に落とされたような気持ちになり、返す言葉もありませんでした。

帰班し、消灯前に班長殿より、中隊長殿の伝達として、古兵殿二名と私が残留組になった旨の言葉をいただきました。

古兵殿二名は臨時召集兵の上等兵で、何れも四十五才を過ぎておられ、その内の一人は、われわれ初年兵のためによく面倒を見ていただいた陣内上等兵殿でした。私は後で班長室を尋ね、佐藤班長殿に私の気持ちを打ち明け、ご意見を求めました。「私は班長殿には一方ならぬお世話になり、兄とも思っております。従って出陣に当たっては、ご一緒に隊に加えていただき、何れ戦死する場合でも、班長殿のお供をして死にたいと思っております。従って師団長命令とはいえ、今この隊が出陣を前にして残留することは、自分としては耐えられません。私の母や、家の祖父母も出征する時は、もう戦死しても国の為だから、と既に覚悟はできております。この状況を考慮いただき、是非（は号）演習に連れて行っていただくようお願いしたいと思います」と言いました。

佐藤班長殿は、一言ずつ、うなずきながら聞いておられましたが「そうか、貴様の気持ちは良く分かったので、それでは嘆願書を書いて持って来なさい。山崎曹長殿にも頼み、一緒に中隊長殿に書面を渡し、我々からもお願いしてみよう」と言って下さいました。

私は九時の消灯時間は過ぎていましたが、一刻を急ぐことでもあり、事務室の勝手も判るので、早速事務



室に行き、半紙を用意し、嘆願書を墨書で記しました。また署名の下に、事務用の小刀で左小指を切り、血判を押しました。

そして神様にお祈りをしました。「天の神様、今日は右手指の手術があると決心しておりましたが、貴方のおぼしめしとお導きにより、手術が一応延期になりましたことを感謝いたします。しかるに今後は、動員令による隊の出陣を前にして、残留組となっております。私は是非共一緒に参加いたしたいと思っております。ここに中隊長殿宛の嘆願書をしたためました。ただ今から班長殿に提出しますが、どうぞ貴方の力をもって、私の願いをかなえて下さるよう、主イエス様の御名により、御前に捧げます。アーメン」と祈りを捧げた後、班長室に佐藤班長殿を尋ね提出しました。

翌日午前九時頃中隊長室に呼ばれ、前田中隊長殿より「貴様の嘆願書は見せてもらった。貴様の覚悟の程が良く分かった。それに、山崎曹長も、鈴木をはずすと困ると言うし、佐藤班長よりの強い願いもあり、熟慮の結果、師団長命令に逆らうことにもなるが、万一の責任は、わしがとることにし、参加させることにする」との言い渡しを受けました。私は「有難うございます。今後共よろしくお願いします」と言って一礼し退室しました。

事務室に帰って来ると、山崎曹長殿の机の前に佐藤班長殿も来て居られ「よかったなあ、山崎曹長殿からも中隊長殿に頼んでいただいたからなあ」と言われました。私はご両者に対し「ほんとにお手数をお掛けしました。ほんとに有難うございました」とお礼を申し上げました。

山崎曹長殿は髭をさすりながら「中隊長殿から除外十五名の中に鈴木の名があったことを聞いた時は、ほんとにおれは困ったなあと思ったよ、貴様がいなくなると今後の仕事に支障をきたすからなあ、今朝佐藤班長が、あの嘆願書を持って来たときは、ほっとしたよ、あれさえあれば必ず中隊長殿を説得できるちゅう自信があったからなあ、ワッハッハッハ」と大声で笑い、「ともかく良かったのお、これからも今までどおり、頑張ってくれよなあ」と言って、私の肩を何度もたたきました。

その夜就寝して思いました。もしあのまま残留組になっていたら、この北満の国境の部隊が全部この地から居なくなるとしたら、どうなるだろうか。当隊の大砲等重火器の主力武器が部隊と共に全部移動し、後は四十五才以上のロートル兵（老人兵）等少数の兵力ではソ連の戦車部隊と対峙して、到底国境線を守ることは不可能だろう、当中隊で十五名として一個連帯で二百四十名くらいだろう、しかも砲兵隊では武器

として砲以外では小銃のみであるから、一人一丁としても二百四十丁の銃のみと考えられると、ソ連戦車部隊には到底歯も立たぬことになると思いました。残留になる当班の古兵殿二人、特に陣内上等兵は、今後はどのようになるのだろうかと考え、なかなか眠れませんでした。

特に私の場合、右手指の凍傷もあり、残留組となっていれば、これからの何か月間は毎日零下何十度という寒さを、果たして体が乗り切って行けるかどうかと思い、今日の参加許可となったことは、神様のお導きだったと思い感謝の祈りを捧げました。

各班は毎日出発準備に追われていました。砲手班は砲の手入れと、持参する弾薬の整理、御者班は馬の手入れと、鞍引具、ロープと継架柵の準備、馬糧の荷造り等に多忙をきわめ、班に帰っても、私物の整理、携行する寝具（主として毛布等）の選別準備、小銃や小銃弾の準備、帯剣の刃先の磨出し、等用意に追われていました。

五、満州よ東寧よ、さらば

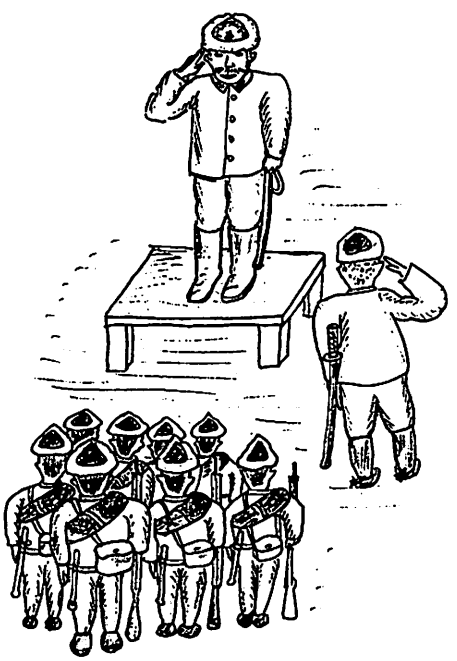
出発の前夜の食事は鯛の御頭付に赤飯で、出陣にふさわしく豪華な夕食でした。若干緊張の中にも、にぎやかさがありました。残留組の二名の上等兵殿を中央にし食卓に就きました。班長殿より次のとおり挨拶がありました。「我々は明朝八時に当隊を出発する。朝食は予定通り済ませた後、各自飯盒に三食分の飯と、おかずを詰める。東寧駅までは整列行軍を行う。東寧駅では、砲、馬、車輛毎に貨車に乗せる。我々は各班毎に客車に乗車するが、窓は閉めたままで行くことになっている。任地は不明であるが、先ず目的地は朝鮮の釜山港であるので、それまでは食事の補給はない。各自の水筒には朝食後忘れぬようにお茶を入れておくよう、以上明日の出発に際しての諸注意をしておく」と言われました。次に話を続けられ、残留の二名について、次のとおりの言葉がありました。「今回の出動に当たり、残留となられたお二人については、師団長命令ではあるが、自分としては、今まで一緒に苦労を共にしてきて、誠に残念ではあるが、明朝、我々が出発して後の午後から、新規に部隊が到着するとのことである。この部隊に参加されることになっております。ご両人には、先任の古兵として、良く軍務に精励され、特に初年兵に対して良く面倒を見ていただきました。私からもお礼を申し上げます。これから益々寒くなるのでお身体に注意して軍務にご精励されることをお祈りします」と挨拶され、食器に清酒を注ぎ、中村兵長殿の発声で乾杯をしました。

続いて陣内上等兵殿から挨拶がありました。「私は皆様と共に出陣したかったわけですが、命令であり致方ありません。私はこの部隊に召集される一年前、長男が予科練に入隊し、現在何処に居るのか判りません。初年兵の諸君を見ていると丁度息子を見ている感じがしていました。初年兵の諸君は今までよく耐えて訓練にはげんで来られ、どこの戦場に行っても、ひけを取ることはないと確信します。今後体に気を付けて、今まで通り頑張って下さい。私は今年で五十一才になりますが、第四班の皆様には、大変お世話になりました。どうぞお元気で」と言われました。班長以下全員で拍手しました。

陣内上等兵殿の眼には光るものが見えました。

翌朝点呼後、私は馬舎には行かず事務室に直行し、山崎曹長殿の指示どおり、事務室前に配車された輜重車（荷車）に事務用行李（荷物を入れる用具）を積み、御者班の兵に渡しました。中村上等兵殿は第一班に、私は第四班に帰班しました。馬舎から帰班した兵と一緒に朝食を済ませ、三食分の飯（かしわ飯）と副食（奈良漬、タクワン、開きメンタイの干物）を飯盒に入れ、各自水筒にお茶を入れ、背負袋（下着等を入れた袋）を背に掛け、雑のう（非常用に食べる干パン三袋入り……これは師団長閣下の許可が無くては食べられぬ非常食）を掛け、帯剣を着用し、更には私は小銃を持つことになっていたので、用意し、一同中隊前に集合しました。

中隊長殿の出発の挨拶の後、全員各班毎に整列し、砲廠に向かいました。途中各班の御者班は馬舎に行き、それぞれ準備を進め八時前に全員準備が完了しました。



軍装を整えた四中隊は中隊長を先頭に東寧駅を目指し出発しました。二一二部隊正門に差しかかりました。衛兵指令の号令が聞こえました。「気を付け、頭右……（中隊長は馬上から答礼）なおれ」中隊長の次は将校（大神少尉、宮崎少尉、石井見習官）、山崎曹長等の馬が続き、その次には第一班の砲を引いた六頭仕立ての馬が前馬、中馬、後馬の御者三人の誘導にて進み、次に二頭仕立ての弾薬車、同じく糧秣を積ん

だ二頭仕立ての輜重車が進みました。馬のいななきと、蹄（ひづめ）の音、車輪の音が静けさを破り、谷にこだまし、兵のはく息、馬の息も白く立ちのぼりました。正門のかたわれに四中隊の残留兵が見送りに出て居られました。中に陣内上等兵殿の姿がありました。互いに手を振って別れをおしみました。さようなら、と、二度と再び来ることはないだろう、この土地、砲撃訓練でいつも目標にしていたあの山々、そう思いながら短い、間ではあったが住み慣れた野砲兵連帯を後にしました。

六、関東軍（当時満州に派遣されていた日本陸軍）と南方戦線

当時の関東軍は日本陸軍の中では最も訓練が厳しく、世界最強の軍隊とまで言われていました。従って、南方の戦線が拡大するに応じ、大本営は在満州の関東軍の精鋭部隊に南方戦線への派遣を命令

し、その補充を内地から行い、直ちに教育訓練を行わせ、再び南方に出動命令を出していました。

私の遭遇した（は号）演習の前には（い号）と（ろ号）の各演習が発令され、それが何時ごろ、そして南方の何処に派遣されたものか、当時は何も判りませんでしたが、後になって次のようなことを聞きました。

「い号演習」＝昭和十七年十二月、大本営は当時イギリスの植民地であったビルマ（現ミャンマー）の攻略を、当時の関東軍の第十五軍（司令官、飯田中将）に命令。

当時の中国には日本軍が八十万、満州に七十万、計百五十万が配置されていました。

特に中国戦線は地図でも判るように範囲が広く、イギリスから中国への救援物資、戦略物資が、ビルマから中国に送り込まれていたわけです。これが即ち当時、援将ルートと呼ばれていました。従って、中国の戦況を有利に導き、早期に戦争を終結させる手段として、この援将ルートの絶滅のため、満州の精鋭部隊をビルマに向け出動させるため（い号）演習命令が出されたと聞きました。この第十五軍の兵力は、第三十三師団、第五十五師団の二個師団で、その兵力は四万人であったとのことでした。

（ろ号）演習＝昭和十八年三月大本営は、ビルマ方面軍第

十五軍総司令官に牟田口中将を任命し、インドのマニプール州都インパールを攻略する作戦を命じたと聞いています。

これには関東軍の精鋭三個師団、兵員約四万九千名が投入されましたが、不幸にもその内約二万名が戦病死し、約一万七千名が、行方不明又は病気後送されたと言われ、その損耗率は七十四パーセントにも達したとのことでした。

（満州編終り）

次号から台湾編

＊『ぶどうの木』（二六号）の「わが思い出（八）」にいくつか間違いがありましたので、訂正いたします。

◎「日本軍もソ連軍もおる（四六頁上　二一行）」

←

「日本軍もソ連軍もお互いに夜間国境線まで行って、相手側の様子のさぐり合いをする」

◎「中退長室」（五一頁上　一行）→「中隊長室」

◎「国語」（同下　一四行）→「国語の先生」

◎「連帯事務室」（同下　一九行）→「連隊事務室」

◎「「連帯副官」（同下　二〇行）→「連隊副官」

汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり、

（ヨハネによる福音書一五・一六）

津留崎　浩行

（前田）

今年の冬は私にとって厳しい冬でした。というのは、平年よりも寒さが厳しかったし、また暖かさと寒さが交互にくる、その温度変化がいつもの年よりも激しかったと思います。本年、私の体調は例年の冬よりも急速に不順となり、手足の動きが大変鈍く、わずかな時間歩いても疲れるような有様でした。日曜日の礼拝以外はほとんどの集会に参加することができず、うちで聖書を読もうとしても今度は目のほうが涙目になってしまってなかなか読むこともならず、朝の家拝のときに家内にすべて読んでもらうような日もありました。

そんなな中で主はいつもわたしを深い顧（かえり）みの中においてくださいました。静かに主との交わりを頂きながら、上を見上げると、主がいつも「お前はすでに私が十字架の血を注いで、買い取ったものであるから、もうすでに私のものとなったんだよ」と言う主の御声が聞こえるような毎日でした。

御宝血によって、生まれながらの罪人であった私は罪許され、全く潔いものとされ、創世の昔、神様が人を造って下さったままの、その罪のない人と同じようにして、神様のそば

において下さるようになったのです。神様の一方的な御愛のゆえに、悪魔の支配するこの世の中からイエス様の手によって引き抜かれ、この世からまったく区別された潔い神の世界、神の手の中に神の子として、生かされることとなったのです。どうしてそのような恵を頂くことになったのか、私にもわかりません。ただ、神様の一方的な御愛による、一方的なお選びの中に置いていただいたことを感謝申し上げるばかりです。

『録して「神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり」とあるがごとし』

（コリント前　第二章九節・文語訳）

まわりの事情がどうあろうと、神の子となった今、上よりの平安、喜び、望み、そして主に対する感謝が絶やされることはありません。

「準縄はわがために楽しき地に落ちたり。宣われよき嗣業をえたるかな。われは訓諭をさづけたまふエホバをほめまつらん、夜はわが心われをしふ。われ常にエホバをわが前におけり、エホバわが右にいませばわれ動かさるることなかるべし」（詩篇一六篇六～八節）

「われ常にエホバをわが前におけり」とありますが、主が一方的に私を選んで下さって、ご宝血を注ぎ、わたしを前に置いて下さるのです。様々な事情のとき、苦しい時、戦いの時、主はいつもそばにいて、顧みのなかに私を置いていてくださるのです。

「其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む」

（ヨハネ第一　七節）

「ヤコブよ、なんぢを創造せるエホバいま加此いひたまうふ。イスラエルよ、汝をつくれるもの今かく言い給ふ、おそるるなかれ。我なんぢを贖へり。我なんぢの名をよべり、汝はわが有なり」

（イザヤ書四三章一、二節）

アーメン、ハレルヤ。

（一九九九年三月六日）

切り出された岩と掘り出された穴

丸山　恵美子

『あなたがたの切り出された岩とあなたがたの掘り出された穴とを思いみよ。』（イザヤ五一・一）

神なく、キリストなく、信仰の何たるかも判らない、ちり灰に等しい、無知なるこの者を、神はこの片田舎から未知なる八幡の地へと導かれ、そして信徒の方々との出会いにより、八幡前田教会へと導かれ、礼拝の民としていただきました。この尊い救いにあればこそです。目も見えず、耳も聞こえず、悟りもにぶい者たちのためにささげられた、榎本先生御夫妻を始め、信徒の方々のたえざる篤き祈りに支えられながらの旅路でした。感謝にたえません。

『静まりてわたしこそ神であることを知れ。』

（詩篇四六・一〇）

朝ごとに命の聖言を頂き、夕べにいたるまで聖手に守られながらの旅路は何と幸いなことか、思わず『主に感謝せよ、主は恵み深く、そのいつくしみは永遠に絶えることがない』（詩篇一三六・一）と、感謝がこみ上げてきます。そして「霊感賦二十六番」の賛美が出てまいります。そして一日の旅路が始まります。もう二度と帰らぬ今日一日、一時、一事の大事さをしめされます。私共がどんな中から救い出され、どんな大きな計り知れない御愛を給わった事か、次々と思い出され、辛く悲しく、又山あり谷ありと思えたことも、尊い主の御愛の現れるためでした。

長い旅路、自我のゆえに尊い主の御愛の聖手に守られながら、それも見えず、悟らず、まるで親に手を引かれながらのおさなごの様に、よそ見したり、後ろを振り向いたり、自分を義とし、自分の思いのままに生きてきた不信仰な者達を、『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである』（ヨハネ一五章一六節）、長い間、聖手に守り支え、「悔い改めを」選んだ責任においてということでしょうか、待っていて下さいました。

『たといわたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。』（テモテⅡ二・一三）

『わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず
白髪となるまであなたがたを持ち運ぶ』

（イザヤ四六・四）

本当に主のあわれみに、感謝申し上げます。

主人の長い闘病の中をも、榎本先生をはじめ、皆様に、た

えざる篤きお祈りを頂きました。またご多忙の中をもいとわず、いと小さき者たちのため、遠方より度々おいで下さり、尊い御用、御愛の労を取ってくださいました。送って頂く聖言にはどれ程慰め励まされた事でしょう。主にあるがゆえと、心から感謝申し上げます。

「母は涙かわく間なく祈ると知らずや」(讃美歌五一〇)とありますが、主人はお祈りに支えられ、主の御許しを得、御あわれみにより、御手に守られ、平安そのものに変えられ、召されました。そして霊の故郷である前田教会にて、この世の旅の最後の別れに、愛する榎本先生ご夫妻始め皆様、また遠方より和義先生方々に見送られていきました。主にある事の幸せ、喜びをどんなに主に感謝し、主をほめたたえた事でしょう。有難うございました。おくればせながら、紙面にて厚くお礼申し上げます。

この間の経験はすべて、長い闘病の中での主の御恵み、お働きです。そこで、タラントをそのままにしては主に申し訳なく思い、ペンをとりました。

一九九五年六月一三日　早朝

一晩中眠れず、自制を失いました。疲れたのでしょう。朝方一時間程休み、目覚めました。そして恵美子と呼びました、静かな声で。「恵美子、俺の言う事をメモしてくれ」。言われるままに書きました。

「恵美子よ、俺の信仰はたまに教会に行くだけで、たいした信仰ではなかったけれど、お前の信仰は本物だった。それに限って思い残す事はない。四二年間、長い付き合いだった。良くついてくれた。心から礼を言う。千分の一も恩を返す事は出来ない、これでいいのかと自分でも思うけど、いと仕方ない事だ、最後に頼る人は、聖名イエス様にすがるより道はなかったと今、考えられるようになった。

榎本先生、奥様へ

榎本先生、奥様、お世話になりました。俺がこのような不信仰な状態で、先生、奥様がどんなに悲しみ嘆いておられる事か…(後は言葉にならず泣き出す)」。

こうして皆様にも感謝の言葉を残しました。そして身近な人達には、「信仰一筋に生きてほしい」と、よれよれの字で書き残しております。それから二ヶ月後、入院の身となりました。長い修行時代を終えてきたせいか、人様の前で話すのが苦手でした。ですから声を出して祈る事をしませんでした。

『人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである』（マルコ一〇・二七）

自我のゆえに、霊肉共にぼろぼろに使い果たした身なれど、不思議な様に、ふと我に返る時がありました。若い時から何とか仕事ができるように、満足できる仕事をと求め、「努力、努力」と、若い日の日記に書いてあります。ここまできて、人の努力、人の熱心の空しさを知り、どんなに自分の不信仰を悔い、辛く悲しく、残念だったと思います。しかし、『苦しむ者が呼ばわる時、』この時を待っていて、心開いて頂いたのでしょうか。「イエス様、あわれんで下さい」と声を出して祈りました。その一言の祈りと榎本先生の説教にありますが、もうおさなごのようなきれいな目に変わりました。

一九九七年九月二九日午後

『たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく』（コリント第二　四・一六）

「あわれみだ、あわれみだ、もう何もないよ、最高に幸せだよ、恵みと言うか、あわれみと言うか、嬉しい、嬉しいばかりだよ。もう余計な事よ」、と肉なる言葉は受け付けなくなりました。そして日を追うごとに言葉もなくなりましたが、お祈り、賛美だけを望み、最後、声を振り絞るようにしてアーメンと賛美しました。岩隈姉、髙木姉、中村兄姉ご夫妻が共にお祈りのあと、岩隈姉が「丸山さん、大丈夫ですか」と問われますと、心の底からしぼりだすように、「大丈夫」と答えました。が、あれが、皆さんとの最後の別れとなりました。時の流れは早く、召されて十一ヶ月の月日が過ぎ去ろうとしています。

『まず神の国と神の義とを求めなさい』（マタイ六・三三）

もっと早く主に素直で、従順であったなら、共々に取り越し苦労もしなかっただろうに。しかしこのように如何ともしがたい者達を許しあわれんでいただきました。

今、この年になって、「素直は宝だなあ」と実感させられます。今朝の礼拝説教で、「悔いはするけど改めがない」、全くその通りでした。

『日々にわれらの荷を負われる主はほむべきかな、神はわれらの救いである。』（詩篇六八・一九）

『わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる』（イザヤ四三・一九）

その後、わたしもこれからは、教会の近くに住み、礼拝を守れるよう、そして静かな余生をと願い、祈っていました。そんな時、この様な目しい、耳しいな者達の所に昨年一〇月より、都城集会が始められました。金生先生が「第一回目の都城集会のためにお祈りしましょう」とお祈りされた時には、本当に驚きました。この様に不信仰、不従順な私共の所にもったいなくて、これでいいのかと恐れ入りました。あれから半年、一回一回、命の息を吹き入れて頂く思いです。感謝でいっぱいです。

『健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。』（ルカ五・三一－三二）

何も見えず、わからない私達ですが、主の聖名が崇められますように共にお祈りしています。そして十一月には退院まもない榎本先生が共においで頂き、また驚きでした。二回の御用の後、高速で日帰りされました。しかしその後、林兄が重体の中、「先生、都城集会でしょう。行って下さい」と言われたと聞き、先生方々、林兄から、信仰のあり方を改めて教え示されました。

『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨てて、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい』（マルコ八章三四節）

以前、大阪集会のため、「たとえ一人といえど、どこまでも行かせてもらいます」と、夜行列車で北九州から大阪まで日帰りしながら尊い御用をして下さった先生を思い出し、ただただ頭の下がるのみです。本当にとるに足りない者でありながら、先生方をはじめ、皆様方のこうした長い間の厚き祈りによって、今日があるのだと日々、身の引き締まる思いがいたします。榎本先生の主にお仕えなさっているお姿は若き日より見聞きしていたはずなのに、つい、恵みに慣れ、自分にとって楽な道をと、怠惰になり、不信仰、不従順な自分の愚かさを示され、主の前に心から悔い、魂が呼び起こされました。

心を騒がせ、思い煩いやすい私に、主が主人を通し、「何もないよ」「余計なことよ」と語ってくれました。『無くてならぬものは多くはない』、今もこの言葉がよみがえってきます。

『空の鳥を見るがよい、まくことも刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それだのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる』（マタイ六・二六）

今朝も庭の木で、小鳥がきれいな声で歌っています。まるで「わたしたちを見なさい」とでも言っているようです。「そうだね」とうなずきながら、主にある事の喜びを心から感謝申し上げております。

『あなたのみ言葉はわが足のともしび、
わが道の光です。』(詩篇一一九・一〇五)

万物は神からいで、神によって成り、神に帰するのである

林　由記子
(前田)

主人が身体の異常を訴えて夕方帰宅したのは、昨年の十月十六日のことでした。かかりつけの病院で診察して頂いた結果、血小板の数値が低い事を示されて、年金病院で再度診て頂き、その日のうちに入院となりました。

「置かれたところで主にお従いしてゆこうね」と励まし合い、いっさいを主の御手におゆだねして、ただ主のあわれみをお祈りしました。この日は診察が午後の三時半すぎで、病院は大変混んでおりました。色々の手続き、準備が終わって、やっと落ち着いたのは夜の七時過ぎでした。めまぐるしい一日でしたが、主がすべてをこの様に導いて下さったのだと思いました。

この夜から激しいふるえと高熱の症状が起こってまいりました。このふるえというのは、とても激しいもので、体全体が大きく揺さぶられる様にふるえるのです。顔もブルブルふるえて、見ていて主人が可哀想でなりませんでした。私は両手をひろげて主人の体を押えて、ただ主のあわれみをお祈りしました。ふるえが一時間位で終ると、今度は三十九度以上

の熱が出まして、主人はとてもきつかっただろうと思いますが、主が与えて下さる平安によって、いつも安らかな顔をしていました。この様な症状が一日に五回位は起こったように思います。

入院して三日目に、検査の結果が出て、主治医から私に病気の説明がありました。「骨髄にたちの悪いものがでてきています。これが増えてきますと、白血病よりも恐い病気になります。今、中高年の人に非常に増えてきている病気です。御主人は何でもお話しして下さいと言われていますので、お話ししましょう」と告げられました。「私共は神様を信じているクリスチャンです。どうぞ何でもおっしゃって下さい」とお願いしました。『わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。』主の尊いお約束のゆえに、共にいて下さる主が私を支えて下さり、私の心は自分でも信じられない位平安を与えられて、落ち着いて先生のお話をお聞きする事ができました。主人の顔を見るのは辛くて、涙があふれそうになりましたが、この時も、主が強い御手で私を支えて下さったので、いつもの様に接する事ができました。

ある日、いつもの様に症状が出てふるえている時に先生がみえて、主人の状態をみて「どうしてかなぁ、解らないなぁ」と頭をふっておられました。そこで、胸のレントゲンをとってみようという事になり、その結果、片方の肺に肺炎が起きている事が解ったのです。

入院してから次々と症状が出て、思いがけない事が起こってきましたが、どんな時にも父なる神様にお祈りが出来ることを心から感謝しました。いつも教えられていることですが、私達は神様から造られ、神様によって生かされている者です。どんな御取り扱いを受けても、神様に文句を言える資格はありません。ただ主が置いて下さったところで、お従いするだけです。このことを更に深く教えて頂いて、感謝致しました。

点滴の本数が増えて、肺炎の症状が段々となくなり、主人にも少しずつ食欲が出てきました。主治医の先生も「良かったね、良かったね」と、御自分のことの様に喜んで下さっていました。

私は朝早く息子に病院へ送ってもらい、夜、迎えにくるまで主人の所で過ごす事ができました。私も息子もこの頃はとても疲れがひどくて、車に乗り込んだらぐったりとなっていた状態でした。ある日、帰りの車の中で息子がふと、「お母さん、僕達の今の苦しみはイエス様の十字架のお苦しみに比べたら、とても苦しみの中にははいらないよね」と言ったのです。

ハッとしました。神様はこの様な状態の時に、私に大きな

慰めを与えて下さり、同時に私の祈りをきよめて下さいました。

イエス様がゲッセマネの園で父なる神様にお祈りをされた時のお言葉とその御姿を思い起こさせて下さいました。

『父よ、この杯をわたしからとり除いて下さい。しかし、わたしの思いではなく、みこころをなさって下さい。』このお祈りを通して、神様は私の心を探って下さり、『わたしの思いではなく、みこころをなさって下さい。』と祈る祈りへと整えて下さいました。

次の日、病室へ行きましたら、主人が「お母さん、今、天国を見せて頂いたよ」と言うのです。「とてもきれいな美しい所に、真っ白の花や薄いブルー色の花がいっぱい咲いていて、それはそれは美しいところだったよ。建物は彫刻のようなものが建っていて、本当に美しいところだったよ」と嬉しそうに話をするのです。「まあ、お父さんはもう天国を見せて頂いたの、本番の時に見せて頂けるのに、二度も見せて頂けるなんて、しあわせ者よね」と、私は何気なく笑って答えていました。

苦しかった事が夢の様で、しばらく楽な日々を与えて頂きました。主人は退院してからの事などを、嬉しそうに外を見ながら話をしておりました。その時の嬉しそうな顔が今でも鮮やかに思い出されてなりません。

召される四日位前に、先生から「もう一度、骨髄を調べてみましょう。その結果、御主人にお話しをして、今後の治療方針をお話ししましょう」と言われました。実は私はこの検査の結果をとても楽しみにしていたのです。それは最初に報告を受けた後、主は雲のごとく霧のごとく消すと御約束して下さっているので、必ず骨髄の中は全く新しくして下さっていると、信仰を与えられていたのです。(しかしこの検査をする前の日に同じような症状が起こってきましたので、とうとう検査はできませんでした。)

先生からこの様に言われてから二日たって、また以前の様に激しいふるえと高熱がでてきました。今度は解熱のため、座薬を使っていたのですが、余り使用すると血圧が下がり始めました。そのため座薬は半分しか使用できず、その分熱が下がるのが時間がかかるようになりました。主人はきつそうでした。

しかしこの状態の中にあっても、主人は「こんな中にあっても、主が共におられるとお証し出来ることは素晴らしい事だね」と主を崇めておりました。

イエス様の尊い十字架の贖いのゆえに、罪赦され、神の子とされた私共は、どんな中にあっても勝ち得て余りある日々

を過ごさせて頂きました。先生がみえて、「僕がうっかりしていました。申し訳ありません。少し残っていて良くなっていると思っていましたが、反対側に肺炎が起こっています」と告げられました。この日の夜に、和義先生や都城集会から早く帰ってきて下さった榎本先生、金生先生がいらして下さり、讃美し、お祈りの時を与えて頂きました事は本当に感謝でいっぱいです。

次の日（召される日）、朝に先生に呼ばれまして、「肺がまっ白で、胸に水がたまってきています。心臓もはれてきています」と告げられました。主人は不整脈がありましたので、この不整脈のある人が肺炎になると非常に危ないのです。この不整脈が無ければ、持ち直すかもしれないとも言われました。「これから苦しくなりますよ」と言われ、延命治療についてお話しがありました。しかし「すべてを神様のみこころのままにと祈ってまいりました。主が良しとおっしゃるなら、命を与えて下さいます。生も死も主の手の中にありますので、色々の延命治療は申し訳ございませんが、いっさいなさらないで下さい」と申し上げました。なかなか理解して頂けませんでしたが、お話しを重ねている間に、先生もこころよく理解して頂いて、それまでの治療ですすめて下さいました。これからが苦しくなりますと言われてから、段々と主人は安らかな息になりまして、時折、ねむっているという状態でした。意識は召される一時間位前までありましたので、子供達と私と主人で讃美し、お祈りをし、主人に感謝の言葉を伝えました。主人も子供達に色々話しをしておりました。この様にしばしのお別れの時を与えられたことも感謝で一杯です。安らかに、穏やかに、勝利のうちに、神様のもとへ帰らせていただきました。

その夜、教会へ送って頂いて、休ませて頂きました。

翌朝、主人に礼服を着せてあげたいと思って、棺のフタをあけまして、主人の顔を見ました時、私の心は喜びと感謝で一杯になりました。

主人の顔は主イエス様にお会い出来た喜びに満たされていました。美しく輝いていました。私共家族、親族はどんなに大きな慰めと喜びを頂いた事でしょうか。ただ主のあわれみと御愛に感謝で、主人を通して天国への望みを新しくして頂きました。

前夜式、告別式を通して、主がひとつひとつ御栄光をあらわして下さいました。

このようないと小さき者の家族に、ただイエス様の御愛のゆえに、お恵みのゆえに、たくさんの方々が列席して下さり、お別れをして下さいました。多くの方々に愛され、もったい

ないような、あたたかいお見送りを受けて感謝にたえません。

キリスト教のお葬式にはじめて参列された近所の方々や親戚の人々、友人知人、この方々から、キリスト教の式の素晴らしさ、清らかさ、質素さに強く感銘を受けられたこと、「あのように皆様で讃美して頂いて見送ってもらいたいね」とか、私もキリスト教に改宗したいとか、色々とお聞きして、私はびっくりするやら嬉しいやらで、神様がこの小さい者の祈りにひとつひとつ答えて下さった事を心から感謝致しました。

何回となく病院へ足を運んで下さいました榎本先生、金生先生はじめ、かげにあって私共を支えて下さった兄弟姉妹の方々、あついあついお祈りとお心づかいを心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

今、主人が召されて六ヶ月が過ぎました。こんなに早く主人とお別れするなんて考えてもみませんでした。しかしすべては主がゆるしておられることです。

『生まれるに時があり、死ぬるに時があり』(伝道の書三・二)の御言葉の通り、すべて主の御支配の中にあることを思います。

主人は走るべき行程を走りつくして、主の御許へと帰らせて頂きました。やさしい主人でした。神様のお恵みによって、私にとって一番必要な人を与えて頂いて、三十一年間、共に主にお従いしてまいりました。主人との生活の中で、主の御愛に触れさせて頂き、主の御力や、今も生きて働いて下さって教えて頂いたお恵みの数々が、これからの私の力となって下さることを感謝致します。

主人の召天を通して、まことに「万軍の主は生きておられる」ことをはっきりと示して下さいました。

ピリピ人への手紙一章二〇、二一節『生きるにも、死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである。わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である』　このような生涯へと導いて下さった父なる神様の御愛にどの様にお答えしていくべきか、なすすべも解らない者ですが、主はたえず『わたしの愛のうちにいなさい』と語りかけて下さいます。この御方の御愛に全く信頼して、一足一足主のみ声のみにお従いしてまいりたく願っております。

林正二郎兄追悼の詩

正野　真宏
（前田）

帆柱山から吹き付ける冬の風が
カタカタと教会の窓を叩きます
まるであなたが語りかけているかのように
その音に　ふとあなたのことを思い出すのです
あなたが座っていた席には　あなたの姿はなく
そうだ　もういないのだ　と
言い知れぬ淋しさが込み上げます

平成十年十一月三日　午後八時五十分
あなたは天に帰っていきました
愛する家族を後に残して
それはあまりにも早い死でした
お見舞いに行った時
家族会のにわかに出るからね　と約束してくれたのに
教会でも熱心な祈りが捧げられていたのに
こんなに早く召されるなんて
神様どうして？　との思いにかられます
けれども　神は愛なる方であることを知っています

あなたは愛する家族と最後の別れをなし
感謝して御国へ凱旋されたのでした
主にある者の別れはなんとすばらしいものでしょう

あなたは今　全ての労苦を解かれ
善かつ忠なる僕との報償と
義の冠を受けていることでしょう

あなたは　真実に信仰を守り通し
忠実に主の御用を果たされました
教会の行事には　いつもあなたの姿がありました。
私達はあなたがいるからと甘えていたのかも知れません
家族会では面白いことを言って皆を笑わせ
クリスマスの劇では　無くてはならない役者でした
あなたが亡くなって　存在の大きさを知るのです

日曜学校は一緒に御用をさせていただきました
あなたは早くから来て　すべての準備をなし
私が来た時は　一人静まっていました
私は知っています
生徒一人ひとりのために　どんなに祈っていたかを

あなたの死を知った生徒たちは涙を流し
告別式に見事な胡蝶ランの鉢植えを備えてくれました
今はもう散って　その花びらを見ることはできませんが
来年も　その次の年も必ず咲いてくれるでしょう
それは　主の甦りと私達の復活とを告げ示し
再び相まみえる時が来る希望を　与えてくれるでしょう

主のみ旨が何であるかを悟りなさい

エペソ人への手紙五・一五

大田　敏夫（前田）

コスモスに想う

秋、美しい桜の花の様にパッと散った
優しい林さんを偲びながら悲しみと、
感謝の中で

平成一〇年一一月一二日

私は戦いを立派に戦い抜き、走るべき行程を
燦！　走り尽くして、信仰を守り通した。
今や義の冠が私を待っているばかりである。

テモテ　第二　四・七～八

何と美しい安らかなお顔で

「父は走るべき行程を走り尽くし、信仰を守り通して、喜び勇んでエス様の元に召されて行きました」

信仰に堅く立った一孝君のしっかりした挨拶が凛々しく式場に響き、参列者の胸を打った。傍らで、由記子奥様が必死で涙をこらえて俯いておられるのを見ると、たまらない思い。お別れに覗く棺の中、「よう、今日は！」　目を開けたら、今にも飛び出しそうに、眠っている林さんは、つやつやして、優しく、美しく、昨日までとちっとも変わらぬ安らかなお顔だった。四日前夜式、五日告別式が、前田教会で行われた。我が子の様な林さんを送られて、榎本先生の御胸中いかばかりか。

平成十年十一月三日、秋、気高い菊の香りと共に、美しく咲くコスモスの花に色どられる文化の日、私達の昔は明治節の佳き日だった。午後八時四十五分、日頃尊敬してやまぬ、林正二郎さんが、天に召された、若くてまだ六十三才、肺炎、心不全ということだった。

「林さんが亡くなられた！」翌朝の早天に出た邦子から聞いて耳を疑うばかり。その日のお昼過ぎ、「又来るからね」と手を振ってお別れしたばかりなのに…！。入院されて僅か一ケ月たらず、あっという間の、どうしても信じられない正に突然の出来事だった。人の命のはかなさ、神様の御命令の厳しさ、次のみ言葉がヒシヒシと胸に迫ってくるのでした。

あなたは人をちりに帰らせて言われます
「人の子よ帰れ」と。
あなたの目には千年も、過ぎ去れば昨日のごとく
夜の間にひと時のようです。
詩篇九〇篇三～四節

神様どうして！

「エス様を信じる者には永遠の命が与えられます、主のお恵みの尊さ……」何度聞いたお説教でしょう、それを信じて疑わない心算です。

しかし、フト我に帰った時、あまりにも苛酷！、神様どうして！、あなたの御旨はどこにあるのでしょう。とついつい問いたくなる肉の思いを断ち切ることの出来ない、信仰のない私です。

「しかし、神の賜物は、私達の主キリスト・イエス
に於ける永遠の命である」

有難い感謝のみ言葉ですが。今度の様な林さんの…突然の死…に直面した時、どうしても深い悲しみに打ち沈んでしまいます。

天地を創造された偉大なる神様、その神様の御考えは到底、

私達には計り知ることの出来ない程、高く、深く、大きなものと、分かっていながらも。朝を迎えてみ前に集い、元気で健康である毎日を感謝、まだまだ死にたくない私達です。

……春風に乗って、天馬に股がり天国に凱旋！……、高木山に登る澄んだ心境になるまでには程遠い私達です。生きていてこそ！、信仰の弱さをつくづく感じながらも……。

天のお父さま、聖名を崇めて感謝します、ババさんのお祈りで始まり、今朝も皆揃って美味しい朝御飯を戴きました。白菜のお漬物がおいしい、梅干しで戴くお茶の味は格別！、フト、先日一孝君から、車を買って貰ったばかりの盾君が洩らしました。「林のおじちゃんはもう、この美味しいご飯は食べられないのね……」

そこに、青森のお兄ちゃん（斉君）から電話がかかってくる、北国にはもう初雪が降ったという。二年前、林のおじちゃんから、お世話になった車で、名勝奥入瀬川の渓谷に飛び込んで、九死に一生を得た斉君、おじちゃんの突然の悲しい報せを聞いて、さぞ胸が痛んでいることだろう。

孫達のみならず、語り尽くせぬ程、お世話になった私達です。たまらない思いです。どうして八十三才の私が生かされ、働き盛り、一家団欒の大黒柱のまだ若い正二郎さんを今、突然奪われたのですか？。少なくとも後十年は生かして欲しかったのです！。

主の御旨はどこにあるのですか？、叫びたくなります、神様どうして！。

大いなる喜びが天にある　（ルカ　一五・七）

林さんが亡くなってからもう十日になる。おるべき人がいない虚ろなお家の中、奥さんどうしておられるだろう！。「召される」という言葉と「死」という肉の現実がからまる。あれやらこれやら、思いが頭の中を走り回る。

今日は久し振りに良いお天気、廊下の椅子に腰を下ろして目をつむる、林さん有難う！、ともろもろの思いに耽っている内に、……ウツラウツラ……、何時の間にか、天国、夢の世界にさそわれてしまった。

ここは帆柱中腹花尾駅、かっての出征軍人のように、万歳、万歳、多くの人に見送られて、宇宙向けて発車する……銀河鉄道九九九……。この列車、時速一光年という快速、（一光年は九兆四千億キロメートル）ビュッー、あっという間に第二の地球駅についた。次の駅は…天国の門駅…ということだった。

そこは病床にある時、林さんも覗かれたという素晴らしい

天国、何万本というコスモスが乱れ咲いている。後ろは鬱蒼と茂る小高い山に続いている。天馬に乗った人間に混じって、リスや狸や狐や猪達が遊んでいる。歌ったり、踊ったり、楽しそうだ。動物達は皆、羽がはえて自由に空を飛び回る！、

山との堺に川が流れ、川縁に教会があった。入り口に二本の大きな銀杏の大木があった。教会を守っている様に立っている正二郎の木と、もう一本は由記子の木、二つ併せて「林」という。

いい所だなと見とれている内に、ひんやりとした一陣の風とともに、辺りが真っ暗な闇となった。恐ろしくなった動物達は、皆、森の中にかくれてしまった。

暫くして又明るくなった時、正二郎の木の姿が忽然と消えていた、どうして？。せっかくの林はまた元の木に戻った。由記子の木は淋しくなって悲嘆に暮れた。「エス様お助け下さい。」必死に祈った。エス様は優しかった。「よしよし暫くの辛抱だよ」と由記子の木の頭をなぜられた。由記子の木は信じて疑わなかった。

そして時は流れて幾歳月……、根元に落ちていた銀杏の実は、双葉となり、立派に成長して大木となって戻ってきた。お母さんの由記子の木は喜んでエス様に感謝した。一孝の木と、常喜の木の兄弟は寄り添って、林となり、そしてお母さんの由記子の木をお抱き上げて、三本の木は林となり、大きな恵れた森となった。リス達は又戻ってきて花園は又賑やかになった。

ああ良かったなー、由記子の木は感謝した。「主の御旨がどこにあったかを悟りました」と。遠い天国から、正二郎の木が「それご覧！」と手を振っていた。

この夢いつまでも！。

半世紀を経て初めて悟る主の御旨

さあ、林さんの追悼文を書こうと思った時、フト頭に浮かんだのが、表題の聖言、「主の御旨がなんであるかを悟りなさい」という御言葉と、それに繋がる朝鮮時代の主人、伊藤正一社長（以下大将と呼ぶ）と正子奥様のことでした。大将は私の人生で一番大きな影響を戴いた方、今あるは一重に伊藤の大将のお蔭です。その大将御夫妻の人生と、林さん御夫妻の人生に何か繋がりを感じるのです。舞台を六十年前に溯り、振り返りましょう。

『主よ離れて下さい、私は罪深い者です』

ルカ　五・八

使徒ペテロが、エス様にすすめられて網を下ろし、大漁があった時のこの聖言は、漁業に携わってきた伊藤の大将の特愛句だったそうです。大将は学生時代から、皆さんに慕われる熱心はクリスチャンでした。

魚屋から、朝鮮随一の缶詰工場めざして

朝鮮生まれの私は昭和十二年、十八才で伊藤の大将のお店に小僧として入社しました、大将は亡くなった父上の後を継いで、大阪商大を卒業したばかりの二五才の新進気鋭の社長さんでした。仕事は漁業と煎子問屋、そして輸出トマトサジンを作る缶詰工場へと手を広げられる。何と一夜に百万円(当時の)の大漁もあったが、それは何年に一度の夢、魚屋の常として、どれ程お金に苦労したことか、大将は経理係の私の手を握って励まし涙を流して戴いたことも度々。

ぶりからイワシへ。その頃の日本海は海が盛り上がる程イワシの大漁が続きました。丸平水産も縁あって、日産系統の朝鮮油脂の子会社となり長かった苦しみから解放、発展の道を進みます。そして一〇年、このイワシに乗って、ついに、北鮮群仙港に、六千坪を埋め立て、朝鮮一の規模を誇るイワシ缶詰工場を建設、処が、フル操業一年で火災全焼、そして再建、苦労しながらも活気溢れるその頃でした。

原料となるイワシを獲る巾着網船団も三ケ統と増え、出漁前の観艦式に、司令長官として、特設楼橋から挙手の礼で、これに応える大将の胸中は如何！。エス様有難う御座います。主に守られてよくぞここまで！、祈りの中に限りない感謝を捧げられたことでしょう。

そのイワシ絶滅、大将の出征、会社の整理、終戦、引揚

しかし、好事魔多し、昭和十六年戦争の始まる頃、会社のみならず一家の大黒柱だった大将に非情の赤紙召集令状、出征比島前線へ。それから二～三年の間に、さしものイワシが一匹も獲れなくなる悲劇。今でいうエルニーニョ現象、しかしその当時は、その原因さえ掴めない、どうして、どうして？。会社は富士山の頂上から、一挙にすべり落ちる様に奈落の底に！。負けてなるものかと必死の退却建直し作戦が終わってホッとする間もなく終戦、引き揚げ！。続いて入る大将の戦死公報！。これでもか、これでもか、神様の厳しい厳しい試練が続きます。

戦後出版された、大将の追悼集に、恩師中村先生は次の様に述べられています。

「神の御栄を顕す為にも、イエス・キリストの救いと愛を、この世に示す為にも伊藤君はなくてはならぬ人物であった。勿論御家族にとっては、掛け替えのない大切な人であった。にも拘らず、神は敢えて比島での戦歿という形で伊藤君をこの世から奪い給うたのであった。

私は沈思して想う。伊藤君の属する日本国が、無謀な大東亜戦争を始めたので、その罪の償いとして、多くの人々の生命と共に、伊藤君を奪い給うたのである」と。

一家の大黒柱だったクリスチャン事業家の大将が、事業の苦しみの真最中に、まだ一才のひとり子の正嗣坊やを残して、非情の召集、そして戦歿、僅か三七才の若さでした。生きておられたら、榎本先生と同じ年頃です。続く、終戦！引揚げ、日本の苦しみと共に、正子奥様の口に言い現せないご苦労が続きました。残された皆が思ったのでした。神様どうして！、こんなにも？。

奥様は細腕一つで戦われました。米軍タイピスト、洋裁、美容院と仕事を変えられながらも、正嗣君を立派に育てられました。本当に御苦労様でした。

この奥様の戦いを見て、何とか力になってあげたい……、気持はあっても、戦後の苦しさにどうすることも出来ない私達でした。大将ご免なさい、お許し下さい。

それから半世紀、五十数年が過ぎました。

昭和十八年私達の結婚式の時、奥様に抱かれて出席戴いた正嗣坊やは、今大将ゆかりのトマトジュースのカゴメの社長として活躍されています。天上の大将、奥様、どんなに喜んでおられるでしょう。それだけではありません。大将を中心に堅く結ばれていた…釜山教会…の皆さんが、戦後…釜山教会信徒会…をつくられて、毎年のように全国大会として、大将を偲ぶ記念会がもたれました。エス様と同じ様に大将は甦って、皆さんの心の中にず　と生きておられたのです。

十年前、その正子奥様も天の大将の元に帰られました。それを機会に、暫くエス様から離れておられた正嗣さんご一家も、浦安教会の礼拝に出られる様になりました。皆様の投網の中でウロウロしていた私も、とうとうエス様に捕えられました。

今初めて悟る主の御旨

別紙に昭和十八年十二月八日付の、久米さんらから比島戦線にあった、大将に出された手紙を添付します。久米さんは、当時、親会社の朝鮮油脂の経理部長、大将ご出征後、実質的に丸平水産の社長のお仕事を受け持っておられました。親会社の部長とはいえ、大将の最も信頼されていた方、親友でもありました。

大将のご出征後誰もが思いもよらぬ突然襲ったイワシの大不漁で、会社の再建整理必至の状態と共に、ややこしいヤリクリで、大将個人の借金が二十六万円（今の物価は五千倍か一万倍）となっていました。もし、大将のご出征がなかったならば、この借金はどうなったでしょう。終戦、引揚、朝鮮に残した資産は没収、借金だけ残るとしたら……、大将も、奥様も、幼い正嗣坊やも、戦後の苦しみの中、更にこの大きな荷物を背負ってどれだけ苦難の道を歩くことになられただろうか、果たして、今の正嗣さんがあっただろうか、考えるだけで恐ろしくなります。

星霜五十年の年月を経た今、初めて悟る主の御旨、おぼろけながら、分かった来た様な気がする私です。大将のご出征によって、会社の整理再建策と共に、久米さんは、一刀両断、大将個人資産の定置、底曳の漁業権と、この借金を相殺棒引チャラの決断をされて、一切を救って下さいました。神様有難う御座いました。

御旨がどこにあるかを知らずに、八十三才の今、漸く悟る愚かさ！、神様お許し下さい。神様にお詫びする信仰のない私です。

汝ら、心に憂うることなかれ
神を信じ、また我を信ずべし　ヨハネ　一四：一

人の心には多くの計画がある。
しかし主の、み旨だけが堅く立つ　箴言　一九：二一

林さん左様なら！又会う日まで

もう日が暮れました。カラスは山に帰ります、この筆もそろそろ……。この一週間、毎日毎日、林さんと向合ってお話しすることが出来て、楽しい楽しい一刻でした。

先日、「美しい人」…神様の植えて下さった所で花を咲かせる…という、渡辺和子さんの文章を読みました。その中に次の詩がありました。

「咲くということは、笑顔で生きることです。そして

神様があなたをそこに植えて下さったことが、間違いでなかったことを、周囲の人に知らせることです」
林さんこそ、この詩の通りの生き方をされた方でした。何時も、美しく、優しく、常に笑顔で……。教会は、林さんの目に見えぬ場所での御奉仕にどれだけ美しくされたことでしょう。心から感謝を捧げたい私です。

色々な思い出が浮かんで参ります。この絵は、昨年のクリスマス祝会の時に、林さんに作って戴いたもの、「天国の門」で私の役、強情聞かん衛門が背中に負っていた キ カ ン 棒です。私はこの棒が邪魔して、天国の門を通るのに苦労しました。感謝して何時までも大切にしましょう。それを我が家の画伯、盾君が書いてくれ、記念の絵とさせて戴きました。

毎年の家族会のクリスマス劇、名優正野さんと共に、助演林さんなしでは語ることが出来ません。何時だったか家族会の後、城山に桜見物に連れていって貰いました、まだ五分咲きでした。早く散り過ぎた林さん！、八十才までも百才までも、満開の花を咲かせてほしかった！、私達だけの思いだけではないでしょう。

昨日、小倉の厚生年金会館の、レーナ・マリヤさんのコンサートに参りました。

手足の障害等、小指の先程も感じさせない朗らかさ！、エス様によって、彼女はこんなにも美しくされたのでしょうか！。正に感激の一言です。

美しい日本語で歌うマリヤさんの素晴らしい響きのある声に久し振りの興奮を味わいました。

「輝く日を仰ぐ時」

「キリストには代えられません」

「３１２番、いつくしみ深き友なるエスは」

林さんの愛歌が次々と……。榎本先生はじめ多くの方が見えていました。林さんもチケットを買っておられたそうですが……。皆さんもきっと、それは林さんを天国に送るコンサートの様な気持ちで聞かれたのではないでしょうか。感謝の集いでした。

林さん、左様なら！。天国でまたお会いしましょう。その日までお元気で

左様なら！、　左様なら！

兄正二郎から与えて頂いたメッセージ

林　伊佐夫
（前田）

私と兄は、十三才年が離れています。歳が離れているせいもあるでしょうが、小さい時から亡くなるまで、兄を「正ちゃん！正ちゃん！」と呼び、慕い続けてまいりました。また兄も私を大変かわいがってくれ、父親以上の影響力を与えてくれました。

現在、私は名古屋に住んで、一麦教会へ連なっていますが、長い間、信仰から遠ざかっていた者が、信仰に立ち返ったのも、兄夫婦の祈りと、信仰に根付いた生活態度を見ていたからであり、そのことが立ち返る大きなきっかけの一つとなりました。今、兄の一生を顧みて、私はテモテ第二の四章七節の御言葉を覚えます。

【私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれでも授けて下さるのです。】

人間的にはもう少し長生きしてほしかった、一緒に旅行へ行ったりもしたかった、という思いもありますが。兄は、その死をもって【主に従い、信頼してゆく人生が、どんなに幸いな人生であるか】、この豊かなメッセージを残して天に帰りました。残された私たちは、兄のメッセージを決して無駄にしないように、この豊かな信仰を引き継いで行きたいと決心しています。

昨晩、兄が夢に初めて登場しました、その夢のシーンは【私がどこかへ出掛けるので、その準備をしていると、兄がお握りを作ってやるからもって行け】というような内容でした。実はこれは、亡くなる数週間前、私が九州出張で兄の家で一泊し、次の朝早く熊本へ出発するときに、兄が大きなお握りを作って持たしてくれた時の再現場面でした。今思いますと、あの時はしんどかったのだろうと、後で思ったのですが、兄はこのように終始一貫して、ごく自然に自分を犠牲にしても、人に優しい思いやりで尽くすことのできる兄でした。私はこんな兄を心から尊敬しています。正ちゃん、長い間、本当にご苦労様でした。そして正ちゃんが良くしてくださったことは決して忘れません。ありがとうございました。

弟伊佐夫より

天国のあなたへ

林　由記子
（前田）

アッというまにあなたが父なる神様のみ許に勝利をもって召されて、四ヶ月が過ぎました。

あなたが剪定して下さった梅の木に今年はたくさんの花が咲きました。きっと多くの実がつくことでしょう。
家の中にも外回りにも、至るところにあなたの面影が刻まれていて、私に語りかけて下さいます。
やさしかった、あなたとの数々の思い出が
次々と思い出されて、涙があふれてまいります。
こんな私に、いつも主が
内から力を与えて下さり、
慰めとはげましを与えて下さり、
強めて下さいます。

今、あなたは愛する主にまみえ、
そのみ腕の中で、
すべての重荷を解かれて、
喜びと感謝の日々を過ごしておられる事でしょう。

ふりかえってみますと、
三十一年間の結婚生活でしたが、到底、結婚など望めそうになかった境遇にありました私共二人を、主は不思議なみわざを持って合わせて下さいました。
ただただ、一方的な主の御愛のゆえですね。

日々に起こってくる、
様々な問題の中で、
その歩みの中で、
主はねんごろに御自身をあらわして下さり、
主の御愛と力とを深く、深く教えて下さいましたね。
どんな時でも、二人で心を合わせて祈る時、
この様な小さき者の祈りにも、常に耳を傾けて、
一足一足と、御手をもって導いて下さいました。
私共の歩んできた道は、
この世からみたら短い様に見えるかも知れないけど、
主はひとつひとつ勝利のみ手をもって支えて下さいました。
私共は何と幸いな、貴重な日々を過ごさせて頂いた事でしょう。

主イエス様の尊い、十字架のあがないの故に、
罪を赦されて、神の子とされ、あふるるばかりの御愛を注いでいただいて、主に触れさせて頂いた日々でした。

今、私の心は父なる神様とあなたに対して
感謝で一杯です。
ありがとうございました。

あなた、
どうぞ安心して下さいね。
この主が、これからも私を支えて、助けて下さる事を確信しています。
私も与えられた地上での日々を、
私を愛し、私のために命をすてて下さった、
この主の御愛におこたえして歩ませて頂きます。

そして、やがての日、天のみ国であなたにお会い出来る、
その喜びの時をめざして、
希望をもってイエス様を仰ぎつつ、
お従いしてまいります。

教会の記録（福岡大濠公園教会）

一九六七年（昭和42年）から一九九八年（平成一〇年）

一九六七年（昭和四二年）

三月　金生敏信さんと鈴木和子さんとの結婚式（三）

四月　折瀧鶴次郎牧師昇天（一〇）、教会葬（一三）

式辞　榎本利三郎牧師、弔辞と祝祷　藤村勇牧師、

聖書朗読　高橋文蔵牧師。

代務者を榎本牧師に依頼（藤掛、津留崎両兄お願いに行く。

一九六八年（昭和四三年）

四月　教会墓地を藤崎より平尾霊園へ改葬する（一〇）

仏木恒男兄と　美智子さんの結婚式（二一）

一九六九年（昭和四四年）

一月　新年聖会（五・七）

後任牧師として末永弘海牧師（姫路福音教会）を要請

榎本牧師と藤掛兄が姫路に出掛ける（二九）

［姫路の教会では二月二日に教会総会を開き、末永師の転出を決める予定］

二月　姫路教会で末永師の転出を正式に決定、四月八日に福岡へ来る予定（二）

三月　山本素磨子姉と矢儀光三郎さんの結婚式（一八、八幡前田教会）

四月　聖会（四一五）松岡忠次郎講師

末永師は姫路の後任者、岩井従男牧師の事情により、来福が延期となり、結局実現せず。

田中八重子姉と遠藤一成さんの結婚式（一一）

五月　火曜会が午後と夜の二回になる（二二）

一〇月　折瀧和幸兄と岡崎タケ子さんの結婚式（六）

一二月　榎本牧師に代務者から、福岡の専任牧師に就任をお願いに藤掛兄と花田兄とが八幡に出掛ける。（七）

八幡前田教会の役員（河本姉、高木兄、野村兄、伊規須兄）を交えて、

八幡との兼牧の形で了承を得る

一九七〇年（昭和四五年）

一月　八幡から野村兄が福岡の礼拝のご用を助けてくださる。榎本牧師は月に一回の礼拝、毎週の火曜会、

婦人会

四月　折瀧師記念聖会（一七－一八）松岡、藤村各師が講師

大石満利兄と宇野和子さんの結婚式（二〇）

五月　会堂、牧師館の雨ドイの付替え

七月　津屋崎夏期学校（二三－二五）

会堂にクーラー設置

一〇月　折瀧奥様の記念会（一八）

一九七一年（昭和四六年）

一月　新年聖会（五－七）

二月　小松陽子姉と桑島真次さんの結婚式（神戸生田教会）

三月　小松和代さん告別式（二四）

四月　折瀧師記念会（一一）

洗礼式（一一、松崎まり子）

花田かほる姉と内野和夫さんの結婚式（一六）

五月　婦人会旅行（一三、湯布院）小松姉の記念会を兼ねて

聖会（二八－三〇）予定が講師松岡師の怪我のため中止となる

七月　トイレ改修工事

一〇月　奏楽者はマクロスキー寿子姉から小松聡子姉に代わる

（一九七八・四まで）

一九七二年(昭和四七年)

一月　新年聖会（七－九）

三月　花田禎人さんと長曽我部芳子さんの結婚式（一二）

四月　下松洋子姉と花倉芳広さんの結婚式（二）

折瀧師五周年記念会（九）

大石大索兄と藤井紀子さんの結婚式（一九）

五月　藤掛信夫兄と大田一美姉の結婚式（一四）

六月　聖会（二－四）　講師　松岡師

平岡クマノ姉召天（三〇）

七月　津屋崎夏期学校（二四－二六）

八月　花田タカ姉召天（二六）

九月　馬場、中川結婚式（一七）

一〇月　婦人会旅行（一九－二〇、垂玉温泉）一七名参加

一一月　青木淳一兄と森克子さんの結婚式（三）

一九七三年（昭和四八年）

一月　谷口茂兄召天（二）
新年聖会（一三‐一五）
城戸高吉兄召天（二九）
一月　日本キリスト教団との包括関係を廃止、基督伝道隊となる
二月　野村兄に代って、伊規須兄が担当する
四月　都島春来兄召天（九）
六月　婦人会旅行（二九‐三〇、萩）　一四名参加

一九七四年（昭和四九年）
一月　新年聖会（六‐八）
松崎ひろ子姉、奏楽者に加わる
（一九七六・六まで）
二月　末永弘海師召天（六）
三月　末永弘海師記念会（九、末永家にて）
花田勝ちゃん召天（一五）
五月　会堂と諸集会場（旧牧師館）を一部増改築（三一）
九月　婦人会旅行（二八‐二九、津和野）　一五名参加
一〇月　内田弼さんと田代富美子さんの結婚式（二）
一二月　大石常広兄召天（一五）

一九七五年（昭和五〇年）
一月　新年聖会（四‐六）
若家族会が発足（一九）
三月　花田潤也兄と大久保千鶴子さんの結婚式（一六）
五月　小嶋栄一さんと田中恵美子さんの結婚式（四）
花田勇人兄と島村啓子姉の結婚式（五）
七月　所司由子姉召天（六）
夏期学校（二六‐二七）
一〇月　上野成理兄と平野みち子姉の結婚式（二六）

一九七六年（昭和五一年）
一月　新年聖会（四‐六）
五月　婦人会旅行（二八‐二九、島原、雲仙）一三名参加
一〇月　洗礼式（三一、折瀧義幸、スミエ、悦子、愛子、幸子、城戸義久、城戸厚子）

一九七七年（昭和五二年）
一月　新年聖会（五‐七）
四月　吉井ハル姉召天（一七）
五月　婦人会旅行（一六‐一七、筋湯）一四名参加
七月　榎本牧師が月二回の礼拝、毎週の火曜会、婦人会、

他は藤掛兄の体制になる
一〇月　四国・九州聖会(一一－一三、講師　岩井従男師)

一九七八年（昭和五三年）
一月　新年聖会(五－七)
四月　山本幾代姉奏楽者に加わる(一九八九・二まで)
五月　花田勇兄召天(三)
　　婦人会旅行(筋湯)一二名参加
六月　榎本牧師第一回アメリカ・カナダ旅行
　　(一一、七・一一帰国)
　　猪城みな子さん、猪城なみこ姉(一九八九・二まで)
　　奏楽者に加わる
一〇月　下松由美子姉と谷口秀輔さんの結婚式（八）
　　教会創立五〇周年感謝会をする(一五)
一一月　洗礼式(五、藤掛雅文、藤掛美、藤掛浩文、都島ア
　　サ子、谷口ミツ、花田勇人、啓子、仁、平岡恵一、
　　平岡和也、平岡聖教)

一九七九年（昭和五四年）
一月　新年聖会（五－七）
五月　榎本牧師第二回アメリカ旅行(一四)
六月　片岡保兄召天(二七)
　　会堂建築献金を始める

一九八〇年(昭和五五年)
一月　新年聖会(五－七)
五月　婦人会旅行(九－一〇、長崎)一三名参加
七月　折瀧義幸兄召天(三一)

一九八一年(昭和五六年)
一月　新年聖会（四－六）
八月　金生敏信さん告別式(五)
九月　洗礼式(二〇、上野みち子)
一二月　城戸シズカ姉召天(二)

一九八二年(昭和五七年)
一月　新年聖会(五－七)
　　竹末すが姉召天(一〇)
四月　谷口ミツ姉召天(一)
六月　婦人会旅行(四－五、嬉野)一二名参加
九月　折瀧正幸兄召天(一一)

一九八三年（昭和五八年）
一月　新年聖会（七‐九）
二月　矢儀説子さん奏楽者に加わる
（一九八五・五まで）
三月　津留崎美香子さんと蓑田和弥さんの結婚式（二〇）
五月　婦人会旅行（一三‐一四、垂玉）一一名参加
八月　猪城つる姉召天（二六）
一〇月　洗礼式（九、池田美子、津留崎潔）
一一月　久保山きの姉召天（二九）

一九八四年（昭和五九年）
一月　新年聖会
四月　第一回建築会議が持たれる（八）
五月　平岡富美子姉奏楽者に加わる（六）
婦人会旅行（二五‐二六、湯田温泉）一〇名参加
八月　旧会堂最後の礼拝（一九）、午後、仮会堂へ引越し
鈴木武生兄召天（二九）
九月　洗礼式（一六、加賀乃里子、平岡泰子）
平岡泰子姉奏楽者に加わる（二三、一九九七・一一まで）
一〇月　榎本牧師第一回肺炎で入院（一一・一〇退院）
新会堂上棟式（二二）
末永ふみ子姉召天（二八）
一一月　藤掛兄交通事故で入院（一九八五・二・二三退院）

一九八五年（昭和六〇年）
一月　新年聖会（五‐七）
二月　水曜日祈祷会は当分の間中止となる
新会堂落成式と感謝会（一一）
四月　榎本和義・文子献身生、実務担当者に任命（七）
五月　婦人会旅行（一〇‐一一、平戸）一七名参加
七月　夏期学校（二六‐二八、於　教会）
八月　婦人会の開始時間が午前一〇時三〇分からとなる
（一六）
九月　墓前礼拝が始まる（二二）
一〇月　連合婦人会の当番教会として聖愛ホーム訪問を行う
名古屋一麦教会　松原牧師の特別礼拝（一三）
礼拝の受付を置くようになる（一三）
四国・九州聖会（二二‐二四、講師　岩井従男師他）
一二月　「青年クリスマスの集い」（七）
燭火礼拝が行われる（二四）

一九八六年（昭和六一年）

一月　新年聖会（四－六）
所司金次郎兄召天（一四）
二月　正野悠子姉奏楽者に加わる（八）
青年会発足（二三）
三月　世界祈祷日婦人集会が当教会婦人会担当で開催（七）　九四名参加
イースター特別早天礼拝（二八－三〇）
五月　婦人会旅行（九－一〇、由布院）　一七名参加
大場春野姉召天（一四）
伊藤重平先生の講演会「よい子の育て方と難しい子のなおし方」を開催（一九）
洗礼式（二五、金生一郎）
六月　柴田しか姉召天（二〇、津屋崎にて）
七月　夏期学校（二五－二七、於　教会）
八月　婦人会夏期一泊修養会（一－二、於　教会）
九月　若家族会を「家族会」に改称（七）
一〇月　永島ツル姉召天（一〇）
一二月　「クリスマス青年の集い」（一三）
キャロリングを燭火礼拝に統合（二三）

榎本牧師第二回肺炎で入院
（二九、一九八七・二・一六退院）

一九八七年（昭和六二年）

一月　榎本牧師入院のため新年聖会は中止
成人祝福式（一八、花田勉さん、田中信治さん）
二月　内野かほる姉と尾下安長さんの結婚式（一五）
三月　榎本牧師全快感謝会（二一）
四月　火曜会が午前一〇時三〇分からの一回となる（七）
祈祷会が始まる（八）
岩永春子さん召天（二九）
五月　婦人会旅行（七－八、雲仙）　一五名参加
平岡和也兄と青柳和恵さんの結婚式（二四）
七月　小学科夏期学校（二四－二六、於　教会）
八月　第一回九重ファミリー・リトリート（二〇－二二）
九月　都島あさ姉召天（四）
阿部正敏さんと田坂光さんの結婚式（二三）

一九八八年（昭和六三年）

一月　新年聖会（一五－一七）
片岡松子姉召天（二四）

四月　教会創立六〇周年記念礼拝と感謝会（一七）
五月　婦人会旅行（一二・一三、オランダ村と武雄温泉）
一五名参加
小田裕江姉と本山悟さんの結婚式（二九）
六月　洗礼式（二六、田中久稔、善子、平野みさを、平野博）
七月　小学科夏期学校（二八・二九、油山キャンプ場）
八月　幼稚科おたのしみ会（三）
第二回九重ファミリー・リトリート（一一・一三）
一二月　「婦人のためのクリスマスの集い」（九）

一九八九年（昭和６４年／平成元年）
一月　新年聖会（一三・一五）
成人祝福式（一四、金生一郎兄、平岡泰子姉）
二月　［猪城なみ姉、自宅を全焼］
三月　城キミ姉召天（一四）
四月　教会学校は九時始まりとなる（二）
早天祈祷会（火・土）始まる（一一）
五月　婦人会旅行（一一・一二、萩、湯本温泉）　一五名参加
六月　洗礼式（二七、高橋博之）
七月　田中サチ子さんと島田浩一さんの結婚式（八）
上野幸清兄召天（八）
八月　第三回九重ファミリー・リトリート（一〇・一二）
中高生サマーキャンプ（一七・一九、海の中道海浜公園）
九月　藤掛浩文兄と阿部素子さんの結婚式（三）
一〇月　婦人会一日親睦会（一三、海の中道マリンワールド）

一九九〇年（平成二年）
一月　新年聖会（一三・一五）
成人祝福式（一四、高橋博之兄、遠藤千賀子さん）
二月　花田裕子ちゃん召天（五）
四月　折瀧道守兄召天（一二）
五月　婦人会旅行（二四・二五、杖立温泉）一六名参加
八月　教会学校サマーキャンプ（九・一一、英彦山）
第四回九重ファミリー・リトリート（一六・一八）
一〇月　西森三晴さんと船橋麻里子さんの結婚式（二七）
一一月　ワゴン車「ホーミー」が備えられる（二五）

一九九一年（平成三年）

一月　新年聖会(一三-一五)
岩崎光子姉召天(一四)
成人祝福式(一五、矢儀説子さん)
榎本利三郎牧師第三回目の肺炎で入院(三〇、二一九退院)
三月　榎本和義師按手礼を受ける(二四)
四月　榎本利三郎牧師、福岡大濠公園教会牧師を退任(一)
五月　平野博兄と児島和美姉の結婚式(三)
婦人会旅行(三〇-三一、阿蘇・九重)
七月　仏木七日代姉召天(一九)
八月　教会学校・青年会サマー・キャンプ(一五-一七、英彦山)
一一月　榎本利三郎前牧師謝恩感謝会(四)

一九九二年(平成四年)
一月　新年聖会(一-三)
＊わたしは神である、今より後もわたしは神である。
＊神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。
＊あなたは、わたしに従ってきなさい。

成人祝福式(一二、林真希子さん)
四月　日曜日夜の伝道集会が始まる(五)
洗礼式(二八、水原篤子　病床にて)
水原篤子姉召天(二八)
五月　早天祈祷会を休止(三)
洗礼槽を講壇下に設置工事(一一-三〇)
婦人会旅行(七-八、津和野)
六月　洗礼式(七、矢儀説子)
牧師体調を崩し入院(二〇-七・二三)
伝道集会は休止(二〇)
九月　牧師室改造工事
一〇月　岩田マサ子姉召天(二八)

一九九三年(平成五年)
一月　新年聖会(一-三)
＊わたしは全能の神である。
＊わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。
＊主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。

五月　婦人会旅行（六－七、吉野ヶ里・古湯）
平岡恵一兄と吉岡麻衣子姉との結婚式（二九）
六月　平野和美姉転入会（二七、活けるキリスト一麦教会より）
七月　日曜日夜の伝道集会再開（四）
八月　金生兄の献身式（1）
第五回サマー・リトリート（五－七）
一一月　城正俊兄召天（三〇）
一二月　洗礼式（一二、貞頼子）
花田仁兄堅信式（二六）
中旬に電子式オルガンが納入される
岡野オルガン奉献感謝（二六）

一九九四年（平成六年）
一月　新年聖会（一－三）
＊わたしの仕える万軍の主は生きておられる。
＊わが義人は、信仰によって生きる。
＊神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。
二月　金生薫姉召天（五）
四月　金生兄関西聖書神学校入学（三）
五月　婦人会旅行（一二－一三、古湯）
洗礼式（一五、山中良美）
大石恭稔兄召天（三〇）
七月　「オルガン演奏の夕べ」開催（三一、池田泉先生演奏）
一〇月　鹿田誠一兄転会（五、日本キリスト教団弥生教会へ）

一九九五年（平成七年）
一月　新年聖会（一－三）
＊強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。
＊ダビデの子孫として生まれ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストをいつも思っていなさい。
＊愛する者たちよ、わたしたちは今や神の子である。
成人祝福式（一五、花田照二郎さん、青木たまみさん）
平岡聖教兄と高木京子さんとの結婚式（一六）

三月　内田勇四郎さん召天(二一)

一二月　服部進兄、アイ子姉転入会(三一、日本キリスト教団有田教会から)

阿部千鶴姉転入会(三一、日本キリスト教団中部教会から)

一九九六年(平成八年)

一月　新年聖会(一‐三)

＊わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。

＊恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。

＊愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。

成人祝福式(一四、正野聖美さん、貞伴枝さん)

二月　折瀧和幸兄召天(八)

洗礼式(二〇、山本譲　病床にて)

三月　山本譲兄召天(九)

洗礼式(三一、郡優吏佳)

八月　「さんびと証」伝道集会(一八、サンダーあかね姉)

藤掛邦夫兄召天(三一)

一九九七年(平成九年)

一月　新年聖会(一‐三)

＊神を信じなさい。

＊恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのものだ。

＊すべて神の御霊に導かれているものは、すなわち神の子である。

成人祝福式(一二、上野正裕さん、花田仁兄、郡優吏佳姉)

二月　安恒輝子姉転入会(二、日本福音ルーテル西福岡教会から)

三月　金生献身生神学校卒業(七)

金生献身生の派遣式(二三、八幡前田教会へ)

六月　油谷正經兄、英子姉転入会(一五、日本キリスト教団浜寺教会から)

七月　斎藤杉子姉召天(一)

八月　「さんびと証」伝道集会(一〇、サンダーあかね姉)

松崎まり子姉転会(二四、鹿児島バイブルチャーチ

（）

一一月　平岡泰子姉と澤野信さんの結婚式（二二、広島牛田教会にて）

一二月　洗礼式（二八、中島恵子）

一九九八年（平成一〇年）

一月　新年聖会（一－三）

＊足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っている

その場所は聖なる地だからである。

＊わたしはアルパであり、オメガである。

＊主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。

二月　矢儀説子姉と平野康則さんとの結婚式（二八）

四月　洗礼式（一九、花田勉）

花田文子姉召天（二四）

五月　小松清次さん（小松聡子姉義父）召天（一九）

洗礼式（二四、井上正道、折瀧タケ）

七月　青年会キャンプ（於　五島浜ノ浦）（三〇－八・一）

一〇月　青木たまみさんと尾上修一さんとの結婚式（三一）

1999年１月１日　　八幡前田教会（１）

1999年１月１日　　八幡前田教会（２）

1999年１月１日　　八幡前田教会（３）

1999年１月17日　　福岡大濠公園教会

編集後記

◎『ぶどうの木』第二七号をお届けします。

◎　多くの方からの恵みのお証を読ませていただき、この一年も主の恵みのうちにあったことを感謝しております。

◎『わがたましいよ、主をほめよ、
そのすべての恵みを心にとめよ。』
（詩篇一〇三篇二節）

恵みを心にとめ、忘れないようにするため、今後もお証、またカットなどを随時募集しております。

◎発行が遅くなり、すみませんでした。

発　行　一九九九年一一月

発行者　北九州市八幡東区前田一―一〇―三
基督伝道隊　八幡前田教会
牧　師　榎本　利三郎

発行所　基督伝道隊
八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

印刷製本　北九州印刷株式会社